

# 東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 平成 11 年度 —

平成 12 年 3 月

東大阪市教育委員会

# **東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告**

**— 平成 11 年度 —**

**平成 12 年 3 月**

**東大阪市教育委員会**

## 例　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会文化財課が、東大阪市建設局下水道部の委託を受け、平成11年1月～12月末日まで実施した公共下水道管きょ築造工事に伴う埋蔵文化財調査の概要報告である。
2. 本書には鬼塚遺跡、西ノ辻遺跡、市尻遺跡、山畠古墳群、北島遺跡、段上遺跡、下六万寺遺跡、鶴立遺跡、水走遺跡、神並遺跡、鬼虎川遺跡、楽音寺遺跡、山畠遺跡、神並古墳群、北島池遺跡、植附遺跡、五合田遺跡、芝ヶ丘遺跡、西代遺跡、コモ田遺跡、馬場川遺跡、善根寺山遺跡、河内寺跡、中垣内遺跡、和泉遺跡の概要を収録した。
3. 現場は勝田邦夫、才原金弘、坂田典彦、東徹志、永田朋子がおこない、報告の分担は各章の表に記した。
4. 本書に収録した現場写真は、各担当者が撮影し、遺物写真は株式会社スタジオG・Fプロに委託して実施した。
5. 土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じている。
6. 調査の実施にあたっては、東大阪市建設局下水道部のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には後藤一郎、西野剛、国分陽介、小野瀬智子、山口香、川内清、井筒美智弓、河村恵理、武山愛、海野直子、榎山裕美子、里百代、大嶋和代、井上幸子、椋田和博、八田美代子、吉田綾子、坂野正典、小野友記子、大山えりか、井上成が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

## 目 次

第1章	平成11年度の下水道関係調査について	1
第2章	鬼塚・西ノ辻遺跡の調査	4
第3章	市尻遺跡・山畠古墳群の調査	6
第4章	北島遺跡の調査	8
第5章	鬼塚遺跡の調査	10
第6章	段上(第9次)・下六万寺遺跡(第4次)の調査	12
第7章	構立遺跡の調査	26
第8章	水走遺跡の調査	28
第9章	鬼塚遺跡の調査	30
第10章	神並遺跡の第24次調査	36
第11章	鬼塚・鬼虎川遺跡の調査	44
第12章	楽音寺遺跡の調査	47
第13章	山畠遺跡・山畠古墳群の調査	50
第14章	神並古墳群の調査	55
第15章	暗峠越奈良街道の調査	57
第16章	北島池遺跡の調査	59
第17章	植附遺跡の調査	62
第18章	鬼虎川遺跡の調査	67
第19章	段上(第10次)・下六万寺(第5次)・その他遺跡の調査	69
第20章	芝ヶ丘遺跡の調査	75
第21章	コモ田遺跡の隣接地の調査	77
第22章	コモ田遺跡の第3次調査	79
第23章	鬼虎川遺跡の第50次調査	86
第24章	楽音寺遺跡の第4次調査	118
第25章	馬場川(第11次)・西代遺跡の調査	126
第26章	山畠古墳群の調査	150
第27章	善根寺山遺跡の調査	152
第28章	河内寺跡の調査	154
第29章	中垣内遺跡の調査	156
第30章	和泉遺跡の第1次調査	158

## 第1章 平成11年度の下水道関係調査について

平成10年度より東大阪市教育委員会文化財課では、直営事業として下水道管理設工事に伴う発掘調査を実施している。下水道工事は前年と同様に東地区を中心におこなわれた。

今年度の調査件数及び調査内容の概略は下記の調査一覧表に記した。調査にあたり下水道部と文化財課で協議した。調査は道路の迂回路が確保できないなど、種々の条件により立会調査が大部分を占めた。また、交通量の問題から夜間工事になり、調査を断念した工区もある。

今年度の調査成果はコモ田遺跡の範囲が南に広がることや和泉遺跡で確認例のない布留期の遺構及び遺物包含層を検出したことなどがある。また、鬼虎川遺跡では、集落の東側にあたると考えられる地点で遺構の確認ができた。馬場川遺跡でも縄文時代後期の土器が多量出土した。

今回の収録した調査は平成11年1月1日より12月31日までに実施したものとし、それ以後のものは、次年度に報告することにした。

平成11年度下水道工事に伴う埋蔵文化財の調査一覧表

(平成11年1月1日～12月31日)

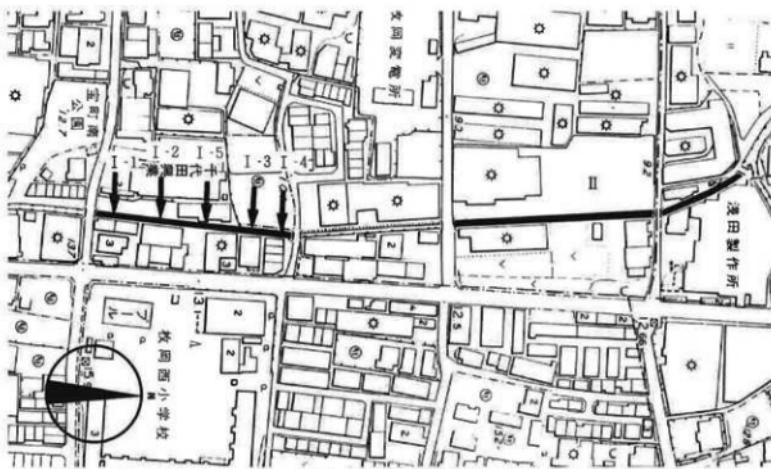
	届出番号	丁番番号	遺跡名	届け出工事名称	発生場所	調査	調査期間	担当者	調査結果・所見
1	10-424	下-114	鬼塚遺跡	平成9年度公共下水道第1-1工区管さよ整庭工事	宝町境内	立会	11.1.18 11.4.20	才原金弘、 第2章で報告。	
2	10-425	下-115	道ノ辻遺跡	平成9年度公共下水道第1-1工区管さよ整庭工事	弥生町境内	立会	同上	同上	
3	10-453	下-128 10-2-1	山崎内遺跡	平成10年度公共下水道第1-1工区管さよ整庭工事	鳳池山町境内	発掘	11.1.25 ～ 11.2.22	才原金弘、 第3章で報告。	
4	10-454	下-127	北馬場遺跡	平成10年度公共下水道第1-1工区管さよ整庭工事	鳳池山町境内	発掘	同上	同上	
5	10-455	下-130 10-2-21	北鳥池遺跡	平成10年度公共下水道第10工区管さよ整庭工事	下六万寺町3丁目地内	発掘			工事実施。
6	10-456	下-131 10-2-21	浅土遺跡	平成10年度公共下水道第10工区管さよ整庭工事	下六万寺町3丁目地内	立会	11.2.18 ～ 11.4.6	水田勝子、 第4章で報告。	
7	10-457	下-131 10-2-21	下六万寺遺跡	平成10年度公共下水道第10工区管さよ整庭工事	下六万寺町3丁目地内	立会	同上	同上	
8	10-458	下-131 10-2-21	堀又遺跡	平成10年度公共下水道第8工区管さよ整庭工事	堀又町境内	立会	11.3.5 ～ 11.3.30	才原金弘、 第5章で報告。	
9	10-521	下-13-15	堀野遺跡	平成10年度公共下水道第6工区管さよ整庭工事	松原町1丁目	立会	11.5.28 ～ 11.6.1	船山由で報告。	
10	10-522	下-13-12	鬼虎川遺跡	平成10年度公共下水道第2工区管さよ整庭工事	宝町境内	発掘			在用工事のため既工事にて変更、工事実施。
11	10-523	下-10-43 (未)	鬼塚遺跡	平成10年度公共下水道第20工区管さよ整庭工事	宝町境内	立会	11.4.7 ～ 11.5.23	水田勝子、 第11章で報告。	
12	10-524	F-10-43 (未)	鬼虎川遺跡	平成10年度公共下水道第20工区管さよ整庭工事	宝町境内	立会	同上	同上	
13	10-541	F-10-44	神寺遺跡	平成10年度公共下水道第18工区管さよ整庭工事	神寺町1丁目地内	立会	11.4.9 ～ 11.6.8	末 瞳志、 第19章で報告。	
14	10-554	下路-169	北鳥池遺跡	平成10年度公共下水道第16工区管さよ整庭工事	若草町一丁目地内	発掘	11.6.2 ～ 11.6.11	坂山義洋、 第16章で報告。	
15	10-575	下路-177	鬼虎川遺跡	平成10年度公共下水道第27工区管さよ整庭工事	弥生町境内	発掘			在用工事のため既工事にて変更、工事実施。
16	11-20	F-設-9	北鳥池遺跡	平成10年度公共下水道第32工区管さよ整庭工事	中石切町7丁目地内	立会	11.2.8 ～ 11.5.28	才原金弘、 第4章で報告。	
17	11-69	下路-16	鬼塚遺跡	平成11年度公共下水道第32工区管さよ整庭工事	宝町境内	立会	11.2.15 ～ 11.4.7	才原金弘、 第5章で報告。	

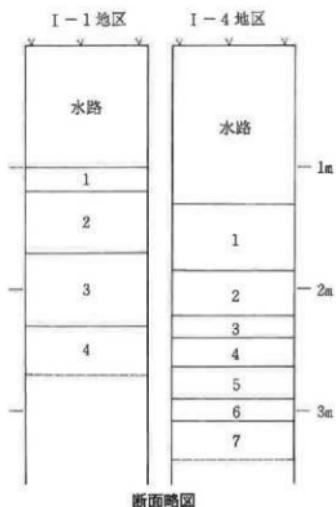
	届出番号	下水番号	道跡名	発生の工事名稱	発生場所	調査	調査期間	報告者	調査結果・所見
18	II-92	下設-18	鬼怒川 道路	平成10年度公共下水道第32工 区管きよ整造工事	宝町～駒野 立会	立会	11.3.4 ～ 11.3.9		試験溝在施場。GL-1.7m まで確認。壁面文化財は後 山地です。既設管の下側まで 確認したが、それより下は 確認していないため、工事 にあたっては社会調査が必要 です。事前に文化財課まで 連絡願います。
19	II-121	下設-53	木戸 道路	平成10年度公共下水道第46工 区管きよ整造工事	木戸1～2丁 立会	立会	11.3.25	才原金弘	第8章で報告。
20	II-122	下設-54	鬼怒 道路	平成10年度公共下水道第47工 区管きよ整造工事	西庄町～駒野 町	立会	11.3.20 ～ 11.3.20	坂田典作	第9章で報告。
21	II-123	下設-52	ヨシ田 道路	平成10年度公共下水道第43工 区管きよ整造工事	六万寺町2.1 日高町内	立会	11.3.2 ～ 11.11.9	坂田典作	第2.2章で報告。
22	II-124	下設-50	越前 道路	平成10年度公共下水道第41工 区管きよ整造工事	西石切町3丁 目～5丁目	立会	11.3.10 ～ 11.3.12		現況は未踏である。工事は 既設工事であり、立会を立 会調査。遺構、遺物は検出 できなかった。
23	II-125	下設-51	鬼怒川 道路	平成10年度公共下水道第40工 区管きよ整造工事	西石切町3丁 目～5丁目	立会	同上		同上
24	II-126	下設-48	山側 道路	平成10年度公共下水道第38工 区管きよ整造工事	上郷町町内	立会	11.3.7 ～ 11.7.12	坂田典作	第1.3章で報告。
25	II-127	下設-49	山側 古墳群	平成10年度公共下水道第36工 区管きよ整造工事	上郷町町内	立会	同上		同上
26	II-128	下設-47	西代 道路	平成10年度公共下水道第33工 区管きよ整造工事	横小路町3丁 目	立会			平成1.1年3月12日調査。
27	II-129	下設-46	東谷寺 道路	平成10年度公共下水道第28工 区管きよ整造工事	横小路町4丁 目	立会	11.4.14 ～ 11.5.29	水田嗣子	第1.2章で報告。
28	II-130	下設-45	神楽 道路	平成10年度公共下水道第21工 区管きよ整造工事	東石切町1丁 目地内	直系			丁字状。
29	II-146	下設-57	北島池 道路	平成10年度公共下水道第39工 区管きよ整造工事	みや守町3丁 目	立会			夜間工事のため既往工事に 変更。工事実施。
30	II-166	下設-72	五合谷 道路	平成10年度公共下水道第52工 区管きよ整造工事	東宏町823番 地内	立会			夢見若木のため。確認でき なかった。
31	II-167	下設-71	北島池 道路	平成10年度公共下水道第52工 区管きよ整造工事	東宏町823番 地先	直系			夜間工事のため既往工事に 変更。工事実施。
32	II-168	下設-68	桂島東 道路	平成10年度公共下水道第60工 区管きよ整造工事	桂島町1丁目 2661～4丁目 629地先	立会	11.3.18 ～ 11.9.8		延べ4日の立会調査を実施。 工事は既設工事でおこなわ れ、立会の立会調査を実施 したが遺構、遺物は検出で きなかった。
33	II-169	下設-74	河内寺 道路	平成10年度公共下水道第50工 区管きよ整造工事	河内町497～ 410	立会	11.9.14 ～ 11.10.19	才原金弘	第2.8章で報告。
34	II-170	下設-62	山側 古墳群	平成10年度公共下水道第37工 区管きよ整造工事	西島町513～ 461地先	立会	11.9.1 ～ 11.10.22	才原金弘	第2.6章で報告。
35	II-171	下設-79	芝ヶ丘 道路	平成10年度公共下水道第58工 区管きよ整造工事	中石切町4丁 目231～299	立会	11.10.18 ～ 11.11.18		延べ5日の立会調査を実施。 工事は既設工事でおこなわ れ、立会の立会調査を実施 したが遺構、遺物は検出で きなかった。
36	II-172	下設-73	神楽 道路	平成10年度公共下水道第50工 区管きよ整造工事	中石切町5丁 目7893～2913	直系	11.10.18 ～ 11.10.19	水田嗣子	第3.0章で報告。
37	II-173	下設-69	神楽 古墳群	平成10年度公共下水道第45工 区管きよ整造工事	上石切町1丁 目 東石切町3丁 目	立会	11.10.7 ～ 11.9.14	才原金弘	第1.4章で報告。
38	II-174	下設-66	神楽 道路	平成10年度公共下水道第10工 区管きよ整造工事	中石切町6丁 目2931～2942	直系			夜間工事のため既往工事に 変更。工事実施。
39	II-290	下設-36	五合谷 道路	平成10年度公共下水道第30工 区管きよ整造工事	未適用	立会	11.6.21 ～ 11.9.1	末 錦志	第1.9章で報告。
40	II-291	下設-35	没上 道路	平成10年度公共下水道第30工 区管きよ整造工事	十六万寺3丁 目	立会	同上	同上	同上
41	II-292	下設-37	北島池 道路	平成10年度公共下水道第30工 区管きよ整造工事	未適用	立会	同上	同上	同上

	福井番号	下水番号	道路名	福井の工事名称	調査場所	調査	調査期間	報告者	調査結果・所見
42	II-293	F整-34	下六万寺 道路	平成10年度公務下水道第306工 区管きよ整造工事	F六万寺3丁 目	立会	11.6.21 ～ 11.9.1	米 健志	第1章で報告。
43	II-320	F設-85	芝ノ丘 道路	平成10年度公務下水道第62工 区管きよ整造工事	北石切町地内	立会	11.7.5 ～ 11.7.23	才原金弘	第2.0章で報告。
44	II-322	F整-218	林坂 道路	平成10年度公務下水道第301工 区管きよ整造工事	中石切町3丁 目地内	立会	11.6.8 ～ 11.10.1	坂田典厚	第1.7章で報告。
45	II-406	協-11-12	丸山川 道路	平成10年度公務下水道第61工 区管きよ整造工事	株金町	発掘	11.8.3 ～ 11.12.20	第 旗志	第2.3章で報告。
46	II-409	協-11-13	丸山川 道路	平成10年度公務下水道第62工 区管きよ整造工事	東町・新町	立会	11.10.16 ～ 11.12.7	才原金弘	第8日までの立会調査を実施。 地表下1.5mまでは砾上。以 來文化層への影響はなかった。
47	II-410	協-10-61	東今守 道路	平成10年度公務下水道第63工 区管きよ整造工事	雄小路町5丁 目	立会	11.8.3 ～ 11.12.26	才原金弘	第2.4章で報告。
48	II-411	協-11-30	西ノ庄 道路	平成10年度公務下水道第65工 区管きよ整造工事	東山町	立会	11.11.19 ～ 11.12.7		第8日までの立会調査を実施。 地表は木筋であり、埋藏文 化財への影響はなかった。
49	II-412	協-11-30	神楽 道路	平成10年度公務下水道第65工 区管きよ整造工事	東山町	立会	同上		
50	II-413	協-11-8	日下 道路	平成10年度公務下水道第67工 区管きよ整造工事	日下町7丁目	立会			平成11年6月29日追加。
51	II-414	協-11-32	新板寺山 道路	平成10年度公務下水道第71工 区管きよ整造工事	新板寺町6丁 目	立会	11.9.14 ～ 11.10.22	才原金弘	第2.7章で報告。
52	II-415	協-11-07	西代 道路	平成10年度公務下水道第78工 区管きよ整造工事	横小路町4丁 目	発掘	11.8.23 ～ 11.11.24	坂田典厚	第2.5章で報告。
53	II-416	協-11-07	丸山川 道路	平成10年度公務下水道第78工 区管きよ整造工事	雄小路町4丁 目	発掘	同上	同上	
54	II-495	下設-133 協-11-36	中嶋内 道路	平成11年度公務下水道第5工 区管きよ整造工事	青根町等4丁 目	立会	11.9.28 ～ 11.11.24	才原金弘	第2.9章で報告。
55	II-496	下設-132	鬼丸川 道路	平成11年度公務下水道第3工 区管きよ整造工事	鬼丸町	立会			平成11年8月20日追加。
56	II-497	下設-131 協-11-36	西ノ庄 道路	平成11年度公務下水道第3工 区管きよ整造工事	西山町	立会			平成11年8月20日追加。
57	II-498	下設-130 協-11-76	千手寺山 道路	平成11年度公務下水道第1工 区管きよ整造工事	上石切町2丁 目～東石切町4 丁目	立会	11.11.22 ～ 新横中		立会調査中。
58	II-499	下設-129 協-11-54	鬼塚 道路	平成10年度公務下水道第77工 区管きよ整造工事	雨森町～新町	立会	11.11.15 ～ 新横中		立会調査中。
59	II-500	下設-128 協-11-42	元子谷 道路	平成10年度公務下水道第75工 区管きよ整造工事	小石切町2丁 目	立会			平成11年8月20日追加。
60	II-500	下設-127 協-11-22	丸山川 道路	平成10年度公務下水道第69工 区管きよ整造工事	西石切町4丁 目～5丁目	立会	11.11.15 ～ 新横中		立会調査中。
61	II-500	下設-125	青葉 古賀野	平成11年度公務下水道第11工 区管きよ整造工事	青葉町4丁 目	立会			平成11年10月5日追加。
62	II-607	下設-171 協-11-14	朝日坂 空兵街	平成10年度公務下水道第63工 区管きよ整造工事	立花町坂内	立会	11.11.25 ～ 新横中		立会調査中。
63	II-609	下設-175 協-11-52	鬼塚 道路	平成11年度公務下水道第9工 区管きよ整造工事	豊浦町	立会			平成11年11月3日追 加。
64	II-620	下設-176 協-11-05	下六万寺 道路	平成11年度公務下水道第11工 区管きよ整造工事	下六万寺町2 丁目	立会			平成11年11月3日追 加。
65	II-681	下設-177 協-11-47	林坂 道路	平成11年度公務下水道第20工 区管きよ整造工事	山田町地内	立会			平成11年11月3日追 加。
66	II-692	下設-176 協-11-47	青葉 古賀野	平成11年度公務下水道第20工 区管きよ整造工事	山田町地内	立会			平成11年11月3日追 加。
67	II-693	下設-179 協-11-35	鬼塚野 街道	平成11年度公務下水道第25工 区管きよ整造工事	青板寺町5丁 目～21丁目	植承			平成11年11月3日追 加。
68	II-694	下設-180 協-11-05	中嶋内 道路	平成11年度公務下水道第32工 区管きよ整造工事	六万寺3丁 目	植承			平成11年11月3日追 加。
69	II-695	下設-181 協-11-75	日上 道路	平成11年度公務下水道第32工 区管きよ整造工事	六万寺3丁 目	立会			平成11年11月3日追 加。

## 第2章 鬼塚・西ノ辻遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成 9 年度公共下水道第 1-1 工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市弥生町～宝町地内
3	調 査 面 積	573m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成 11 年 1 月 18 日～4 月 20 日（延べ 11 日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼塚・西ノ辻遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約 3m で長さ約 191m の間であり、開削工法である。管布設の予定地は現況の水路下（新川）になる。





## 1. 調査の概要

### I - 1 地区の層序

第1層 水路のヘドロ。

第2層 にぶい黄色 (10Y6/4) シルト。

第3層 灰色 (7.5Y4/1) 砂。

第4層 黄色 (2.5Y7/8) シルト。

### I - 4 地区の層序

第1層 水路のヘドロ。

第2層 にぶい黄橙色 (2.5YR6/3) シルト。

第3層 暗緑灰色 (10Gy 7/1) シルト。

第4層 灰黄褐色 (10YR4/2) 碳混シルト。

第5層 暗緑灰色 (5Gy 1/1) 砂質シルト。

第6層 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土。

第7層 暗緑灰色 (10Gy4/1) 中膠混土。

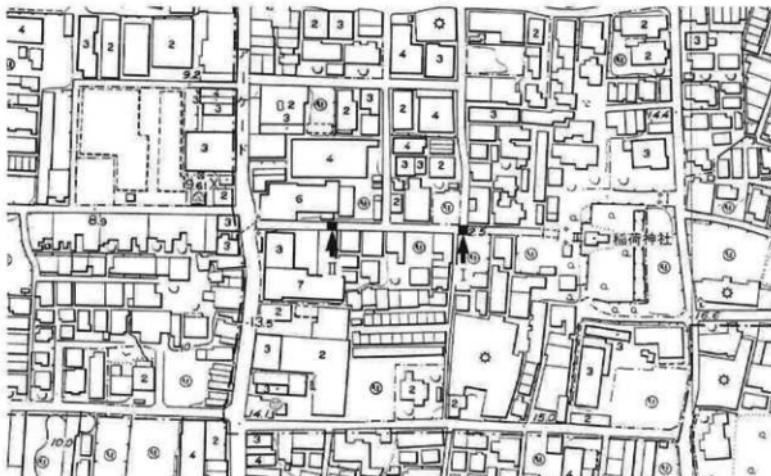
## 2. まとめ

立会調査を実施したが遺構、遺物は検出できなかった。現況の水路（新川）開削工事の時に削平を受けている可能性が高い。

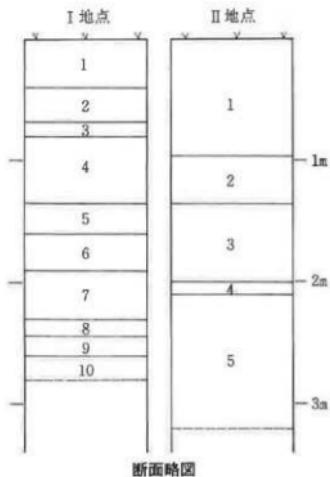


### 第3章 市尻遺跡・山畠古墳群の調査

	名 称	内 容
1 事 業 名		平成10年度公共下水道第1工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点		東大阪市瓢箪山町地内
3 調 査 面 積		10m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間		平成11年1月25日～2月2日（延べ7日）
5 報 告 担 当		才原金弘
6 調 査 の 経 過		上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は市尻遺跡・山畠古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。調査地点は工事が推進工法でおこなわれることから立坑の2ヶ所である。調査範囲は2×2.5mである。I地点より西側の一部で開削工法による工事が予定されていたが、夜間のため発掘調査はできなかった。



調査地点位置図 (1/2500)



### 1. 調査の概要

#### I 地点の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 緑黒色(5G2/1)シルト。
- 第3層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト。
- 第4層 黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土。土師器片を少量含む。
- 第5層 黒色(10YR2/1)粘土。
- 第6層 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。
- 第7層 暗緑灰色(10G4/1)粘土。
- 第8層 暗灰黄色(2.5Y4/1)シルト。
- 第9層 黒色(2.5GY2/1)砂質シルト。
- 第10層 緑灰色(5G5/1)粘土。

#### II 地点の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土。
- 第3層 黄褐色(2.5Y5/4)粘土。
- 第4層 灰色(10YR4/1)砂質シルト。
- 第5層 緑灰色(10GY5/1)シルト。

### 2.まとめ

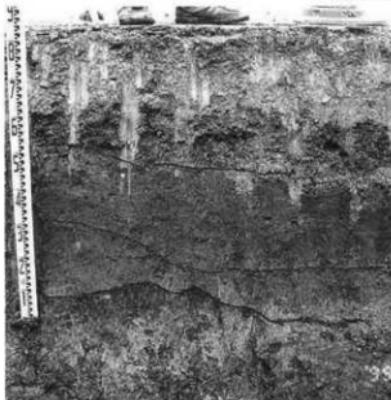
I 地点の第4層で土師器片を少量検出したが時期は不明であり、明確な遺物包含層ではない。



調査状況



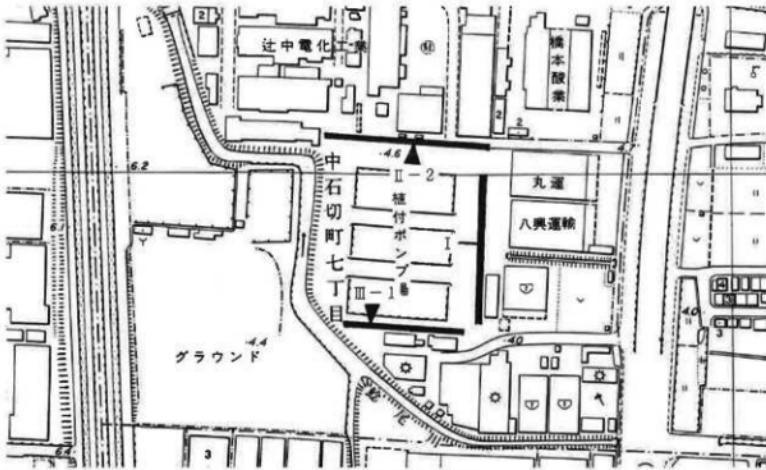
調査風景

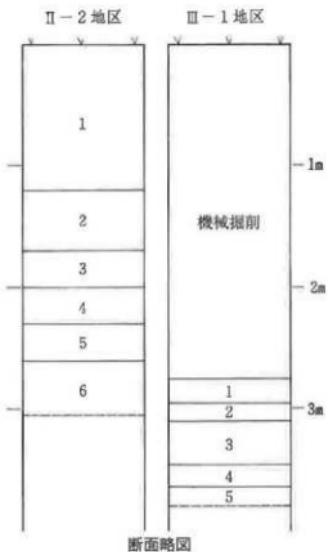


調査地断面

## 第4章 北島遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成10年度公共下水道第3工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市中石切町7丁目地内
3 調 査 面 積	478m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間	平成11年2月8日～5月28日（延べ22日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は北島遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は大部分が開削工法であるが、推進工法の場所が一部ある。工事予定地は南、北、東の3方向であり、コの字形になる。立会調査は幅約1.3～2.1mで長さ約257mの範囲である。





### 1. 調査の概要

#### II-2 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂混じり砂。

第3層 明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂質シルト。

第4層 緑灰色 (10GY6/1) シルト。

第5層 暗青灰色 (10BG4/1) 砂混じり砂。

第6層 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土。

#### III-1 地区

第1層 暗緑灰色 (5G4/1) 砂礫。

第2層 緑灰色 (2.5Y6/6) 砂質シルトと粘土の互層。

第3層 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘土。

第4層 緑灰色 (10GY5/1) 砂礫。

第5層 青灰色 (10BG5/1) 砂混じり粘土。

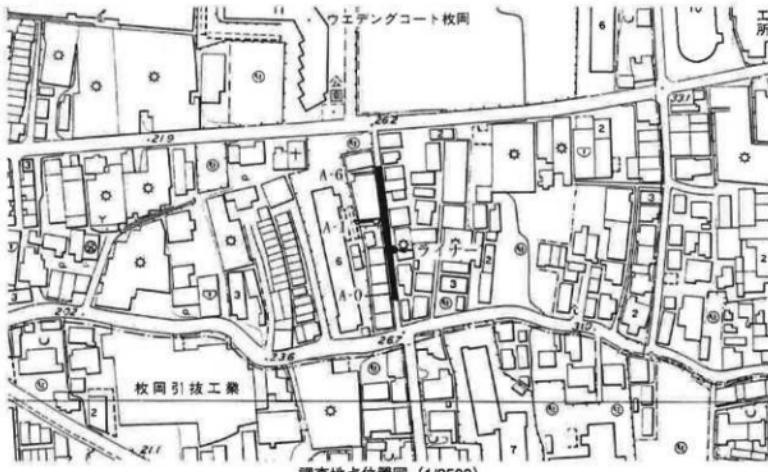
### 2. まとめ

III-1 地区の第4層より磨滅した須恵器片を検出したが、明確な遺物包含層や遺構は確認できなかった。

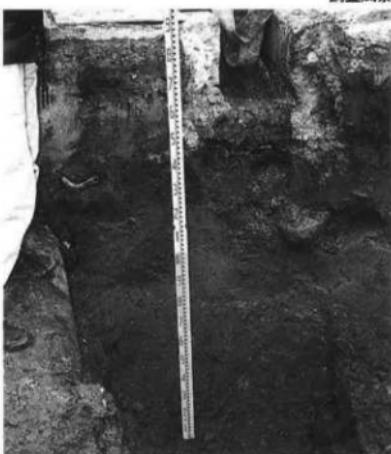
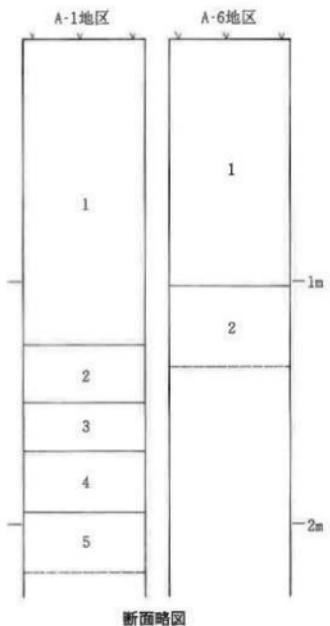


## 第5章 鬼塚遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成9年度公共下水道第212工区菅きよ鑄造工事
2 調 査 地 点	東大阪市南莊町地内
3 調 査 面 積	101m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間	平成11年2月15日～4月7日（延べ11日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は大部分が開削工法であるが、推進工法の場所が一部ある。立会調査は幅約0.9mで長さ約116mの範囲である。



調査地点位置図 (1/2500)



### 1. 調査の概要

#### A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色 (2.5Y3/1) 硫混じり粘質シルト。

第3層 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質シルト。

第4層 黒色 (10Y2/1) シルト。

第5層 オリーブ黒色 (7.5Y2/2) 硫混じり砂。

#### A-6 地区の層序

第1層 盛土。

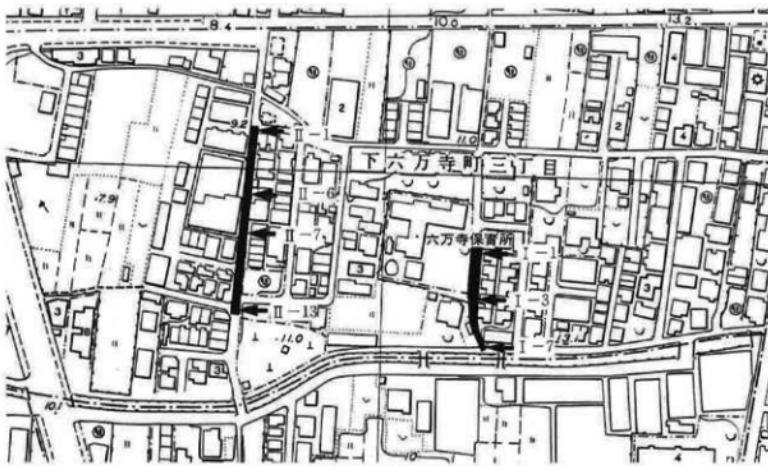
第2層 黒色 (5Y3/2) 粘質土。

### 2. まとめ

立会調査を実施したが遺構、遺物は検出できなかった。

## 第6章 段上(第9次)・下六万寺遺跡(第4次)の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成10年度公共下水道第10工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市下六万寺3丁目地内
3 調 査 面 積	171m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間	平成11年2月16日～4月6日（延べ27日）
5 報 告 担 当	永田朋子
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は段上・下六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は2地区に分かれ、開削工法である。Ⅱ地区の南側が下六万寺遺跡、他が段上遺跡である。工事範囲は幅約0.9～1.0mでⅠ地区が長さ51m、Ⅱ地区が長さ約95mである。



## 1. 調査概要

今回の調査は下水管布設地区が2地区あったため、便宜上生駒山に近い方をI地区(東)、もう一方をII地区(西)と呼称した。一日の調査分を一つの地区として区分し、I地区は計7、II地区は計13に分け、北を始点、南を終点として調査を実施した。

## 2. 層位

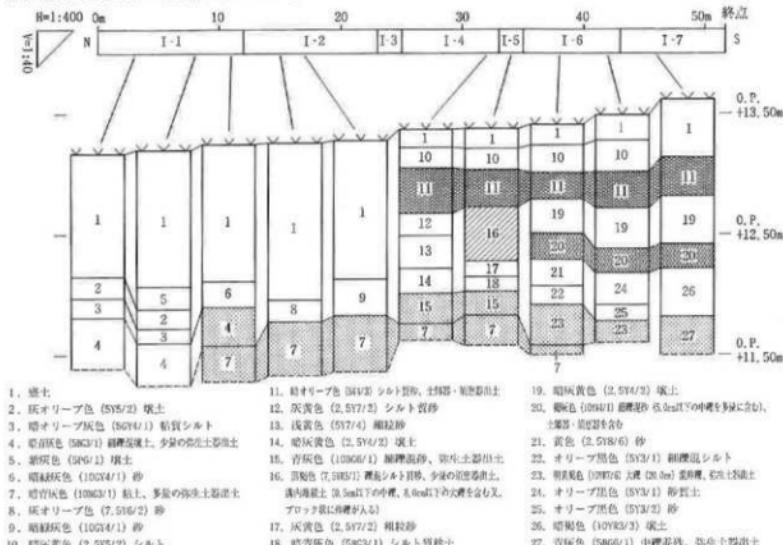
I・II地区共に断面柱状図を作成した。可能な限り同層と思われるものを統一して掲載した。掘削深度は地点によって異なり、I地区では約1.8~2.2m、II地区では約2.0~2.8mまで掘削している。両地区共に南へ寄る程掘削深度が深くなっている。I地区の北半分の上層は既設管で搅乱されていたが、地表下約1.8m以下には安定した弥生時代後期の土器を含む層が存在し、調査終点付近のI-6地区で管底より下へ潜っている。南半分では地表下0.5mと1m付近に古墳時代中期～後期の土器を含む層が2層認められた。II地区は地点によって堆積状況が変化するが、調査地全域で遺物を包含する層が確認された。管底直上の層にはI地区と同様に安定した弥生時代後期の土器を含む層が存在している。しかし、掘削深度の関係で層厚は確認出来なかった。既設管の搅乱を受けていない地点では地表下0.5~1mの間で古墳時代後期の土器を含む層が1層あるいは2層存在している。

## 3. 遺構

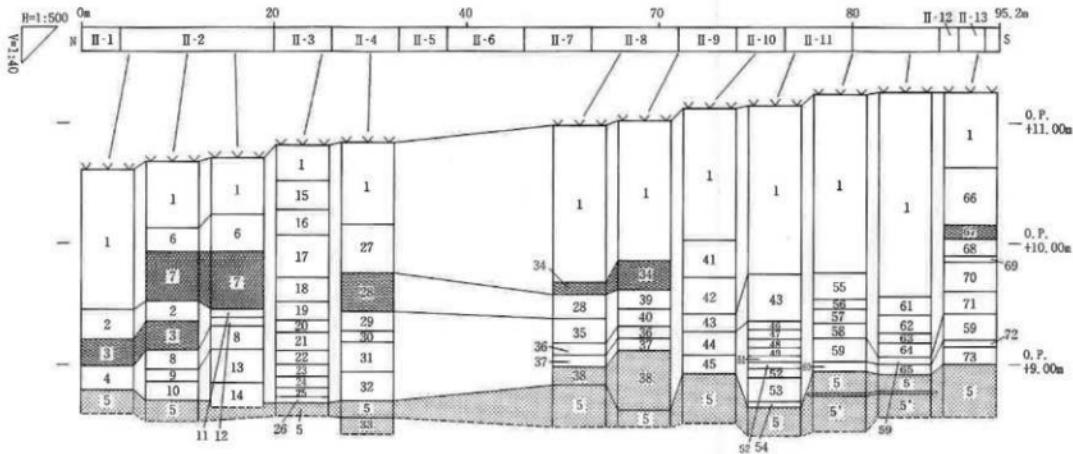
I-5地区第4層で古墳時代後期の溝を断面観察の際に確認した(I地区断面柱状図第16層)。溝の幅は不明である。深さ約45cmを測る。溝内から須恵器片(15・21)が出土している。

## 4. 出土遺物

弥生時代中期～後期の土器・土製品、古墳時代中期～後期の須恵器・土師器・韓式系土器・製塙土器、奈良時代初頭の須恵器が出土した。



I地区断面柱状図



1. 盛土  
2. 緑灰土 (10G15/1) 細繊混土  
3. 黒色 (10G4/1) 砂質土、土層基・根莖器出土  
4. オリーブ色 (10G3/1) 中粒砂とシートの瓦層  
5. 黒色 (2.5G2/1) 細繊混粘土、多量の微生物土  
6. 緑灰土 (10G16/1) 細繊混  
7. 黒色 (2.5G1/1) 細繊混シート、土母層・根莖器出土  
8. 緑灰土 (5G2/1) 粒質シート  
9. オリーブ色 (2.5G3/1) 細繊混  
10. オリーブ灰 (2.5G1/1) 中粒砂  
11. 緑灰土 (10G16/1) 粒質シート  
12. 黒白色 (20G7/1) 粒質シート  
13. オリーブ黒色 (7.5T3/1) 砂質 (0.7m) 以下  
14. 黑色 (2.5G1/1) 細繊混シート (上部の層を含む)  
15. 黑色 (2.5G1/2) 黒色 (下部の大層を含む)  
16. 鮎オーライプ (3V4/1) 細繊混粘土  
17. 黑色 (3V5/1) 細繊混粘土  
18. オリーブ色 (5V6/1) 砂質 (1.0cm以下)  
19. 黑色 (9T7/1) 砂質  
20. 青灰色 (5G6/1) 粒質  
21. オリーブ色 (2.5G3/1) 砂質 (0.5cm以下)  
22. 黑色 (10V4/1) 粒質  
23. 黑色 (2.5V6/1) 細繊  
24. 黑色 (10V4/1) 粒質  
25. 黑色 (K7/1) 砂質 (1.0cm以上)  
26. 黑色 (2.5V6/1) 細繊 (0.5cm以上)  
27. 仁木黄色 (2.5V3/2) 中粒混粘土  
28. 黑色 (2.5V3/2) 中粒混土  
29. 黑色 (2.5V3/2) 中粒混シート  
30. 黑色 (M6/1) 中粒砂  
31. 緑灰土 (5G6/1) 中粒混シート  
32. 黑色 (7.5T3/1) 砂質 (1.0cm以下)  
33. 黑色 (10G16/1) 細繊混粘土、微生物土  
34. 黑色 (7.5T3/1) 砂質 (1.0cm以下)  
35. 黑色 (10G16/1) 細繊混粘土  
36. 黑色 (2.5V6/1) 細繊混土  
37. 黑色 (2.5V6/1) 細繊混  
38. 黑色 (2.5V6/1) 中粒混シート  
39. 黑色 (2.5V6/1) 中粒混  
40. 鮎オーライプ灰 (2.5G4/1) 細繊混シート質砂  
41. 黒細混色 (10G4/1) 粒土  
42. 黒黄褐色 (10V4/2) 粒土  
43. 黒灰黄色 (2.5V4/2) 粒質土  
44. 明赤褐色 (5V8/8) 中粒混土  
45. 黑方木色 (5G4/2) 細繊  
46. 黑褐色 (2.5V4/2) 細繊混シート質砂  
47. 黑褐色 (10V2/2) シート質砂  
48. オリーブ色 (5V2/1) シート質砂  
49. 明赤褐色 (5V8/3) 中粒混質土  
50. 黑褐色 (10V5/6) 細繊砂  
51. 黑細混色 (2.5V4/2) 粒土  
52. 黑黃褐色 (10V5/5) 中粒混粒質土  
53. オリーブ褐色 (2.5V4/2) 中粒混  
54. 黑色 (7.5V4/2) 砂質 (0.5cm以下)  
55. 黑褐色 (2.5V4/2) 粒土  
56. 黑細混色 (10G4/1) 粒土  
57. 黑褐色 (10G4/1) 粒砂  
58. 黑色 (7.5V1/1) 砂質  
59. 黑色 (10V4/1) 砂質  
60. 黑細灰土 (5G4/1) 中粒砂  
61. 黑細灰土 (10G4/1) シート質砂土  
62. 黑細灰土 (10G4/1) 粒質土  
63. 鮎オーライプ灰色 (5G4/1) 粒質土  
64. 細繊灰土 (10G4/1) 粒砂  
65. オリーブ灰色 (7.5V3/1) シート質砂土  
66. 黒オーライプ色 (5V4/2) 壤土  
67. 黒オーライプ色 (5V4/3) 中粒混シート質砂  
68. 黑土基・根莖器出土  
69. 黑黄褐色 (10V4/2) シート質砂  
70. 明赤褐色 (5V5/8) 中粒  
71. 鮎オーライプ灰色 (5G4/1) 粒質土  
72. 黑細灰土 (10G5/1) 粒砂  
73. 黑細灰土 (10G4/1) シート質砂

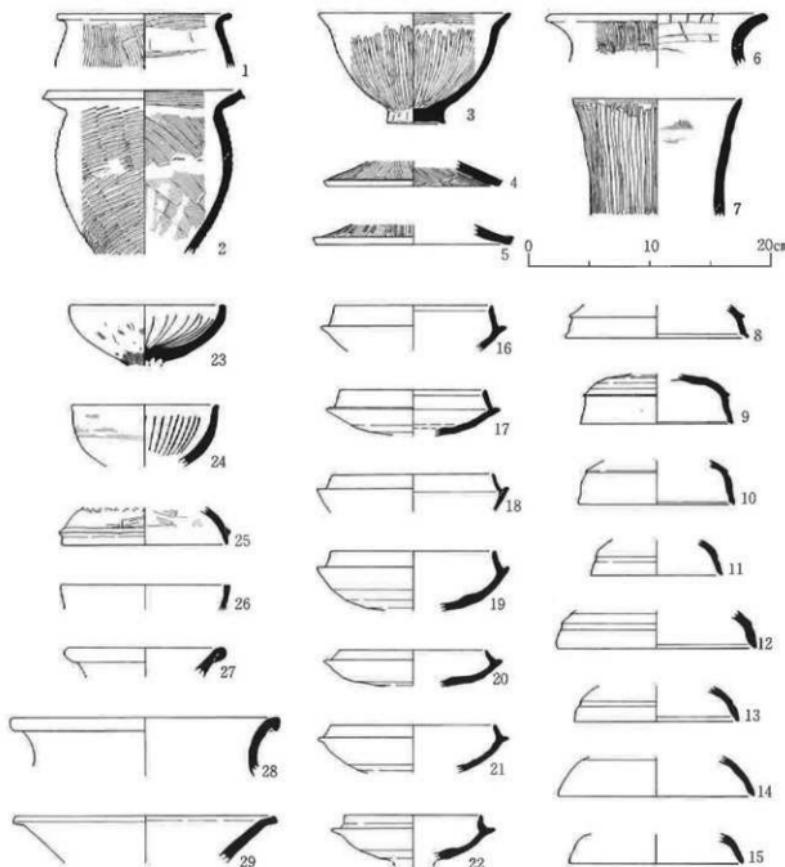
II 地区断面柱状図

1) 弥生時代畿内第Ⅲ様式の土器

少量出土した。1は甕で、口縁部は張りのある体部から強く外反し、口縁端部を丸く終える。内面は横方向のハケメの後道具でナデ調整し、体部外面は縱方向のハケメ調整を施す。生駒西麓産である。

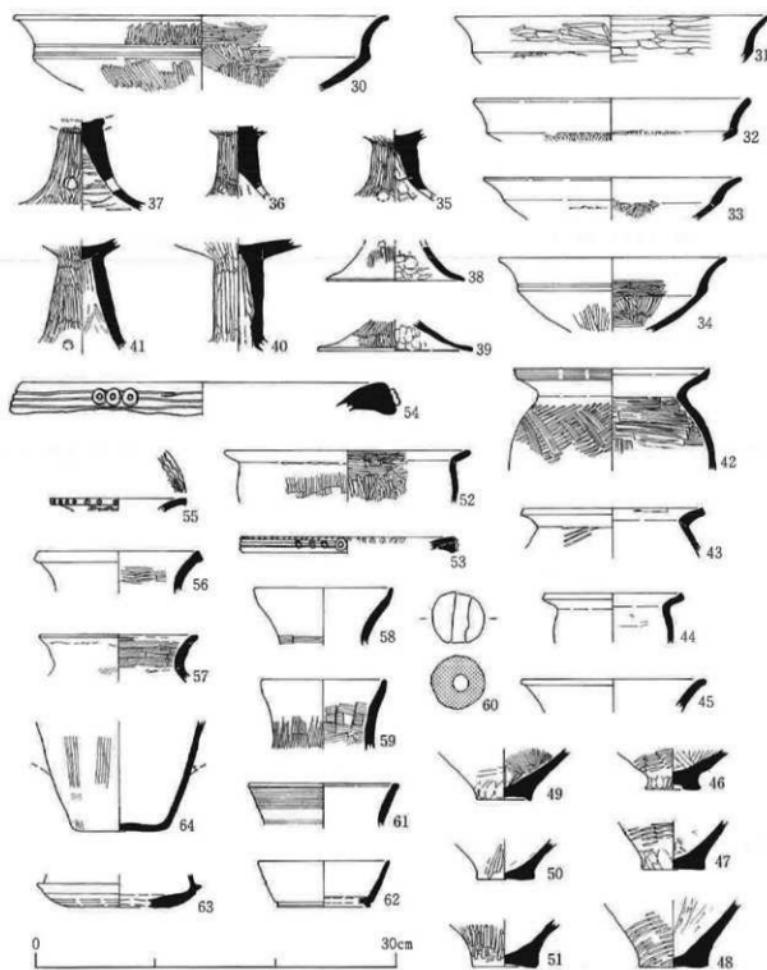
2) 弥生時代畿内第Ⅴ様式の土器・土製品

器種は甕、鉢、壺、高杯がある。甕は2・42~44でいずれも口径16cm以内の小型品である。2の胴部には2段階のタタキが施され、内面もハケメによって平滑に仕上げられている。42は受口状口縁の外面に2条の凹線紋、胴外面はタタキの後にハケメ調整が加えられている。43・44の口縁外面には擬凹線紋がみられる。43は口縁端部が外反し、44は内弯気味に外反して終る。3・52は鉢である。3は



I 地区出土土器実測図

わずかに外反する口縁部で、端部は面を持って終る。口縁内部はヨコナデの後に横方向のハケメを施している。体部の内外面は丁寧な縦方向のヘラミガキで仕上げられている。52は張りの少ない体部から「く」の字形に口縁部が外反する。外面にはハケメ、内面には細かいヘラミガキ調整を施している。壺には広口壺・長頸壺・直口壺がある。6・53~57は広口壺である。6・45・55~57は頸部から口縁部へとゆるやかに外反し、その内の6・45・57は端部を丸く收める。55は口縁端部外面に竹管紋を施



II 地区出土土器・土製品実測図

し、内面には稚拙な波状紋を巡らしている。7は円筒形の口頭部を持つ長頸壺である。口縁端部には擬凹線紋が巡り、工具痕を端部に残しながら密なヘラミガキ調整を頭部に施している。58・59は直口壺で、口縁端部を丸く終える。58はややひらき気味の逆「ハ」の字形で、内外面共にヨコナデ調整、頭部にハケメが残る。4・5・30~41は高杯である。30~34は杯体部から角度をかえて外反する口縁部をもつものである。内外面はヨコナデ・ヘラミガキ調整である。31は杯の内面が工具によってナデ調整されている。30~34は体部と口縁部の境に1条或は2条の凹線紋を巡らす。4・5・38・39は脚部の裾部である。4・5は接地部分に明瞭な面を持っている。38~39は器壁が薄く、端部を丸く終えている。35~37・40・41は脚柱部で、全て中空か半中空である。46~51は底部で、46~48は外面がタタキ調整である。51の外面調整は擬方向のヘラケズリが施されている。60は円形土錐で焼成前に両側から穿孔されている。重さ約83g。40・41・52が非河内産で、他のものは生駒西麓産である。

### 3) 古墳時代中期～後期の須恵器・土師器、奈良時代初頭の須恵器

器種は須恵器杯蓋・有蓋高杯・壺、土師器の高杯・杯蓋・鉢がある。8~15は須恵器杯蓋である。8は下外方向にのびる比較的長い稜を有している。口縁部は「ハ」の字形に外反し、端部は凹状に仕上げている。9・10は天井部からほぼ直下に下る形の口縁部で、口縁端部は内傾する凹面が明瞭な段をなしている。10の稜は短く丸い形だけのものとなっている。11~13は形骸化した稜が付されている。14・15は稜の痕跡が全く見られず、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描いている。16~21・63は杯身である。16・17の口縁端部は内傾した明瞭な段を有し、受部はやや短く横へ伸びている。杯身の立ち上りは16が比較的高くわずかながら内傾し、17~19・63は比較的低く内傾気味に立ち上っている。18の受部には接合痕が見られやや短く上方に伸びている。19は内面が赤褐色、外面が紫褐色を呈している。20・21は杯身の立ち上りが短く内傾し、全体的に丸みを帯びている。21の内底面には同心円当て具痕がわずかに残存している。22は有蓋高杯で、杯部に杯蓋の杯身を転用したものと思われる。26~28・61は須恵器壺である。26・61は直口壺、27・28は広口壺である。26の口縁部はわずかに内傾し、端部を凹状に仕上げている。61はゆるやかに外反する口縁部で端部は丸く、口頭部にカキメ調整を施している。27は口縁端部を丸く外側に折り込み、内外面をロクロナデで整えている。28は外反する口縁部で頭部は短い。外面に自然釉が付着している。23~25・29・64は土師器である。23・24・29は高杯で、23・24は瓶状の杯部を有している。外面はハケメの後ヨコナデ調整、内面はヨコナデの後放射状の暗文が施されている。口縁端部は23が面を持ち、24が丸く収めるものである。29は口縁部が強く外反し、全体をナデによる調整で仕上げている。25は須恵器を模倣して作られた土師器の杯蓋である。須恵器の供給が少ない頃、土師器の制作集団によって作られたものと考えられる。稜は貼り付けで、稜の上部には沈線が巡り、下部には調整時につけた爪の痕跡が残存している。ハケメの後ヨコナデ調整を施された天井部には稚拙な波状紋が巡る。内面はハケメの後ヨコナデ調整をし端部を丸く整えている。64は把手付きの鉢である。外面と内面底部はナデ調整、内面体部は下から上へのケズリ調整を施す。土師器は全て生駒西麓産である。62は奈良時代初頭の須恵器杯で口径10.8cm 器高3.8cmを測り、全体をロクロナデで整える。

### 5. まとめにかえて

今回の調査は立会調査であったにも関わらず採集した土器量は約3コンテナにも及んだ。I地区では古墳時代後期、II地区では弥生時代後期の土器が中心に出土した。土器の出土量から遺跡の広がりを想定すると、古墳時代後期にはI地区を中心にII地区まで広がり、逆に弥生時代後期にはII地区が中心にI地区まで広がっていたと考えられる。立会調査という制限の関係上遺構はほとんど確認出来なかつたが、周辺には古墳時代後期と弥生時代後期の集落が広がっていたと考えられる。



I 地区始点造景



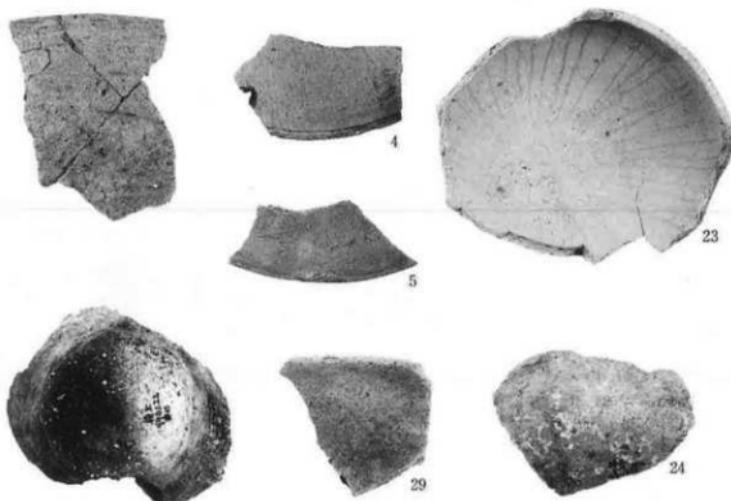
II-2 地区断面



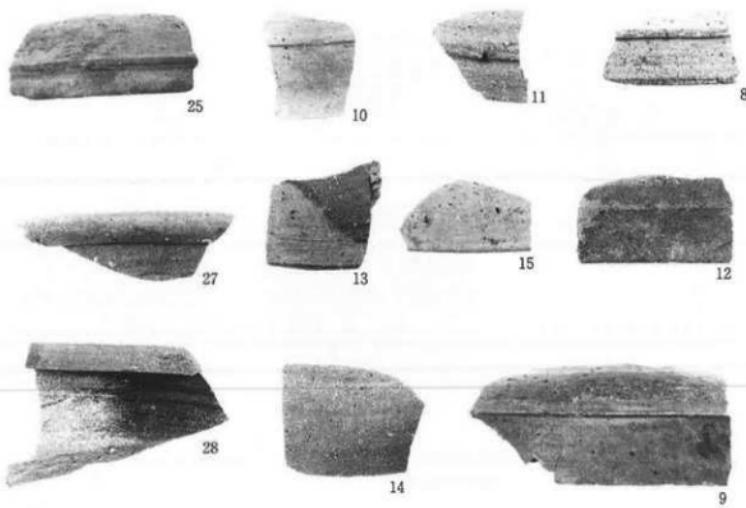
II-4 地区断面



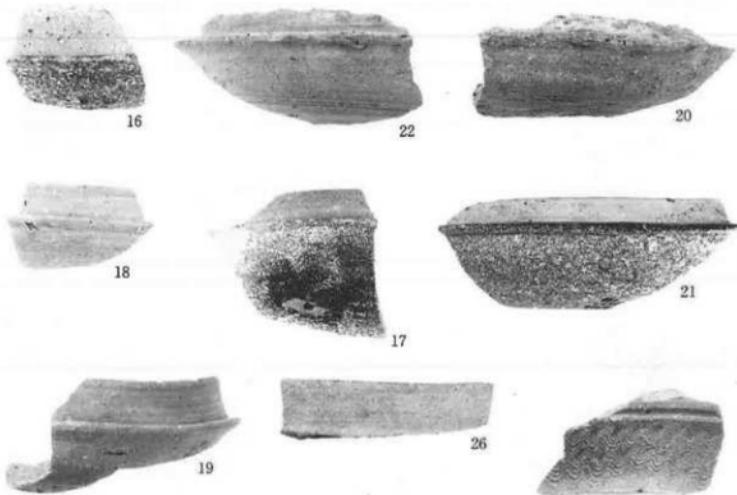
1. I 地区出土 弥生土器



2. I 地区出土 弥生土器・土篩器



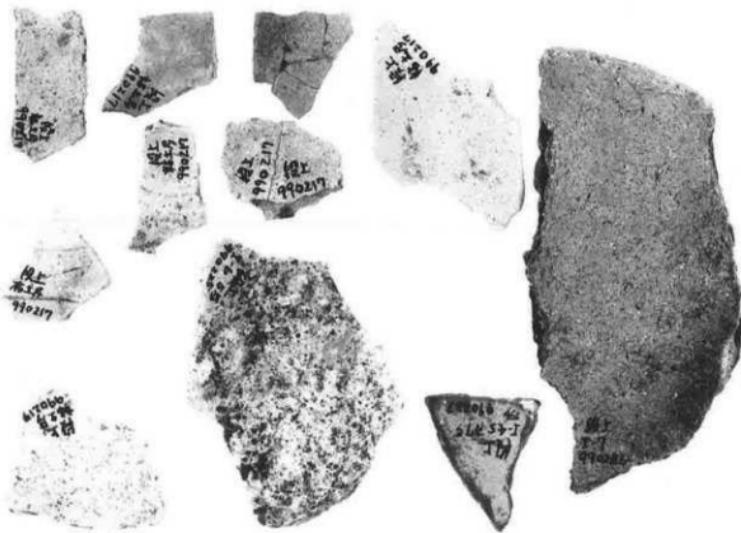
3. I 地区出土 须恵器



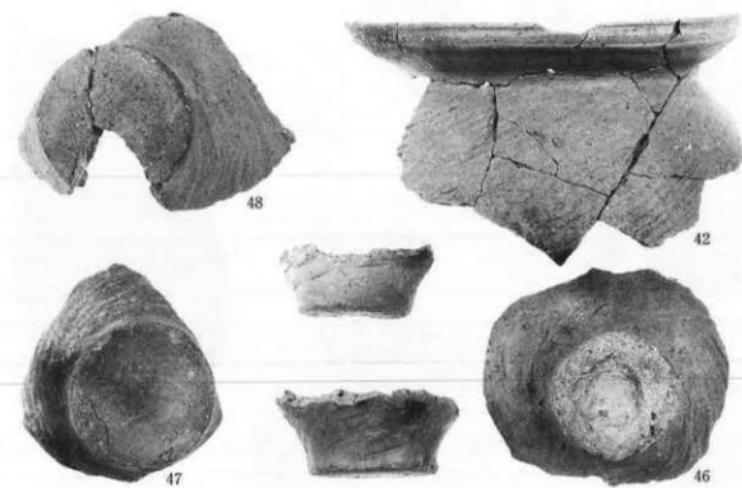
4. I 地区出土 须恵器・土篩器



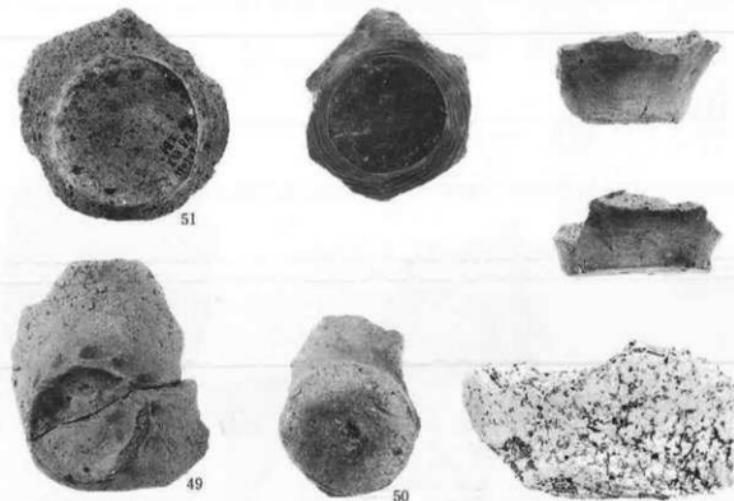
5. I 地区出土 製塙土器・韓式系土器（表面）



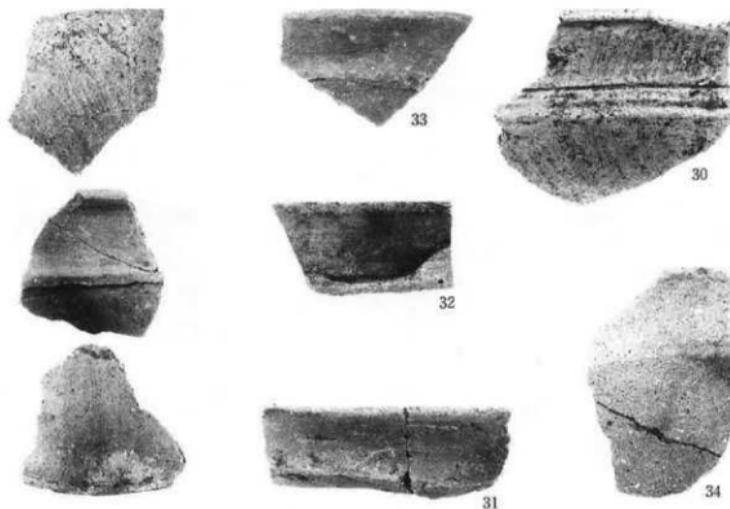
6. I 地区出土 製塙土器・韓式系土器（裏面）



7. II 地区出土 弥生土器



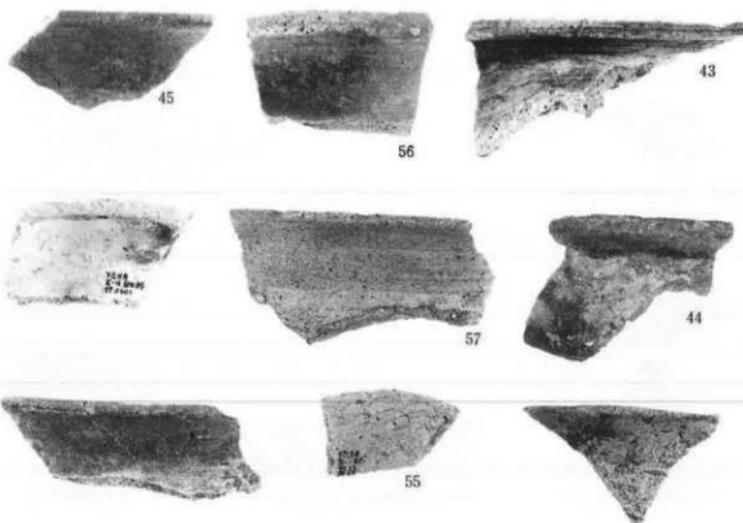
8. II 地区出土 弥生土器底部



9. II 地区出土 弥生土器高杯



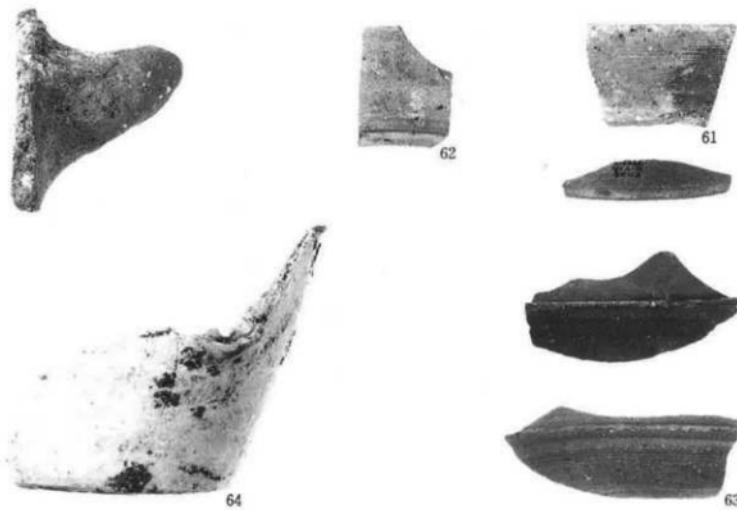
10. II 地区出土 弥生土器高杯



11. II 地区出土 赤生土器



12. II 地区出土 异生土器壹·土鏡



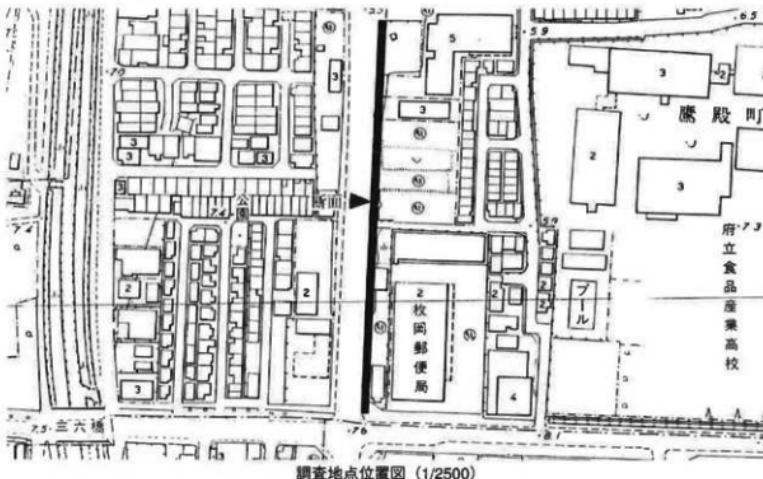
13. II 地区出土 須恵器・土師器

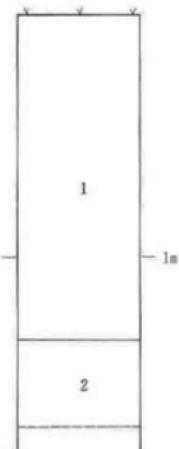


14. II 地区出土 漢生土器（線刻土器）

## 第7章 鶴立遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第8工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市鷺殿町地内
3	調 査 面 積	203m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年3月5日～3月30日（延べ11日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鶴立遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事予定地は大阪外環状線（国道170号線）の東側歩道である。工事は幅約0.9～1.1mで長さ約214mの間であり、開削工法である。





断面略図

1. 調査の概要

層序

第1層 盛土。

第2層 暗緑灰色

(10GYA/1) 粘土。

2. まとめ

立会調査を実施したが、工事の掘削深度がほとんど盛土直下であり、埋蔵文化財への影響はなかった。



調査地遠景



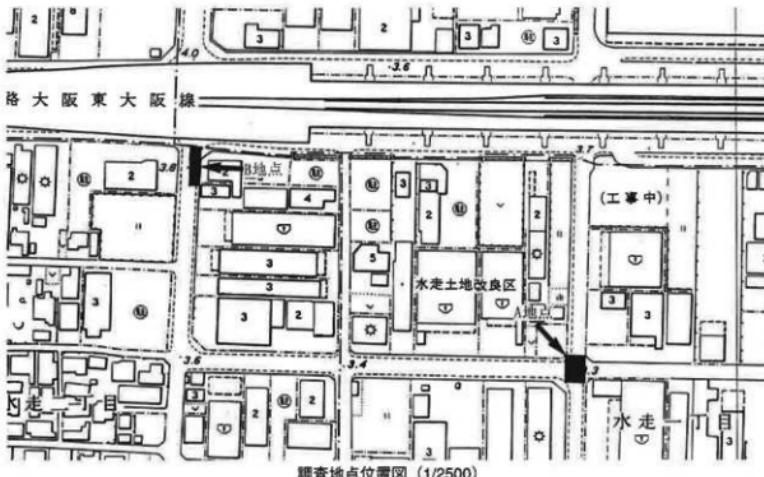
調査風景



調査地断面

## 第8章 水走遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第46工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市水走1~2丁目
3	調 査 面 積	8m <sup>2</sup> (2ヶ所)
4	調 査 期 間	平成11年3月25日~5月12日 (延べ9日)
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は水走遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は推進工法であり、立坑の2ヶ所である。立坑はライナーブレートであり、径2mと2.5mの範囲である。



## 1. 調査の概要

工事予定地の2ヶ所を立会調査したが、遺構、遺物は検出できなかった。また、工事の都合により断面実測図は作成できなかった。



調査地遠景



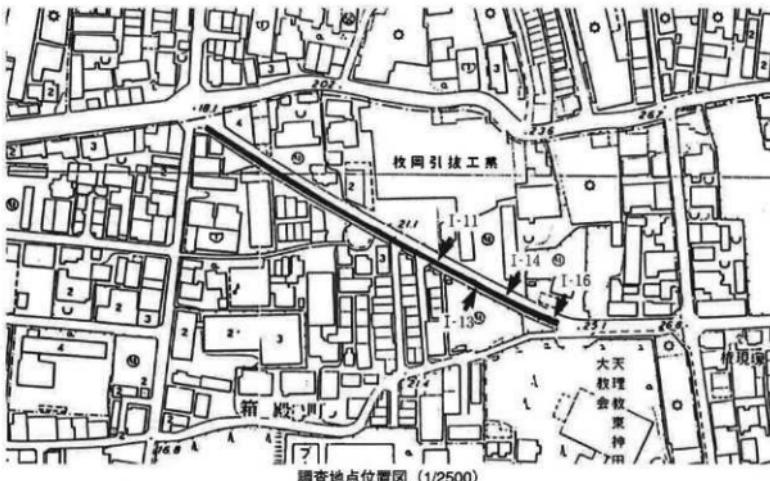
調査地遠景

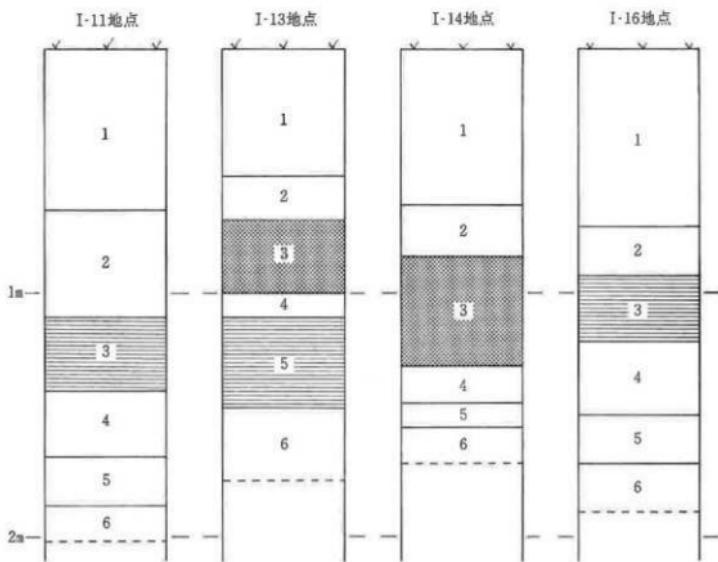


調査風景

## 第9章 鬼塚遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成 10 年度公共下水道第 47 工区管きよ染造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南莊町～箱殿町
3	調 査 面 積	224 m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成 11 年 3 月 29 日～4 月 20 日（延べ 14 日）
5	報 告 担 当	坂田典彦
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約 0.9m で長さ約 263m の間であり、開削工法である。





調査地区断面図

## 1. 調査の概要

本調査は、箱根駅東の交差点から天理教教会まで、延べ230mの間で実施した。遺物は調査始点から150m程南東のI-11地点から終点までの間で検出された。包含層は現地表面から-1m前後の黄褐色シルト層を主体とし、層厚は30~40cmを測る。各地点の断面図詳細は以下に記す。

## 2. 層序

### I-11地区

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗緑灰色(10G3/1)礫混じりシルト。3.0cm以下の中礫多く含む。
- 第3層 暗灰黄色(2.5Y4/2)礫混じりシルト。2.0cm以下の中礫含む。弥生時代後期の包含層。
- 第4層 暗褐色(10YR3/4)シルト。
- 第5層 オリーブ黒色(10Y3/2)礫。10cmの大礫。
- 第6層 暗灰色(10YR5/1)粘質土。

### I-13地区

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰色(5Y5/1)シルト。
- 第3層 灰色(10Y4/1)礫混じりシルト。3.0cm以下の中礫含む。古墳時代初頭の包含層。
- 第4層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

第5層 黄褐色(2.5Y5/4)シルト。炭化物含む。弥生時代中～後期の包含層。

第6層 暗青灰色(10BG4/1)シルト。

#### I-14地区

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

第3層 黒色(N2/0)シルト。古墳時代の包含層。植物遺体多量に含む。

第4層 黄褐色(2.5Y5/4)シルト。炭化物含む。

第5層 緑黒色(10G1.7/0)礫混じりシルト。

第6層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)礫。

#### I-16地区

第1層 盛土及び搅乱。

第2層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

第3層 オリーブ褐色(2.5Y3/1)シルト。弥生時代中～後期の包含層。

第4層 黒褐色(2.5Y3/1)礫混じりシルト。3.0cm以下の中礫含む。

第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト。炭化物含む。

第6層 黒色(5Y2/1)礫混じりシルト。

### 3. 出土遺物

出土遺物は、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の時期幅をもち、出土総数はコンテナで1/2箱を計る。以下、出土した遺物のうち復原・図化できた6点について器種ごとに概説する。なお、鉢(1)以外は全て生駒西麓産の胎土である。

鉢(1) 口縁部は外寄しながら立ち上がり、端部はさらに内折す。おそらく脚をともなう器形であろう。外面調整は、6条の凹線文を施し直下に円形浮文(径5mm)を4mm間隔で配する。内面調整はヨコナデの後、縱方向に粗くミガキを施す。特徴的な多重凹線文と胎土から攝津系の搬入品と考えられる。

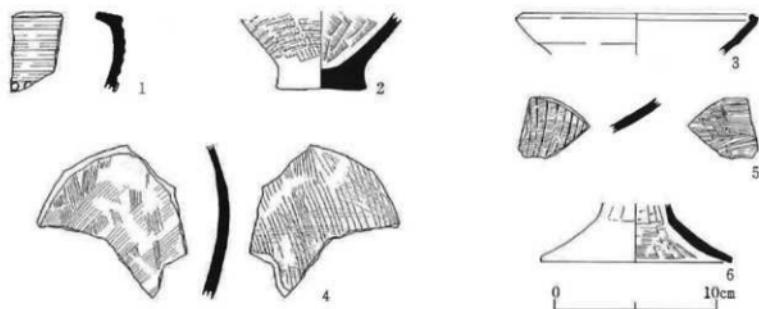
甕(2) 弥生時代後期の甕の底部で、胎土に角閃石・長石・石英を多量に含む。外面調整は縱方向のハケメ(4本/cm)の後、粗いタタキ(3本/cm)を施す。内底面調整は、底から左周りに密なハケメ(8本/cm)を螺旋状に施す。

甕(3) 口縁部のみ残存し、上外方にやや外寄しながら立ち上がり、端部は内側へ丸みをもって肥厚する。いわゆる布留式甕である。外面調整はヨコナデ、内面調整は板状のもので横方向にナデ(一部ミガキのようにみえる)を施す。

甕(4) 体部片のみ残存し、器壁は最大7mmを測る。部分的に煤の付着をみる。外面調整は、横方向の密なハケメ(5本/cm)の後、縱方向の粗いハケメ(3本/cm)を施す。内面調整は、縱方向にハケメ(8本/cm)の後、斜方向に同単位のハケメを施す。

器台(5) 盆状の受け部をもち、ミガキを多用する非常に精製された土器である。外面調整は、斜方向のハケメ(単位不明瞭)が横方向の密なミガキによって消されている。内面調整は、横方向のハケメ(7本/cm)の後、中心から放射状に暗文を施す。

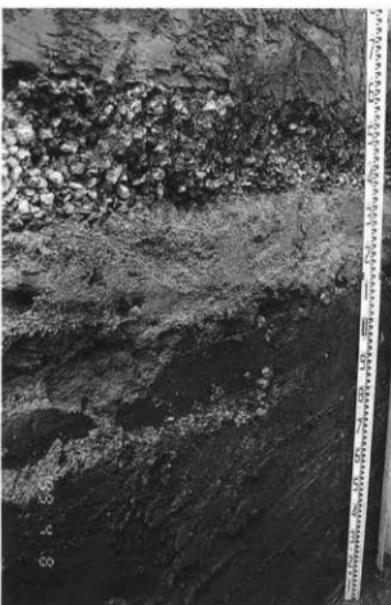
高杯(6) 外面調整はナデ、部分的に横方向の板ナデを施す。内面調整は、横方向にハケメ(7本/cm)、柱状部は左回りのケズリを施す。端部はやや面をもつ。



出土遺物実測図

#### 4.まとめ

今回の調査は、大阪と奈良を結ぶ暗軒越奈良街道と東高野街道（現在の旧170号線）の交差点を起点とし、東南へ第5次調査を実施した天理教東神田大教会までを調査した。本遺跡は縄文晩期から古墳時代にかけての良好な遺物が出土している。特に、今回の調査終点である天理教会内で実施された第5次調査（「東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査外報17」東大阪市教育委員会1978）では、弥生時代後期の焼失窓穴住居や古墳時代前期の土坑など数多くの遺構・遺物が検出されている。つまり、今回調査では、その生活域（居住域、生産域、墓域）がどこまでつづくかを確認する事を目的とした。立会調査という制約および、後世の擾乱という条件も重なり確認するには至らなかった。ただし、I-11地区付近から、弥生時代中・後期、古墳時代初期の遺物が出土し始め、終点（I-16）までその包含層を追うことが出来た。①I-11地区付近までは第5次調査相当層がある。②勾配のきつい地形がゆえの二次堆積である、の2つが考えられる。この結論は今後の調査に委ねたい。



調査断面



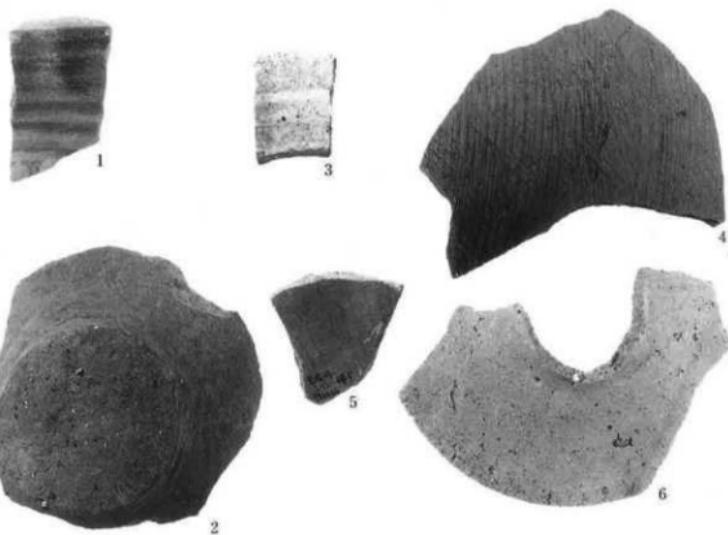
調査断面



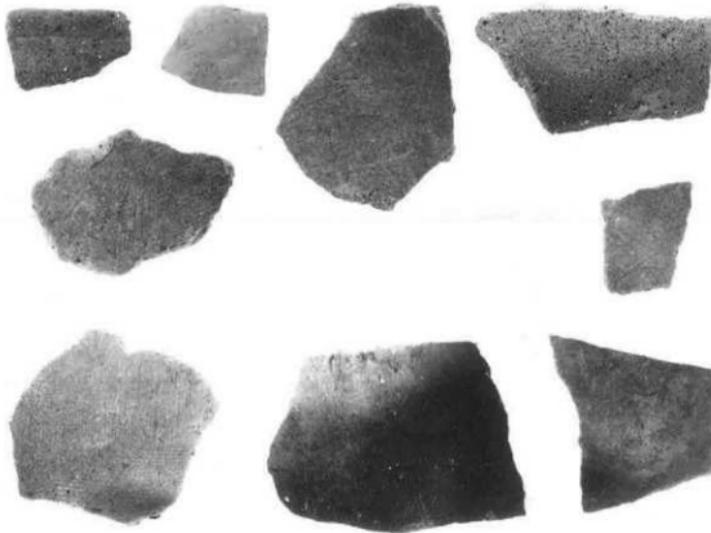
調査地遠景



調査地掘削状況



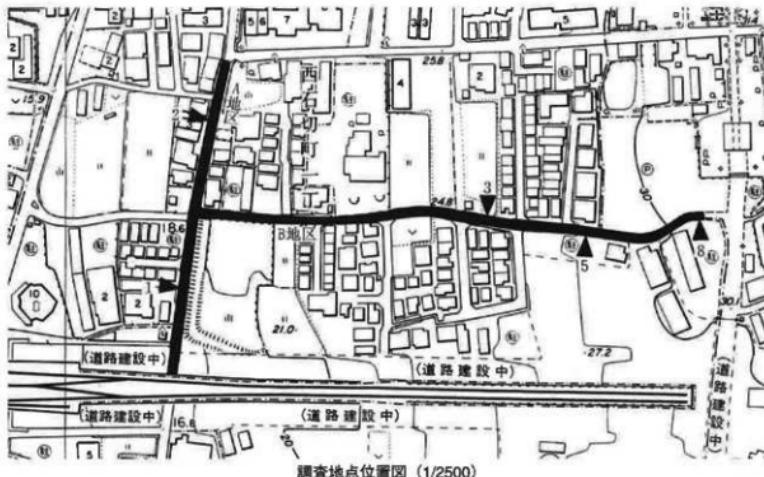
出土遺物

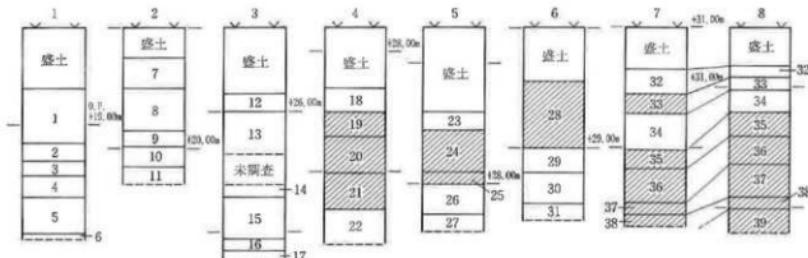


出土遺物

## 第10章 神並遺跡の第24次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第18工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市西石切町1丁目地内
3	調 査 面 積	38.4 m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年4月5日～6月8日（延べ30日）
5	報 告 担 当	東 徹志
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は神並遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事予定地は東西及び南北の2方向であり、Tの字形になる。工事は幅約0.9mで長さ約451mの間であり、開削工法である。





1. 喀緑灰色(7.5GY4/1)シルト
2. 暗オリーブ色(7.5VS3/3)シルト
3. 喀緑黄色(5Y4/2)細繊混シルト
4. 暗オリーブ色(5Y4/3)細繊混シルト
5. オリーブ色(10YR4/2)シルト
6. 黒色(2.5Y4/1)粘土
7. オリーブ黒色(5Y3/2)粘土
8. 喀緑灰色(2.5Y4/2)粘土
9. オリーブ黒色(10YR3/1)粘土
10. 断続灰色(7.5GY4/1)粘土
11. 緑灰色(5GY4/1)粘土
12. 喀緑色(10YR2/3)少量中纏混泥壤土
13. 青褐色(5GY3/2)少量中纏混泥壤土
14. 喀緑灰色(5GY4/1)砂砾粘質土
15. 紫褐色(5GY2/1)粗砂混炭土
16. 喀緑灰色(5GY4/1)シルト混粗粒砂
17. 黒褐色(2.5GY2/1)中纏混シルト
18. 喀緑灰色(5GY4/1)細繊混シルト
19. オリーブ墨色(5Y4/2)粘土シルト、中纏
20. 暗オリーブ色(5Y4/3)中・細繊混シルト、
21. 黒色(10Y2/1)粘土、
22. オリーブ墨色(5Y3/2)極少量纏混粘質シルト
23. 喀緑灰色(5GY4/1)粗粒砂混壤土、よくしまる
24. 喀緑灰色(5GY4/1)粗粒砂混粘質土と喀緑灰色(5GY4/1)粗粒砂混粘質土の層、中纏?
25. 青褐色(5GY2/1)粗砂混泥壤土、
26. 青褐色(5GY3/2)粗砂混粘質土
27. 喀緑灰色(10GY3/1)粗砂混粘質土
28. 喀緑灰色(5GY3/1)少量中纏混粗粒砂混粘質土、中纏?
29. 黒色(7.5GY2/1)多量纏混粘質土
30. 黑色(10Y2/1)粗粒砂混粘質土、水多
31. 緑黑色(10GZ2/1)極少量中纏混粘質土
32. 暗オリーブ色(5Y4/2)少量中纏混粘質土
33. 喀黃褐色(10YR4/2)細纏混泥壤土、中纏?
34. 黑褐色(10YR3/2)少量中纏混粘質土
35. オリーブ黒色(10YR3/1)粗粒砂混粘質土
36. オリーブ黒色(10YR3/1)粗砂混粘質土、水多
37. 喀褐色(5GY3/2)少量中纏混粘質土
38. 黑色(5Y4/1)粗砂、清水
39. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細纏混粘土

土層断面柱状図 (V-1:400)

## 1. 調査の概要

調査地は生駒山西麓の中位段丘状に位置し、東西南北の二方向でT字状となる。南北をA地区、東西をB地区と呼称した。現況はA地区が北になだらかに高くなり地区両端で比高差約4mになる。B地区は東に高くなり地区両端で比高差約12mになる。調査は工事と並行して立会調査を実施、B地区の東半分で遺物包含層を確認した。以下、B地区について報告する。

調査では遺物の出土を確認した地区西端から約110m付近をB-2区と呼称、以後1日あたりの調査範囲を1区として工事最終区まで計13区を数えた。そのため調査距離は一定していない。遺物は2~13区で出土を確認した。時期は古代と中世に分れ、まとまって出土する範囲がある。前者が東端の12・13区、後者が4~12区である。とくに4~6区では瓦器椀・土師器皿を中心に比較的多くの土器が出土した。なお、瓦は極少量であるが4~13区で見られた。

## 2. 層位

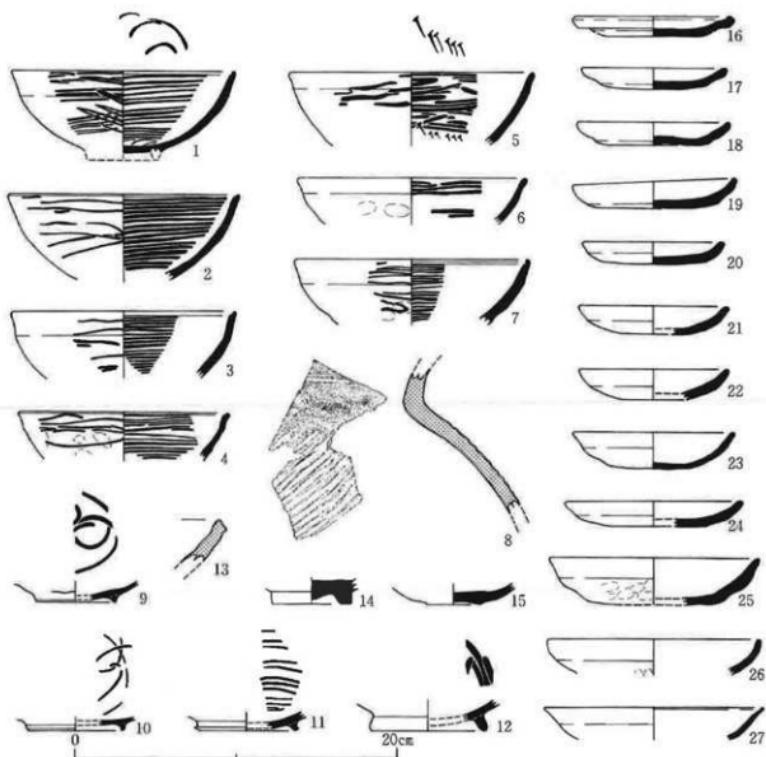
柱状図は3が4区、4が6区、5が8区、6が10区、7が12区、8が13区において記録した。4~6区の範囲では大きな落込みと思わせる堆積を確認した。なお柱状図1・2はA地区内である。詳細は層序を参照。

## 3. 出土遺物

出土遺物は須恵器、土師器、黒色土器、瓦質土器、瓦器椀、土師器皿、輸入陶磁器、羽釜、瓦、製塙土器などがある。以下、図化したものについて述べる。

瓦器椀は1~12がある。1~4は口縁端部内面に段をつけるような沈線が巡る。5~6は口縁端部を丸く仕上げ、7は口縁端部内面に工具による沈線が巡る。1~4が大和型、5~6が和泉型、7が捕葉型にあたる。底部はミガキの施用幅が狭い9~11と広い12とに分れる。

土師器皿は16~27がある。口径10cmを境に小皿(16~24)と中皿(25~27)に分けた。16~19・25



B-4~6 区出土遺物実測図

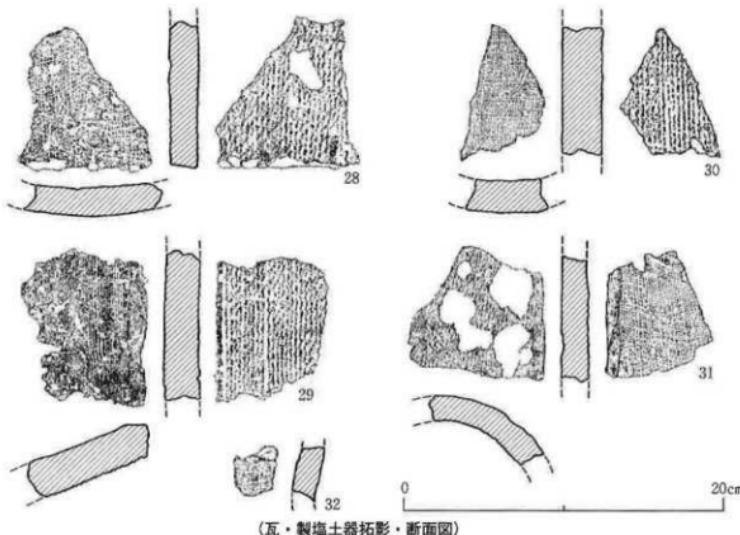
は二段に屈曲する口縁部をもちヨコナデで整える。20~24・26は平底からなだらかに内弯する。23のみが器壁が2~3mmと薄手である。27は口縁部が屈曲して外上方にのびる。

須恵器は33~35がある。33は直口壺で口径13.8cmを測る。口縁部をヨコナデで整え、体部外面にタキ、内面に當て具痕が残る。頸部内面はケズリが入る。34は底部径11cm、35は10.7cmを測る。

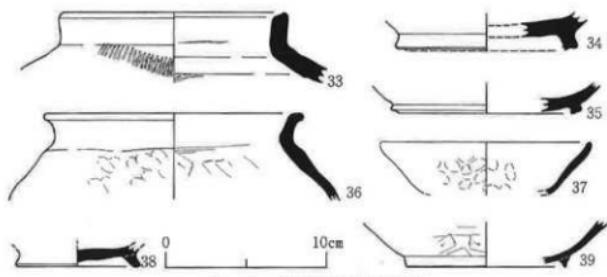
土師器は甕、壺がある。36は甕でにぶい褐色を呈し、外面には煤が付着する。口径は14.4cmを測る。口縁部から頭部にかけてをヨコナデ、体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。37~39は壺である。37はにぶい褐色を呈し、口径は8.8cmを測る。口縁部にヨコナデを施し、外面下半には明瞭な指頭圧痕が残る。39は淡黄橙色を呈し底部径は9.8cmを測る。

瓦は平瓦、丸瓦がある。28・29・30は平瓦でいずれも凹面には布目、凸面には繩目が残る。29は側面端部が残り凹面の側面端部にナデ、側面にケズリとナデを施す。凹面の布目をナデ消す。31は丸瓦で凸面は繩目がナデ消され、凹面には布目が残る。

他は8が瓦質の甕で体部外面にはタタキが残る。13は須恵器の片口鉢で口縁端部が上下にやや拡張



(瓦・製塙土器拓影・断面図)



B-12・13区出土遺物実測図

する。14は青磁碗で底部径4.8cmを測り内面にオリーブ緑色の釉がかかる。15は白磁皿で底部径3.3cmを測り、内外面に乳白色の釉がかかる。32は製塙土器で器厚は約1.5cmを測り、内面に布目が残る。38は内黒の黒色土器で底部径7.5cmを測る。

#### 4.まとめ

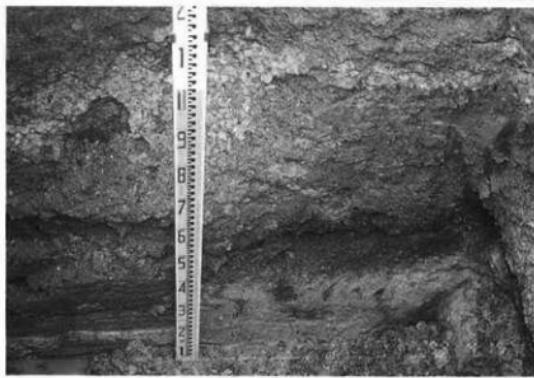
調査地は平安時代初めと12世紀後半の二期の遺物包含層が認められた。後者の時期は4~6区に落込みがみられ、周辺にも遺構が存在すると考えられる。前者は石切神社付近の平坦面に差しかかる位置にあたり、包含層が東の平坦面に広がると思われる。



A-1区遠景（西より）



A-8区掘削状況



A-9調査断面



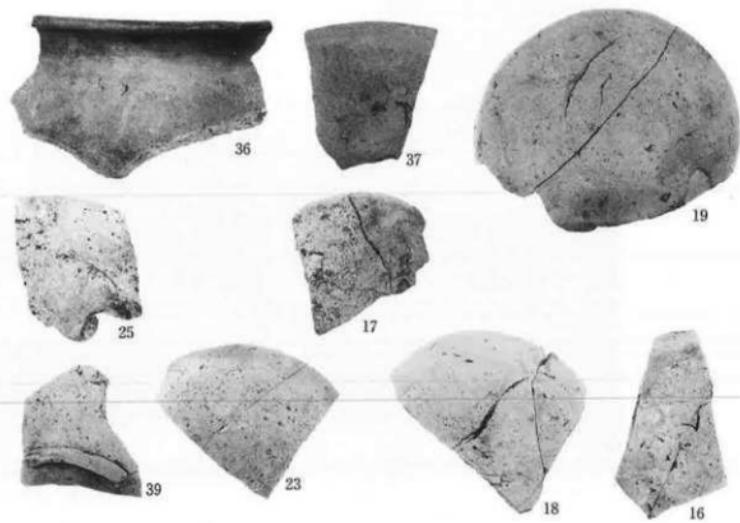
B-13区遠景（西より）



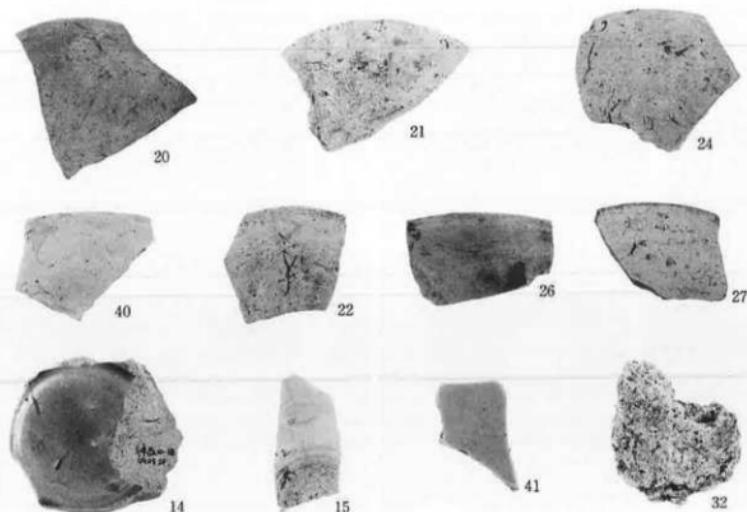
B-12区調査断面



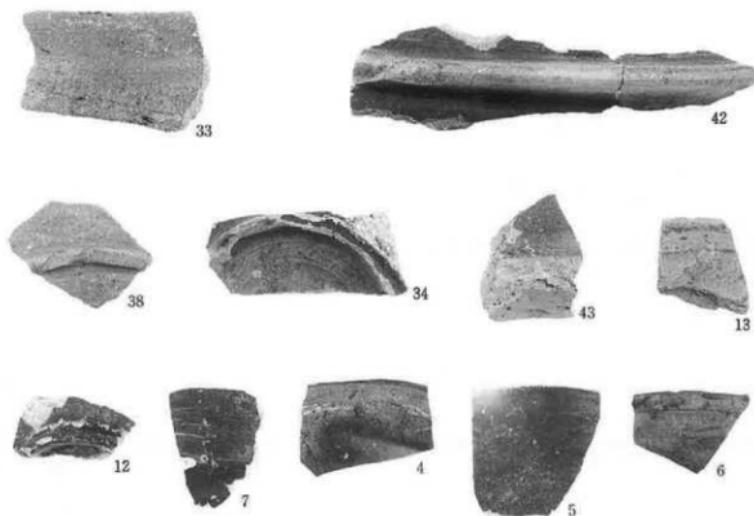
B-13区調査断面



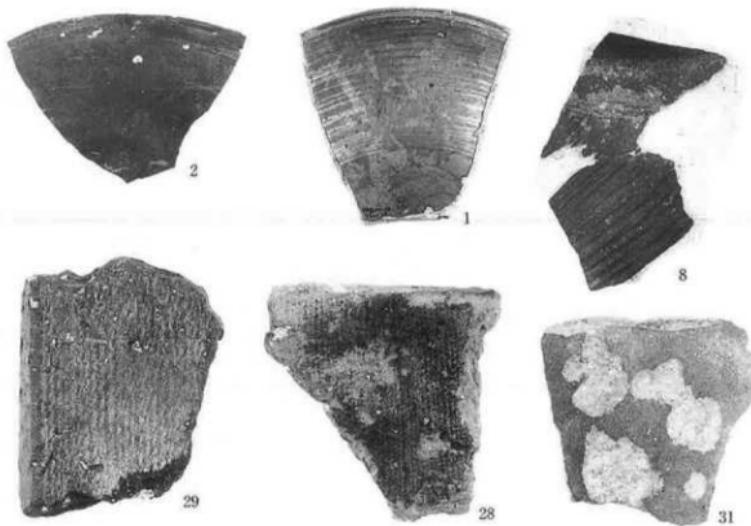
土器



土器皿・輸入陶磁器・製塩土器



須恵器・土師器・瓦器



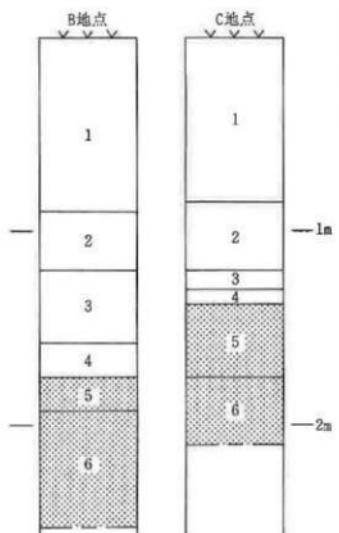
瓦器椀・瓦質土器・瓦

## 第11章 鬼塚・鬼虎川遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第26工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市宝町地内
3	調 査 面 積	51m <sup>2</sup> (7ヶ所)
4	調 査 期 間	平成11年4月7日～5月21日 (延べ12日)
5	報 告 担 当	永田朋子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼塚・鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は推進工法でおこなわれ、A～G地点の7ヶ所の立坑で立会調査を実施した。



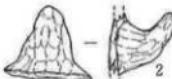
調査地点位置図 (1/2500)



### 1. 層位

#### B地点北壁断面

- 第1層 盛土。層厚90cm。
- 第2層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土(10cm以下の巨礫混)。
- 第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粘土。
- 第4層 橙色(7.5YR6/8)細粒砂。
- 第5層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土。
- 第6層 暗緑灰色(5G3/1)粘土。



出土遺物実測図

#### C地点西壁断面

- 第1層 盛土。層厚85cm。
- 第2層 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂(10cm程度の巨礫混)。
- 第3層 暗緑灰色(10G4/1)細粒砂。
- 第4層 暗青灰色(5B4/1)粘質土。
- 第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト。
- 第6層 緑黒色(2.5GY2/1)粘土。

### 2. まとめ

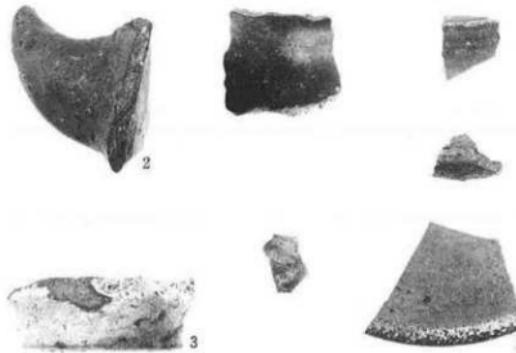
B地点、C地点共に盛土の直下から10cm程度の礫混じり層が認められたことから、この地区が谷状地形を形成していたと想定される。第5・6層では弥生時代～奈良時代の遺物が少量出土したが、谷筋内の二次堆積と考えられる。遺構は認められなかった。



F 地点掘削作業風景



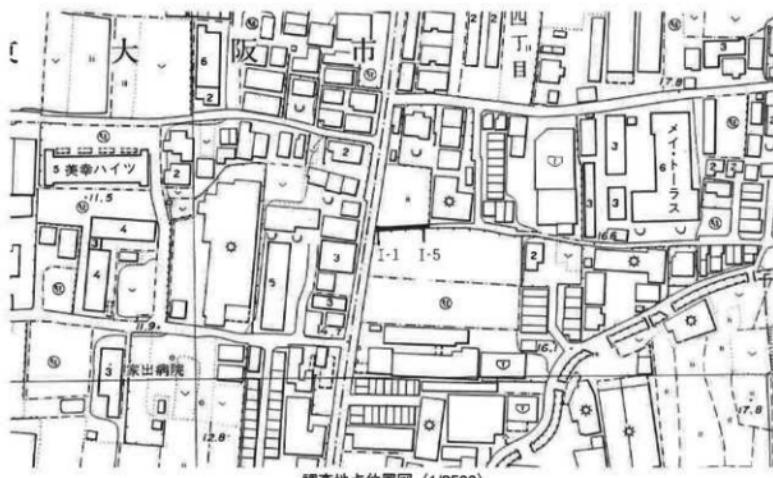
A 地点作業風景

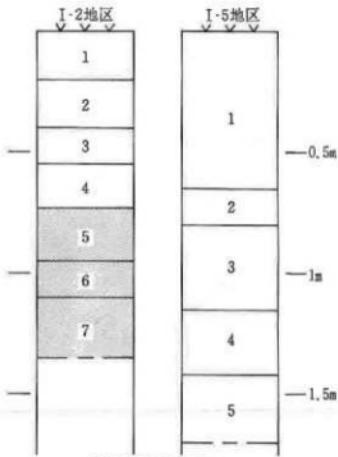


出土遺物

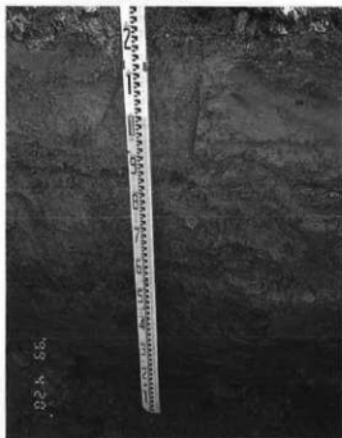
## 第12章 楽音寺遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 主	平成10年度公共下水道第29工区管きよ塗造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町4丁目
3	調 査 面 積	35m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年4月14日～5月20日（延べ16日）
5	報 告 抵 当	永田朋子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は楽音寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9mで長さ約41mの間であり、開削工法である。

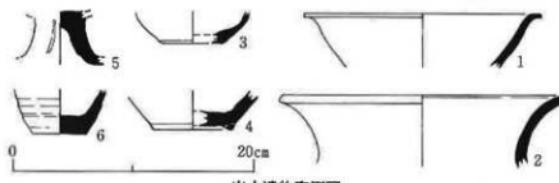




調査地区断面略図



I-2地区断面



出土遺物実測図

### 1. 調査概要

本調査地は楽音寺遺跡の北東端にあたる。下水管埋設工区间で遺跡指定地の境界線をまたぐ為、その境を明瞭にすることを主眼に調査を進めた。

### 2. 層位

#### I-2地区南壁断面

- 第1層 盛土。層厚20cm。
- 第2層 暗灰黃色(2.5Y4/2)壤土。
- 第3層 青灰色(5BG5/1)粘質土。
- 第4層 青灰色(5B5/1)壤土。
- 第5層 緑灰色(10GY5/1)中粒砂。遺物出土。
- 第6層 オリーブ黒色(10Y3/1)中粒砂混粘質土。遺物出土。
- 第7層 緑黒色(10GY2/1)粘土。遺物出土。

#### I-5地区南壁断面

- 第1層 盛土。層厚65cm。
- 第2層 青灰色(5BG5/1)粘質土。
- 第3層 灰色(N4/)粘土(10YR4/4褐色の染込み)。
- 第4層 灰色(N4/)砂質粘土。
- 第5層 暗灰色(N3/)粘土。

\*遺物は出土しているが、どの層かは確認出来ず。

### 3. 出土遺物

古墳時代後期一中世までの幅広い時期の土器が出土した。その内、遺跡内から出土した実測可能な遺物は1の土師器1点のみである。その他の土器は遺跡外出土のもので、ローリングを受けている為、二次堆積したものと考えられる。

1の器種は高杯である。口縁部が強く外反し、口縁端部を丸く終える。内外面はナデ調整である。生駒西麓産胎土。

### 4. まとめ

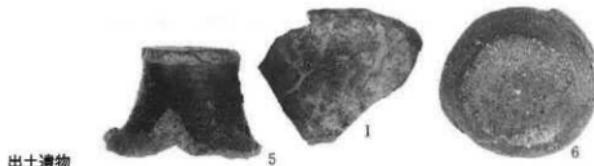
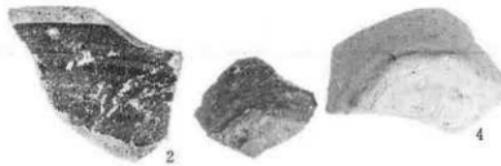
遺跡の指定地境界線から盛土直下に砂層が現れ出し、出土した遺物もローリングを受けていることから、笑後川の前身が流れていたと推測される。このことから、楽音寺遺跡の北東端は、従来通りの範囲指定で間違いないことが確認できた。



調査地遠景



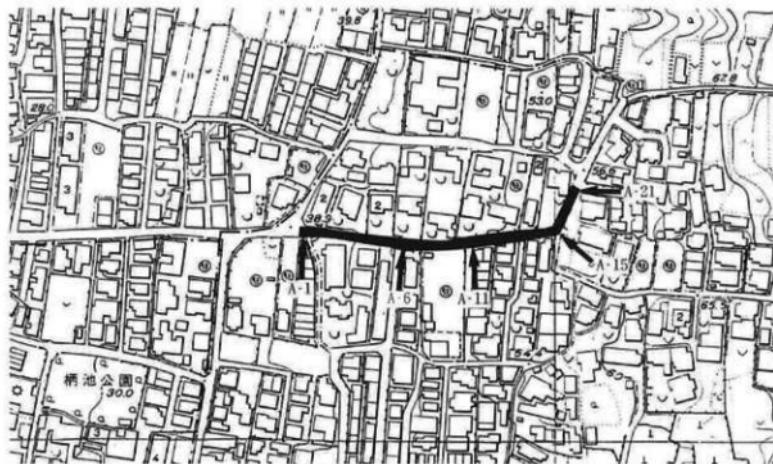
掘削作業風景



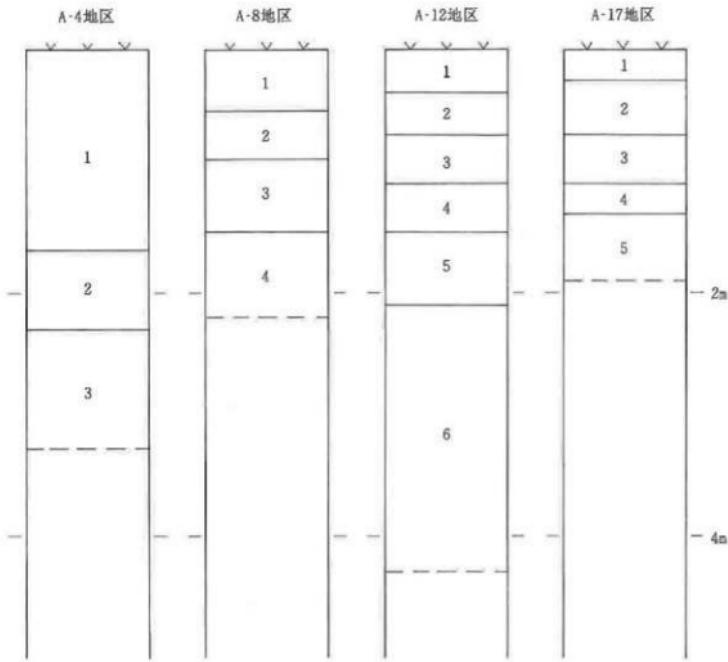
出土遺物

## 第13章 山畠遺跡・山畠古墳群の調査

	名 称	内 容
1 事 業 名		平成10年度公共下水道第38工区管きよ染造工事
2 調 査 地 点		東大阪市上四条町地内
3 調 査 面 積		358m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間		平成11年5月7日～7月12日（延べ29日）
5 報 告 担 当		坂田典彦
6 調 査 の 経 過		上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は山畠遺跡・山畠古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9～1.4mで長さ約304mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



調査地断面図

### 1. 調査の概要

今回の調査は、瓢箪山稻荷神社から東大阪市郷土博物館へ抜ける東西路線で実施した。周知のとおり当地域は、山畑古墳群・山畑遺跡が内にあり、急峻な斜面に立地する。今回の調査においても西は山畑古墳群、東は山畑遺跡であるが、地区割りは通し番号で実施した。

堆積状況は、現地表面から-150cm前後で地山と思われる人頭大~100cm強の巨礫を含む黄褐色礫層を確認し、遺物はその上の二次堆積層から検出した。

### 2. 層序

#### A-4 地区

第1層 盛土および搅乱。

第2層 黄褐色(2.5YR4/1)礫混じりシルト。人頭大~100cm大的巨礫を全体に含む地山層。

第3層 灰褐色(10YR4/2)礫混じり粘質土。人頭大の巨礫を含む。

#### A-8 地区

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/1)礫混じりシルト。2cm大の中礫多量に含む。

第3層 黒褐色(10YR2/3)礫混じり粘質土。10cm大の巨礫含む。土師器片少量検出。二次堆積層。

第4層 明黄褐色(2.5Y6/6)礫層。100cm以下の礫を多量に含む地山層。

A-12地区地点

第1層 盛土。

第2層 極暗赤褐色(5YR3/2), 黒褐色(10YR2/2)疊混じりシルト。5cm大の礫多量に含む。土師器片検出。二次堆積層。

第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)疊混じりシルト。30cm大の礫多量に含む。

第4層 青灰色(5B5/1)疊層。2cm大の疊。

第5層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)疊層。50cm大の疊多量に含む。以下地山層。

第6層 オリーブ黒色(5Y3/2)疊層。150cm大の疊。

A-17地区

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/1)疊混じり壤土。5~10cm大の礫多く含む。

第3層 黒褐色(10YR2/2)シルト。2~5cm大の疊を含む。

第4層 黒色(2.5Y2/1)疊混じり粘質土。やや粘性を帯びる。北東から南西へ傾斜する。

第5層 黑褐色(10YR3/2)粘質土混じり疊。粘性は強く、3~20cm大の疊かなり多い。

3. 出土遺物

今回出土した遺物は、前述のとおり二次堆積層からの検出であり殆どがローリングをうけている。また、総出土量はコンテナ1/4箱にも満たなく、時期幅も弥生時代から中世までとかなりのひらきがあることも上記の事由によるものである。以下、出土した遺物のうち図化・復原できた5点について器種ごとに概説する。

高杯(1) 生駒西麓産の胎土で柱状部(中実)のみ残存する。柱状部最小径(4.5cm)は中位にあり上下に外反してゆく。磨耗が著しいため調整は不明瞭である。弥生時代中期後半に比定され、台付きの鉢の可能性もある。

鉢(2) 生駒西麓産の胎土で、鉢の体部片である。外面調整は、上下に描寫筆状文・列点文を施す。筆状文は施文原体幅(残存部推定)は広く、縦線間隔(2単位/cm)は狭い。弥生時代中期後半に比定される。

甕(3) 底部のみ1/4程度残存しているが、形態・調整については不明である。胎土に角閃石を多量に含むことから生駒西麓産である。

土師器(4) 口径10.8cmの中皿で、浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。口縁部は1段ナデを施し端部は内側に巻き込み丸くおわる。器壁は3mm以下で比較的薄く、11世紀代の所産であろう。

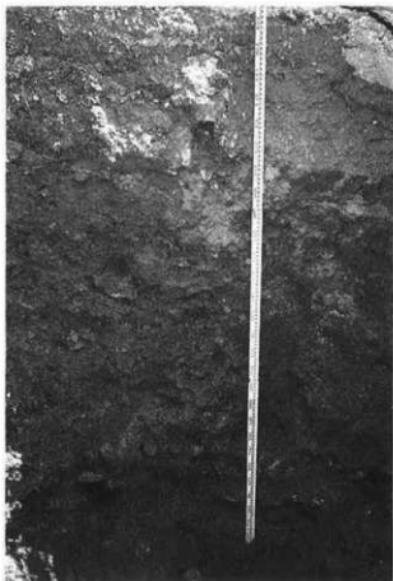
土師器(5) 口径16.8cmで、体部は外弯しながら立ち上がり、端部はやや外反する。外内面調整とも板状のものでナデ、その後ナデ消す。



出土遺物実測図

#### 4.まとめ

今回の調査地では、前述の通り現地表面から-1.5m以下は100cm以上の巨礫を含む地山層であり、遺物はほとんど検出されなかった。無論、完形品の出土はなく、図化・復原できた5点の土器も、高杯の柱状部以外は全て5cm以内の破片であった。ただ、これらの事実は、当調査区が谷筋にあり、生活するには適していない環境であったと考えられる。また、出土した弥生時代の遺物は既に確認されている上方の高地性集落で使用されていたものが二次堆積したものであろう。山畠古墳群は直径15m、高さ数mの円墳が数多く確認されており、東大阪市の代表的な古墳群の一つである。生駒西麓には北に五条山古墳群・豊浦山古墳群・みかん山古墳群・額田山古墳群・若宮古墳群・辻子谷古墳群・墓尾山古墳群があり、南に花草山古墳群・六万寺古墳群・桜井古墳群・淨土寺谷古墳群・高安古墳群（八尾市）・高井田古墳群（柏原市）・平尾山古墳群（柏原市）へとつづく一大古墳群の帯があり、当時の中河内の様相を垣間見ることが出来るのではないだろうか。



調査断面



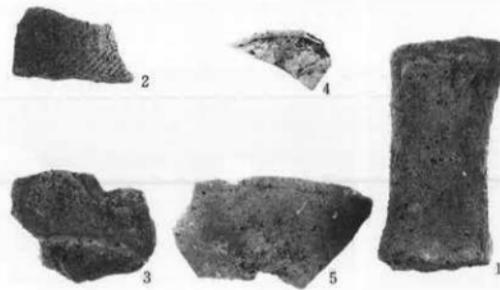
調査断面



調査地遠景



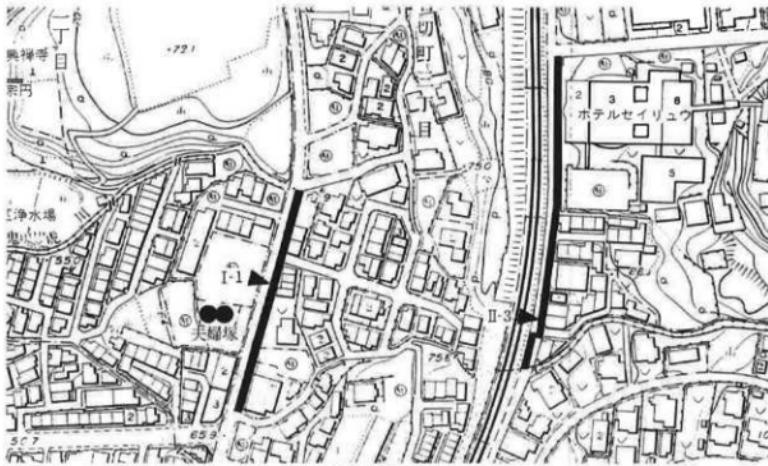
調査地掘削状況



出土遺物

## 第14章 神並古墳群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 主	平成10年度公共下水道第45工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市上石切町1丁目・東石切町3丁目地内
3	調 査 面 積	320m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年5月7日～9月14日（延べ22日）
5	報 告 抵 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は山畠遺跡・山畠古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は2地区に分かれ、開削工法である。範囲はI地区が幅約0.9～1.2mで長さ約205m、II地区が幅約0.9～1.1mで長さ約157mである。II地区的南側一部は夜間工事のため立会調査できなかつた。

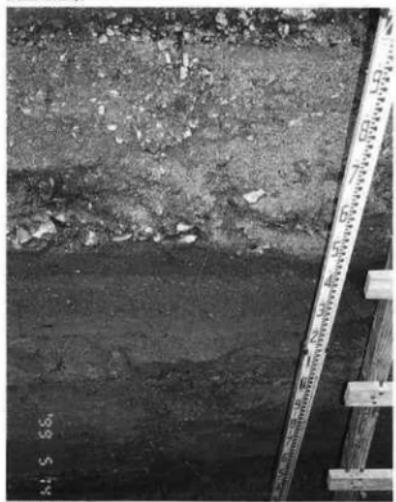




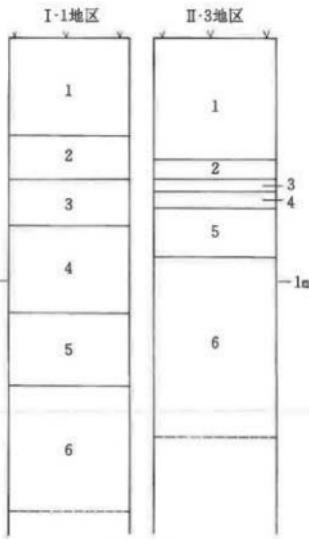
調査地遠景



調査地遠景



調査地断面



断面略図

### 1. 調査の概要

#### I-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ灰色 (5GY6/1) 積混じりシルト。

第3層 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト。

第4層 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) シルト。

第5層 灰色 (10Y5/1) 積混じり粘質土。

第6層 暗緑灰色 (10G4/1) 積混じり粘質シルト。

#### II-3 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 明黄褐色 (10YR6/8) 粘質土。

第3層 オリーブ灰色 (2.5Y4/3) 粘質土。

第4層 褐色 (10YR4/4) 砂質土。

第5層 黄橙色 (10YR7/8) 積混じり土。

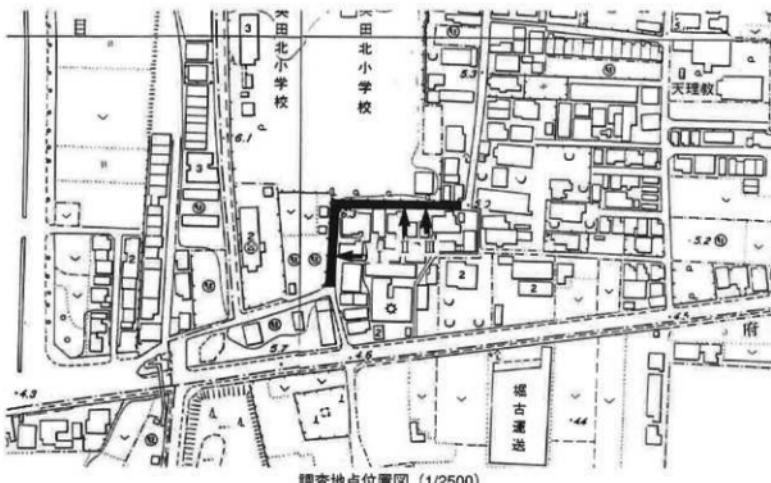
第6層 黄橙色 (10YR7/8) 砂混じり土。

#### 2. まとめ

遺構、遺物は検出できなかった。

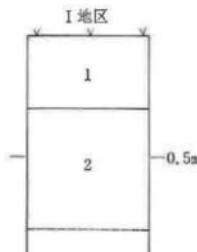
## 第15章 暗峠越奈良街道の調査

	名 称	内 容
1	事 業 主	平成10年度公共下水道第6工区管きよ染造工事
2	調 査 地 点	東大阪市松原町1丁目
3	調 査 面 積	113m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年5月28日～6月1日（延べ3日）
5	報 告 抵 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は暗峠越奈良街道内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事予定地は東西及び南北の2方向であり、L字形になる。工事は幅約1mで長さ約113mであり、開削工法である。





調査地遠景



断面略図

1. 調査の概要

層序

第1層 盛土。

第2層 灰オリーブ色  
(5Y5/2)砂。

2.まとめ

工事範囲の全域で砂層が認められた。立会調査地は旧吉田川の自然堤防上に立地していると考えられる。



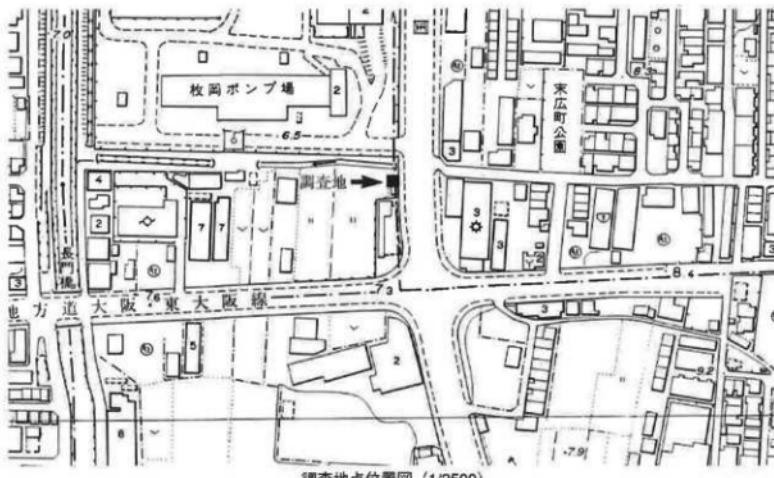
調査地遠景



調査風景

## 第16章 北鳥池遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 主	平成10年度公共下水道第16工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市若草町～下六万寺町3丁目
3	調 査 面 積	26m <sup>2</sup> (1ヶ所)
4	調 査 期 間	平成11年6月2日～6月11日 (延べ4日)
5	報 告 抵 当	坂田典彦
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は北鳥池遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。工事予定地は大阪外環状線（国道170号線）の西側である。工事は推進工法であり、立坑の3ヶ所の内2ヶ所は遺跡外になる。調査範囲は6.4×4mである。



## 1. 調査の概要

今回の調査では、現地表面から-4mまでを北壁断面で観察した。遺構は確認されず、検出された遺物（須恵器2片・土師器片5片）はいずれもローリングを受けており、扇状地末端の流れ込みによる自然堆積層に包含されていたと考えられる。なお、遺物検出層は第3・5・8・9層であり、-3m以下からは検出されなかつた。

## 2. 層序

第1層 墓土および搅乱。

第2層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。(0.5cm大の礫含む)

第3層 暗緑灰色(10GY3/1)粘質土。(0.3cm以下の礫含む)(1cm大の土師器片数片検出)

第4層 黒色(2.5GY2/1)粘質シルト。

第5層 灰色(5Y4/1)粘質土。(1.0cm以下の礫少量含む)(かたくしまり、下位に第6層とのフレーム構造がみられる)(土師器・須恵器片数片検出)

第6層 灰色(5Y5/1)粗粒砂。

第7層 オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘質シルト。

第8層 灰色(10Y4/1)砂質シルト。(0.2cm大の礫多量に含む)(植物遺体少量含む)

第9層 オリーブ黒色(10Y3/1)粘土。(植物遺体含む)(第9層上面東へGL-330cmまで落ち込む)  
(土師器片検出)(以下水平堆積)

第10層 黒色(5Y2/1)礫混じり粘質土。(0.3cm以下の礫に含む)

第11層 黒色(10Y2/1)礫混じり粘質土。(0.3cm以下の礫多量に含み、1.0cm大の礫少量混じる)

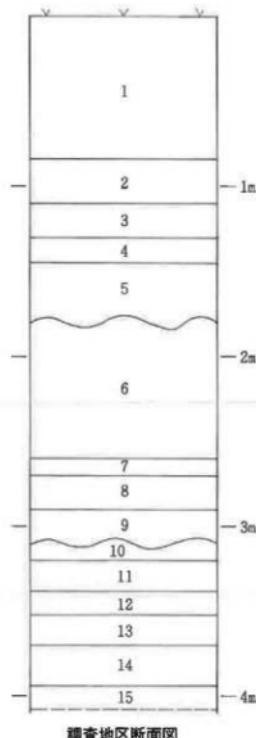
第12層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂。

第13層 黒色(10Y2/1)粘土。(やや粘性有り)

第14層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘土。(少量の砂含む)(第13層より粘性強)

第15層 灰色(7.5Y6/1)砂礫。(0.3cm以下の細礫含む)

第16層 黒色(10Y2/1)粘土。(調査最終床面GL-400cm)



調査地区断面図



調査断面



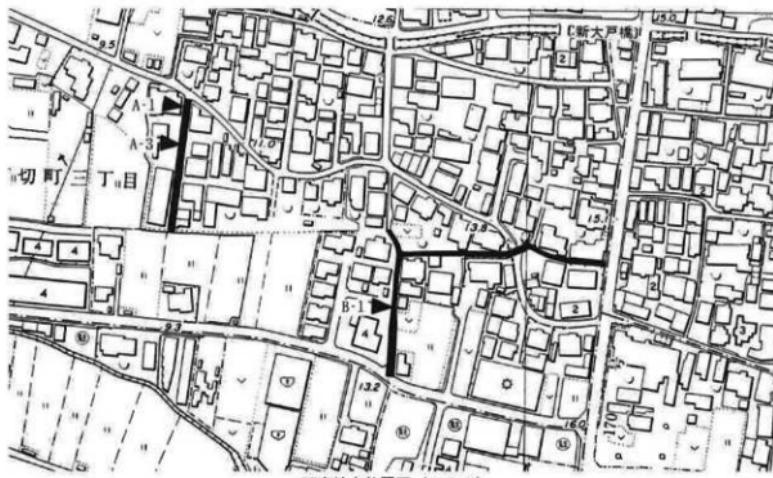
調査地遠景



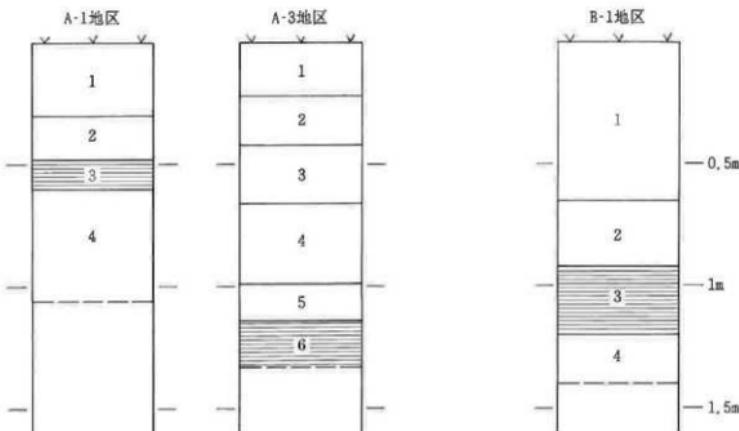
掘削風景

## 第17章 植附遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第301工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市中石切町3丁目
3	調 査 面 積	209m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年6月8日～10月1日（延べ13日）
5	報 告 担 当	坂田典彦
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は植附遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は2地区に分かれ、開削工法である。範囲はA地区が幅約0.9mで長さ約68m、B・C地区が幅約0.9～1.1mで長さ約176mである。



調査地点位置図 (1/2500)



調査地区断面図

### 1. 調査の概要

A 地区は、調査始点から北へ12mの範囲で弥生時代から古墳時代の遺物包含層を検出した。包含層は現地表面から - 1 m 前後で確認され、暗褐色の粘質土を主体とする。他の地区は、後世の搅乱及び盛土層である。

B 地区は、掘削深度が浅いことと、住宅密集地を削除していくという条件のなかで搅乱・盛土層が大半であったが、部分的に古墳時代の堆積層を確認することができた。

C 地区は、施工業者との連絡ミスで立合調査をすることができなかった。

### 2. 層序

#### A - 1 地区

第1層 盛土。

第2層 黒褐色 (10YR3/1) 砂混じりシルト。3 mm 大の細礫含む。

第3層 明黄褐色 (10YR6/6) シルト。北進するにつれ層厚増す。弥生土器検出。

第4層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粗粒砂混じりシルト。鉄分沈着。

#### A - 3 地区

第1層 盛土。

第2層 明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂混じりシルト。5 mm 以下の礫含む。古墳時代の遺物検出。

第3層 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質シルト。斑点状に明褐色 (7.5Y6/6) のしみ込み。3 mm 大の礫少量含む。

第4層 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粗粒砂混じりシルト。

第5層 にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト。

第6層 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土。上面に遺物検出。

## B-1 地区

第1層 盛土および擾乱。

第2層 灰オリーブ色(7.5Y6/6)疊混じり粘質土。2mm大の礫多量に含む。

第3層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土。水分含有量多い。韓式系土器数片含む。

第4層 黒褐色(10YR3/1)疊混じり粘質土。3~5mm大の礫多量に含む。

### 3. 出土遺物

今回の調査では、A地区から弥生・古墳時代の遺物を、B地区から古墳時代の韓式系土器を検出した。A・B地区合わせて図化できた遺物は8点であった。図化できなかったもののうち特筆すべきこととして、A地区で製塙土器片を一括性を帯びた状態で検出したことである。以下、図化・復原できた遺物について器種ごとに概説したい。

甕(1) 底部のみ残存しており、胎土に石英・長石を多量に含む。内外面の調整は磨耗が著しく不明瞭である。底径8.8cmで弥生時代前期に比定される。

甕(2) 弥生時代前期～中期の甕で、胎土に角閃石を多く含む。口縁端部に刻み目を施し、内外面の調整はヨコナデである。また、ヨコナデ時の指圧加減によって端部の器壁厚が5mm以下の部分も見受けられる。

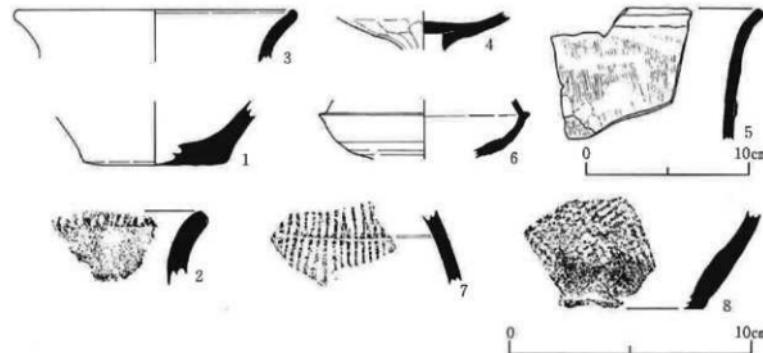
甕(3) 土師器の甕で、外反した口縁部に端部は少し内側へ肥厚させて丸くおわる。内外面の調整はヨコナデを施す。復原口径は17cmである。

高杯(4) 柱状部と杯部の接合部分で、差し込み技法である。外面調整は、杯部下位に板状工具による整形痕がみられ、内底面は丁寧にナデを施す。

瓶(5) 体部から口縁部にかけてほぼ直線的にたち上がり、口縁端部で外折する。推定口径は26cmである。外面調整は、継方向のハケメ(8本/cm)を密に施し、また体部上位には、把手部の剥離痕がみられる。内面調整は、磨耗のため不明瞭であるが把手部の裏に指圧痕がみられる。

杯身(6) 須恵器の杯身で、暗青灰色を呈し、焼成良好で胎土はやや粗い。底部外面1/2弱に回転ヘラ削り調整を施し、他はいずれも回転ナデ調整を施す。ロクロの回転方向は不明。

韓式系土器(7・8) 2片とも土師質土器であり、(7)は外面に幅の狭い平行タタキを施した後、沈線をヨコ方向にめぐらす。内面はナデ調整を施す。胎土は、長石・石英・雲母を多量に含み、焼成



遺物実測図

は良い。(8)は、底部片であり外面調整は細かい格子目のタタキを施す。体部下位から底部にかけて二次焼成を受け、黒褐色を呈する。内面はナデ調整である。胎土に1mm大の角閃石を多量に含むことから、生駒西麗産であろう。

#### 4.まとめ

今回の調査で確認されたこととして、A・B地区とも包含層は現地表面から-1m前後、特にA地区の弥生土器底部検出層は-0.5m前後と比較的浅い所にあり、後世の削平、搅乱に侵されていた。その中で、弥生時代前期それも早い時期から開始されたと見られている当遺跡内で、図1のような大型の底部を検出したことは、開始時期を把握する上で一助となるだろう。また製塙土器検出から、流通の媒体となる塙を扱っていたこの集落の性格を推測することは容易である。

B地区では、韓式系土器が数片検出された。以前の調査で、古墳時代中期の造り付けカマドの痕跡のある竪穴住居1棟が見つかっており、韓式系土器との関係を考える上では貴重な資料である。



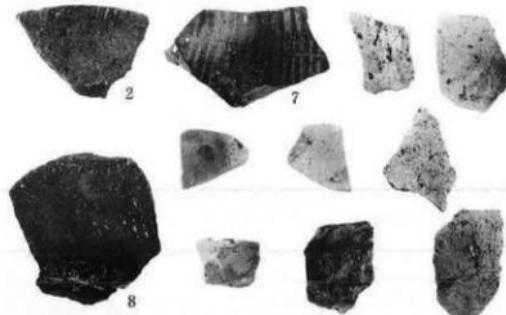
調査断面



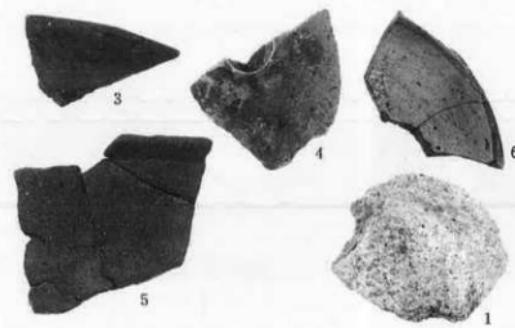
掘削風景



調査地遠景



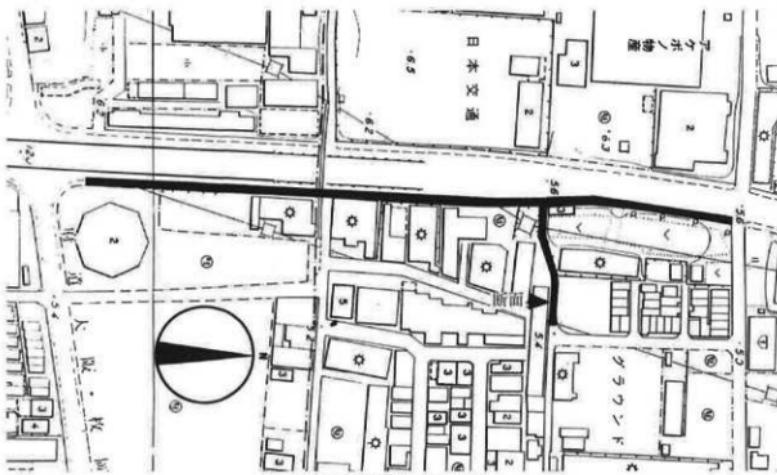
出土遺物 1



出土遺物 2

## 第18章 鬼虎川遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成 10 年度公共下水道第 215 工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市宝町～新町
3	調 査 面 積	321m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成 11 年 6 月 15 日～10 月 19 日（延べ 15 日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事予定地は大阪外環状線（国道170号線）の東側歩道である。一部、東に伸びる。工事は幅約 0.9m で長さ約 378m であり、開削工法である。





調査地遠景



調査地断面



調査風景

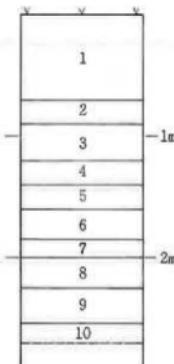
## 1. 調査の概要

### 層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 喀綠灰色 (7.5GY4/1) 粘混じりシルト。
- 第3層 青黒色 (5BG2/1) 粘土。
- 第4層 喀綠灰色 (5G3/1) 粗砂混じり粘質土。
- 第5層 喀綠灰色 (5G3/1) 粗砂混じり粘土。
- 第6層 喀綠灰色 (10G3/1) 細礫混じり砂。
- 第7層 喀青灰色 (5PB3/1) 砂。
- 第8層 喀青灰色 (5B4/1) 細礫混じり粘質土。
- 第9層 喀青灰色 (5B3/1) シルト混じり粘質土。
- 第10層 青黒色 (102/1) 粘質土。

### 2.まとめ

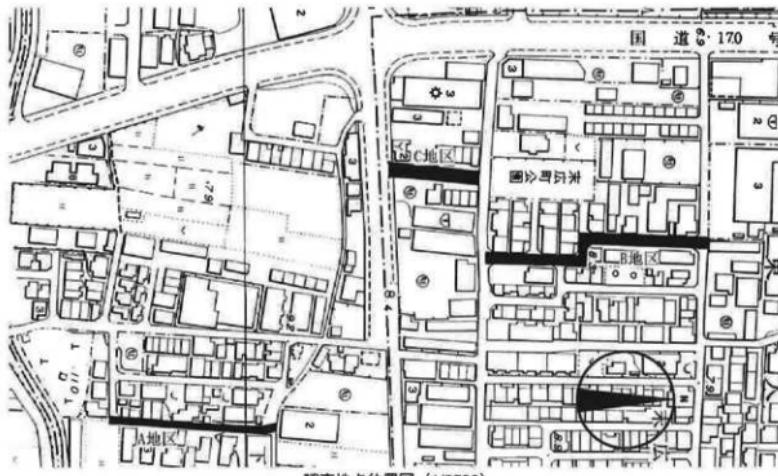
外環状線の東側部分では上より砂層と粘土層が堆積していたが、遺構、遺物は検出できなかった。また、外環状線部分は工事の掘削も浅く、ほとんどが盛土内であった。

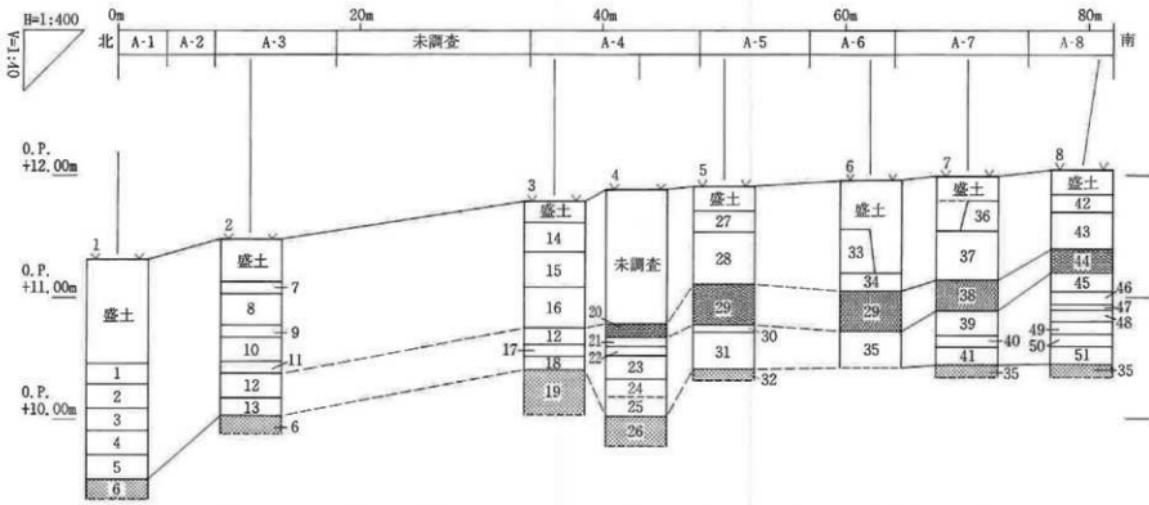


断面略図

## 第19章 段上(第10次)・下六万寺(第5次)・その他遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第306工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町3丁目・末広町
3	調 査 面 積	211m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年6月21日～9月1日（延べ21日）
5	報 告 担 当	東 徹志
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は段上・下六万寺・五合田・北鳥池遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は3地区に分かれ、開削工法である。範囲は幅約0.9mで、A地区（段上・下六万寺遺跡）が長さ約82m、B地区（五合田遺跡）が長さ約120m、C地区（北鳥池遺跡）が長さ約45mである。





1. 黒褐色(10YR3/2)中粒砂混粘質土  
2. 灰色(5Y5/1)少量細礫混粗粒砂混シルト、須恵器出土?  
3. 灰色(5Y5/1)粘質シルト、須恵器出土?  
4. 黒褐色(2,5Y3/1)砂質シルト、須恵器出土?  
5. オリーブ灰色(5G6/1)細粒砂  
6. 黒色(N1,5/0)少量細礫混粘質土  
7. 灰黃褐色(10YR4/2)極少量粗粒砂混壤土  
8. 灰色(5Y4/1)細粒砂混粘質土  
9. 灰色(7,5Y4/1)細粒砂混粘質土  
10. 灰色(7,5Y5/4)中量少量中礫混粘質土混細礫  
11. 黄褐色(2,5YH5/4)中粒砂  
12. 明褐色(7,5YH5/6)中粒砂、鉄分・マンガン沈着
13. 緑灰色(10G5/1)粗粒砂  
14. 灰黃褐色(10YR4/2)粗粒砂混壤土  
15. 灰色(5Y4/1)細粒砂混粘質土  
16. 黑褐色(2,5Y3/2)砂質シルト  
17. 浅黃色(2,5Y7/4)粗粒砂  
18. 暗綠灰色(5G4/1)粘質シルト  
19. 暗オリーブ灰色(5G3/1)細粒砂  
20. 暗灰黃色(2,5Y4/2)粗粒砂  
21. 暗褐色(10YR5/1)シルト  
22. 淡黃色(2,5Y7/4)中粒砂  
23. 暗青灰色(5B4/1)シルト  
24. 青灰色(5PB5/1)粘質シルト  
25. 暗青灰色(5PB4/1)粘質シルト
26. 黑色(N1,5/0)粘土、植物遺体含む  
27. 灰黃褐色(10YR4/2)壤土  
28. 青灰色(5PB5/1)壤土  
29. ぶい黄色(2,5Y6/4)砂質土  
30. 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト  
31. 暗灰色(N3)シルト  
32. 灰色(6H6)中礫混粗粒砂  
33. 暗灰黃色(2,5Y4/2)中礫混シルト  
34. 暗褐色(10YR4/1)シルト  
35. 暗青灰色(10BG3/1)粘土  
36. オリーブ黒色(7,5Y3/1)壤土  
37. 黑褐色(7,5YK3/1)極少量粗粒砂混シルト  
38. 暗暗褐色(7,5YK2/3)中礫混中粒砂
39. オリーブ灰色(2,5G6/1)シルト、やや粘質  
40. 灰色(5Y4/1)粘質シルト  
41. 暗青灰色(10BG3/1)粗粒砂混細粒砂  
42. 黑褐色(7,5Y3/2)極少量細礫混シルト  
43. 暗灰黃色(2,5Y4/2)細礫混粘質土  
44. 黑褐色(5Y3/1)壤土  
45. 黑赤灰色(2,5Y3/1)細礫混粘質シルト  
46. 黑褐色(10YK3/2)細粒砂混シルト  
47. 明黃褐色(2,5Y6/8)細粒砂  
48. 黑褐色(2,5Y3/2)粗・中礫混細粒砂  
49. オリーブ黒色(5Y3/2)粘質シルト  
50. 暗オリーブ色(5Y4/2)細粒砂  
51. 灰色(7,5Y4/1)粘質シルト

A地区土層断面柱状図

## 1. 調査の概要

調査地は三地点に分かれ、段上と下六万寺遺跡内をA地区、五合田遺跡内をB地区、北島池遺跡内をC地区と呼称した。調査は下水道管敷設工事に並行して立会調査を実施、A地区においてのみ遺物包含層を確認した。B・C地区は盛土と考えられる擾乱層が深さ約1.8~2mにまで堆積する。以下、A地区について報告する。

A地区は一日あたりの調査範囲を1区として計8区にわけた。そのため調査距離は一定しない。工事の都合上、調査を実施できなかった範囲は除いてある。

## 2. 層位

地区内においては遺物包含層を二層確認。一層が深さ約0.6~1.1mにかけてみられる層で層厚約5~30cmを測り、古墳時代中期末から後期の須恵器・土師器が出土した。堆積状況は地区南半では確認したが、北半では遺物は出土するが層を特定できなかった。もう一層は深さ約1.4~1.8m以下にみられ、弥生時代後期の土器が出土した。層厚は管底以下に続くため不明である。紫黒色の粘土層で地区全域で確認した。詳細は層序を参照。

## 3. 出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。以下、掲載したものについて述べる。

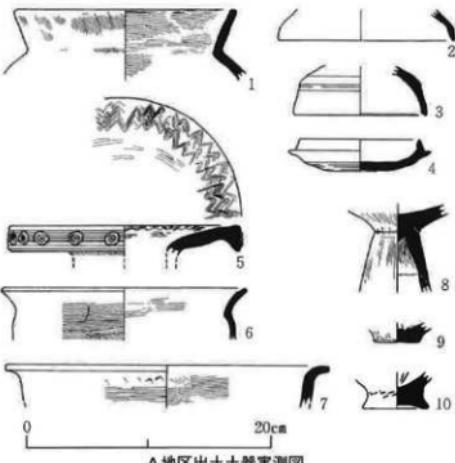
弥生土器は鉢、高杯、器台がある。6・7・10は鉢である。6は口径19.4cmを測る中型の鉢で口縁部をヨコナデ、体部には横のハケメ後に縱にヘラミガキを施す。7は口径26.2cmを測る大型の鉢で口縁端部が面をなし、外面にヘラミガキを施し内面をハケメで整える。10は底部である。8は高杯の脚部で中空の脚柱をもち外面にヘラミガキを施す。5は器台で下方に拡張した口縁端部に8条の擬凹線を施し、竹管文を施した円形浮文を貼る。口縁内面には櫛描の波状文を施す。5・7~9は生駒西麓産の胎土である。

土師器は甕がある。1は土師器の甕で外上方に短く開く口縁をもち、口縁部外面を縱にハケメで整えた後、ヨコナデを施す。また口縁部内面には粗いハケメを横に施す。胎土は生駒西麓産である。

須恵器は壺、杯がある。11は須恵器の壺の体部片で外面に格子目のタタキが、内面にはナデ消された同心円状の當て具痕が残る。2・3は坏蓋である。2は口径14.2cmを測り、明瞭な稜をもたずロクロナデで整える。3は口径10.8cmを測り、ロクロナデによる稜がみられ、頂部にはロクロケズリが残る。4は坏身で口径9.8cm・器高2.5cmを測る。たちあがりは内傾して短く真上に立ち上がり、受部は水平に外方にのびる。底部外面にはロクロケズリが残る。

## 4.まとめ

A地区全域から弥生時代後期と古墳時代中期末から後期の二時期の良好な遺物包含層の存在が認められ、段上と下六万寺の両遺跡にまたがり包含層が間断なく続くことを確認した。前年度の調査成果とあわせると二時期の包含層は広範囲にわたって広がると考えられる。





B地区掘削状況



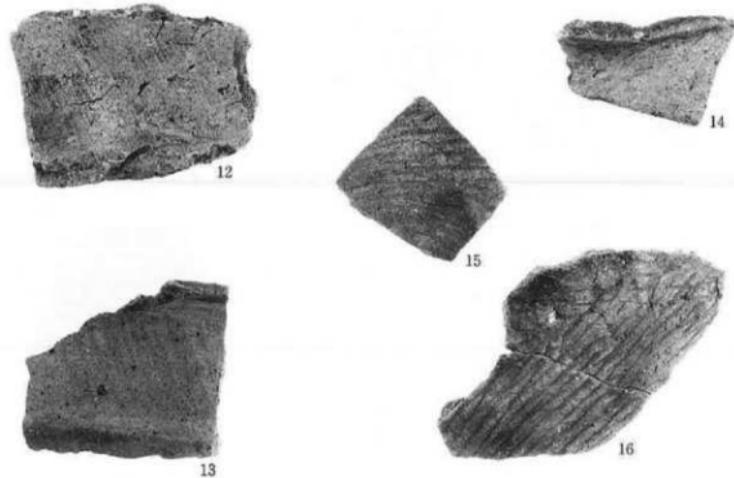
C地区掘削状況



C地区調査断面



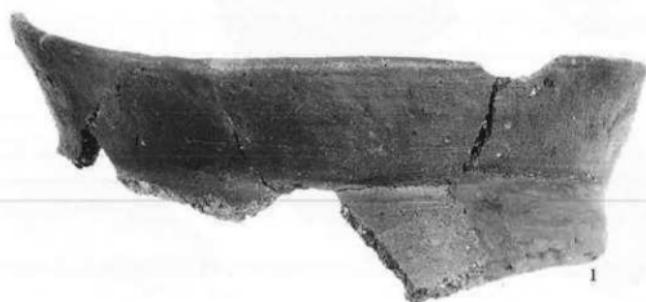
弥生土器



A-1区 第7層出土弥生土器

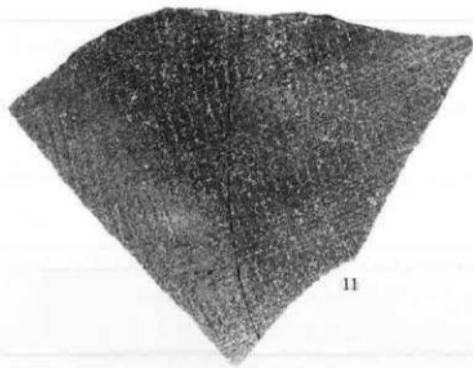


5



1

弥生土器・土師器



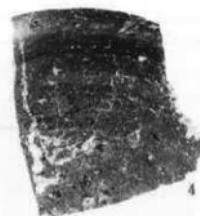
11



3



2

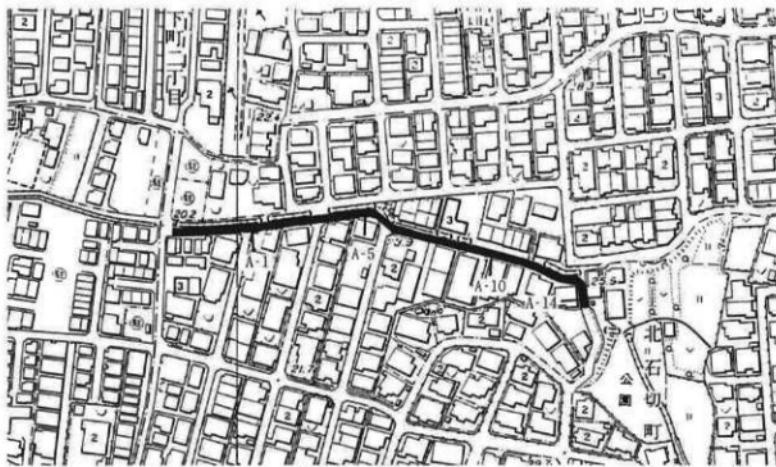


4

須恵器

## 第20章 芝ヶ丘遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第82工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市北石切町地内
3	調 査 面 積	205m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年7月5日～7月23日（延べ13日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は芝ヶ丘遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9mで長さ約205mの間であり、開削工法である。





調査地遠景

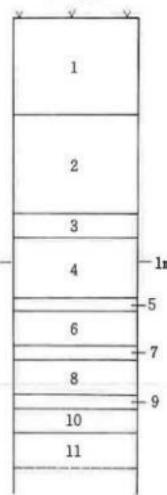


調査風景



調査地断面

A-1地区



断面略図

### 1. 調査の概要

#### 層序

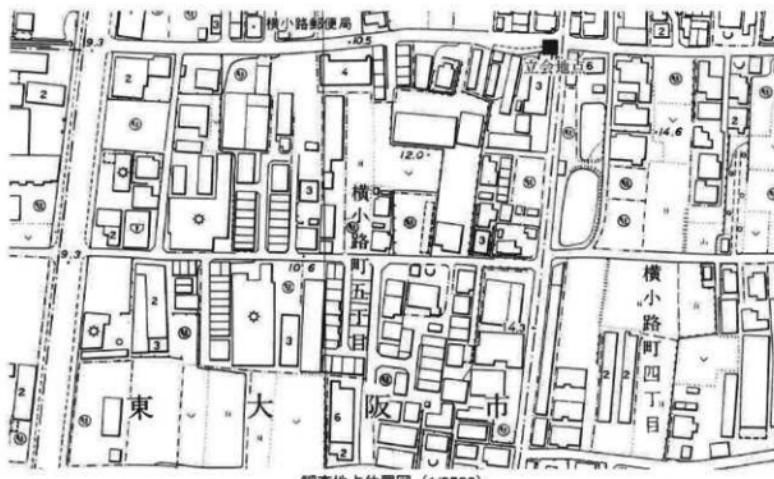
- 第1層 盛土。
- 第2層 黄褐色粗砂混じり粘質土。
- 第3層 明緑灰色粘質シルト。
- 第4層 明黄褐色細砂。
- 第5層 明緑灰色粘土。
- 第6層 明黄褐色細～粗砂。
- 第7層 青灰色粘土。
- 第8層 灰色細砂と粗砂の互層。
- 第9層 青灰色粘土。
- 第10層 棕色細砂。
- 第11層 棕色中～細砂。

#### 2. まとめ

立会調査を実施したが遺構、遺物は検出できなかった。

## 第21章 コモ田遺跡隣接地の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町5丁目
3	調 査 面 積	4 m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年8月2日（延べ1日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点はコモ田遺跡に隣接しており、遺跡の範囲を確認するため、工事中に立会調査を実施した。





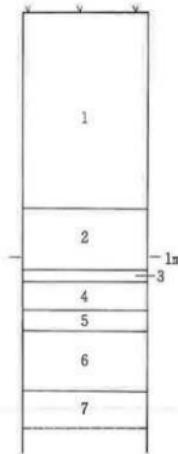
調査地遠景



調査地近景



調査地断面



断面略図

### 1. 調査の概要

#### 層序

第1層 盛土。

第2層 灰オリーブ色粘質土

第3層 赤色と黒色の混じる  
粘土。

第4層 にぶい橙色細砂。

第5層 赤色と黒色の混じる  
粘土。

第6層 灰褐色砂混じり粘質  
土。

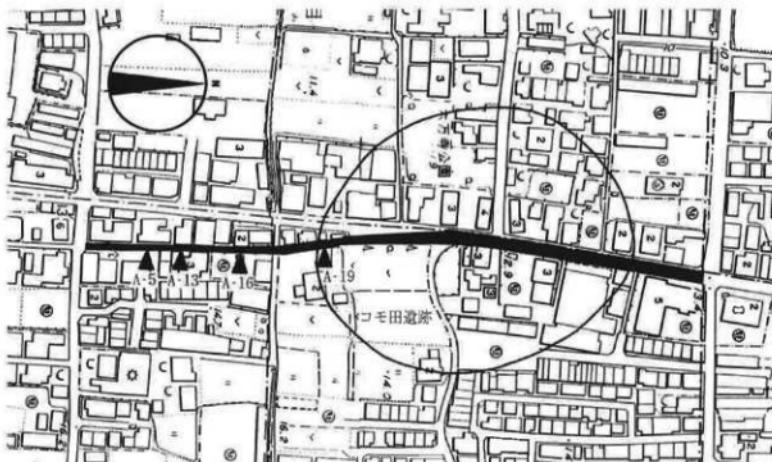
第7層 暗灰色粘質土。

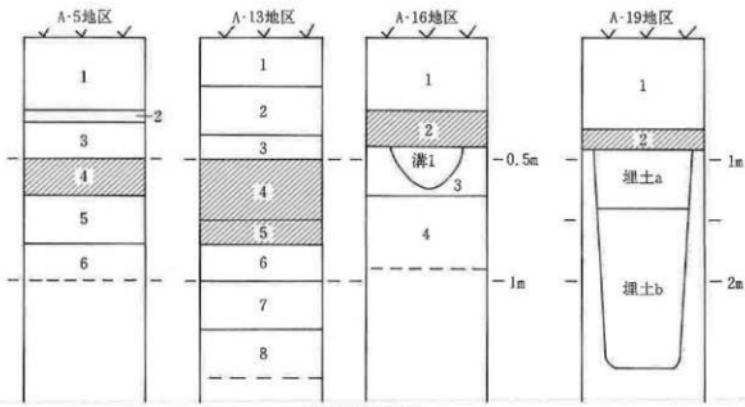
### 2. まとめ

立会調査を実施したが遺構、  
遺物は検出できなかった。

## 第22章 コモ田遺跡の第3次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第43工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町2丁目地内
3	調 査 面 積	131m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年8月2日～11月9日（延べ24日）
5	報 告 担 当	坂田典彦
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点はコモ田遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は旧国道170号線車道と南東へ枝分かれする道路である。旧国道部分は夜間工事のため立会調査できなかった。また、南東道路の南は遺跡外であったが遺構、遺物を検出したので立会調査を実施した。





### 1. 調査の概要

当調査地は、繩手南小学校西方、旧170号線脇辺の横小路町に位置する。文化財包蔵地指定区(以下指定区と略す)内から始まり南へ150m間で実施され、指定区内はバス道であり夜間調査のため未調査、A-1~10地区までは、既設管による擾乱が著しく断片的な調査となった。A-10地区(指定区外)以降は比較的残りがよく、弥生時代後期～古墳時代初頭の包含層を追うことができた。また、A-16・19地区では溝・井戸の遺構を検出した。包含層はいずれも現地表面から-1m以内の黒褐色系疊混じり粘質土が主体である。以下に断面柱状図を記す。

### 2. 層序

#### A-5 地区

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒色(10Y2/1)疊混じりシルト。
- 第3層 暗灰黄色(2.5Y4/2)疊混じりシルト。5~10mm大の礫、やや多く含む。
- 第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)疊混じり粘質土。2mm大の礫含む。南へ行くにつれ層厚増す。弥生時代後期の包含層。
- 第5層 灰色(5Y4/1)疊混じり中粒砂。
- 第6層 灰黄色(2.5Y6/2)疊混じり砂質土。

#### A-13 地区

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黄色(5Y6/4)疊混じりシルト。
- 第3層 灰褐色(10YR4/2)粘質土。中粒砂若干含む。
- 第4層 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂混じり粘質土。上面に遺物が多く、遺構面の可能性がある。
- 第5層 黒褐色(7.5YR2/2)粘質土。遺物若干含む。
- 第6層 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混じり粘質土。
- 第7層 オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂混じり粘質土。
- 第8層 灰オリーブ黒色(5Y4/2)細粒砂。

#### A-16地区

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(10YR3/1)礫混じり粘質土。2mm大の礫多く含む。遺物包含層。
- 第3層 灰色(5Y5/1)礫混じりシルト。5mm以下の礫を含み、やや粘性をもつ。上面から溝が切り込む。
- 第4層 灰オリーブ色(5Y6/2)砂礫。
- 溝1埋土 青灰色(5BG5/1)粘質土。1mm以下の礫を少量含み、粘性強い。東西に走り、幅30cm、深さ21cmである。

#### A-19地区

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(7.5YR3/1)礫混じり粘質シルト。粘性強く、3mm大の礫多く含む。古墳時代包含層井戸の埋土でもある。
- 井戸堆積土 黒色(5YR1.7/1)粘土。粘性は弱く、下部は砂層に至る。植物遺体を多量に含む。古墳時代の土師器、横植出土。

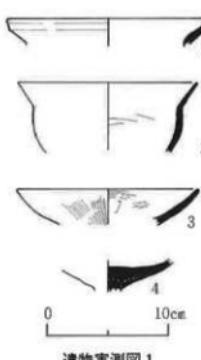
### 3. 出土遺物

今回の調査では、弥生時代後期と古墳時代初頭の遺物を検出した。大まかな地区別では、攪乱が著しかったA-1~10地区間で、図化出来なかったが弥生後期の遺物を、A-11地区以降で古墳時代の遺物を検出した。特に、A-19地区での井戸遺構からの一括遺物は、良好な資料と言えよう。

壺（1） 口径は、推定16.3cmを測る。口縁部は頸部が外反しながら立ち上がり、端部はやや内折し丸くおわる。

小型丸底壺（2） 口縁部は球形の体部から上外方へ直線的に立ち上がり、端部は尖りぎみにおわる。外面調整は、磨滅しているがおそらくミガキを施し、内面調整はケズリないし板ナデを施す。

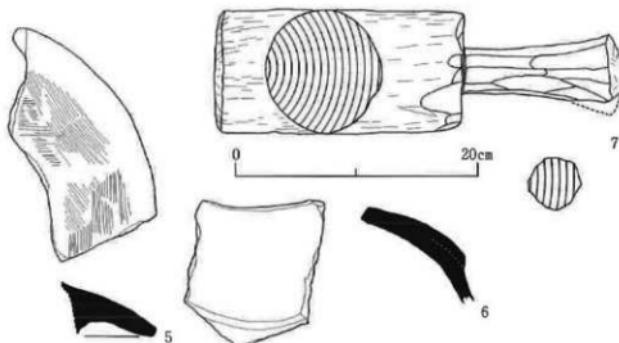
高杯（3・4） （3）は、杯部のみ残存し椀形の杯を持つ。口径は推定14.8cmを測り、外面調整は粗いタテ方向のハケメ、内面調整は口縁端部付近横方向のハケメ、体部は板ナデを施す。（4）は、脚・杯部の接合部であり、杯部の立ち上がりが左右対称でない粗雑なつくりである。あえて反転していい。接合は、中空の柱状部を杯部にはめ込む差し込み技法である。



遺物実測図1

カマド（5・6） 井戸堆積土から出土した（5・6）は、ともにカマドを構成するもので、（5）は鉢部、（6）は底の部位に相当する。（5）の復原径は、32.4cmを測り、これから全体の大きさをイメージすることが可能である。上面は、粗いハケメを時計回りに2~3周くり返し、端部は面を持ち、ヨコナデ調整で丁寧に仕上げる。下面は、指ナデ調整を施し、熱を受け焼の付着が著しい。剥離面は、斜方向に上面と同じ粗いハケメが見られ、①接着前にハケで整形した、②体部接着部の調整が移った、のいずれかが考えられる。（6）は底に相当する部分で、最大の器厚は2cmを測る。内面は粗い指ナデ調整を施し、外側は磨滅している。

横植（7） 法量は、全長33.8cm、植部・長さ20.8cmで円筒形を呈する。握部・長さ13.0cm、グリップエンドに近づくにつ



遺物実測図2（井戸内出土）

れ径を増す（バットと同じくストップ効果を作っている）。使用痕はさほど見受けられないが、木目に直交する部分にそれに相当するいたみがある。野球のバットをイメージすると、ストップ効果も使用痕の部位も理解しやすい。槌部と握部は、一本からの削り出しで、握部の長さから推測すると片手で握っていたであろう。樹種は、報告担当の肉眼観察ではあるが広葉樹と考えられる。ほぼ完形品である。

#### 4.まとめ

今回、比較的浅い所で検出した遺物包含層は、南に隣接する馬場川遺跡の埋蔵文化財包蔵地（以下包蔵地と略す）指定域とつながり、井戸・溝・ピットなどの遺構をも確認することが出来た。後に、井戸堆積土から出土した遺物について、出土遺物の章では（5）（6）セットでカマドを構成すると記したが（5）に関しては初現期の羽釜の可能性もある。どちらにせよ、井戸（堆積土）に、煮炊具・横槌（完形品）を埋納したのであるが、十分な調査ではなかった為、埋納時期が廃絶時・使用時・開始時の判断がつかない。儀礼行為の意は確かである。

拡張する範囲について、コモ田遺跡・馬場川遺跡のどちらかに含まれるかという問題は、以前の調査（木造二階建住宅に伴う試掘調査・昭和61年『文化財協会ニュースVOL2 No1』1986菅原）の出土遺物の時期が同じであることから、コモ田遺跡の範囲を拡張する方が望ましい。

当遺跡周辺は遺跡が密集しており、縄文時代から連続と生活が営まれてきたことがうかがえる。近年都市整備にともない遺跡は開発の一途をたどるが、当遺跡のように包含層の浅い包蔵地はより事前調査を慎重に行なう必要がある。



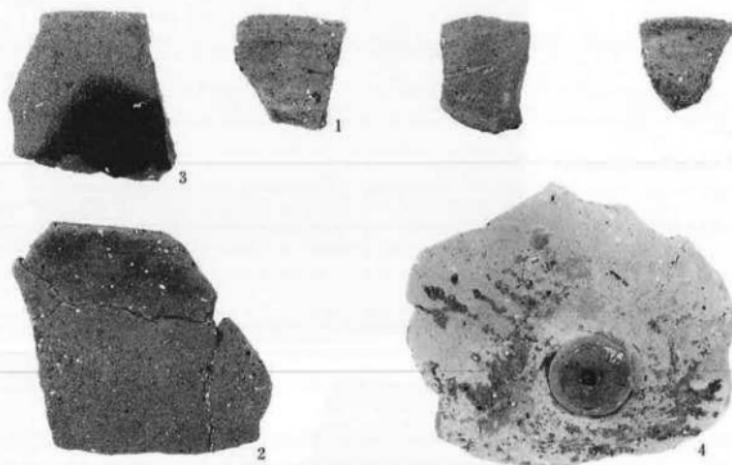
調査断面



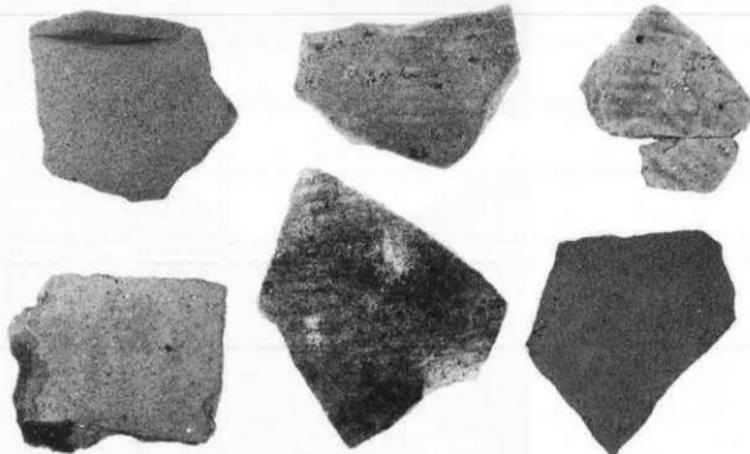
調査地遠景



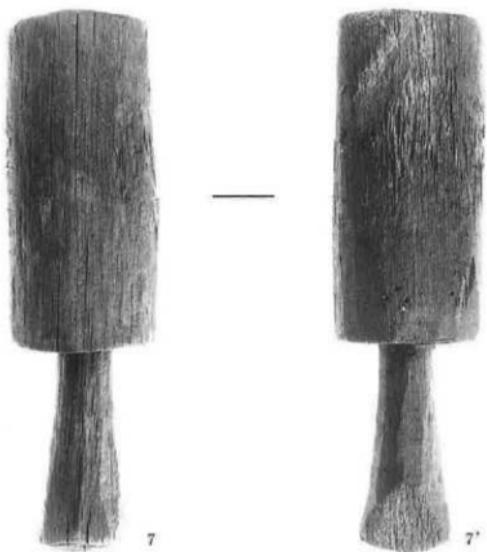
調査地遠景



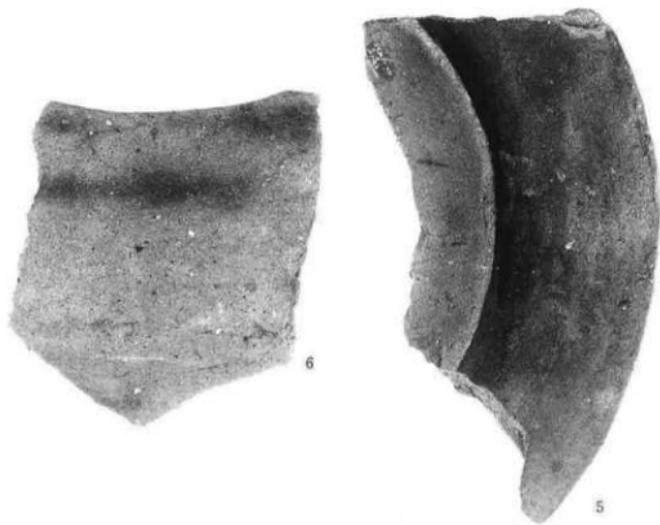
土器 1



土器 2



横櫛（井戸内出土）

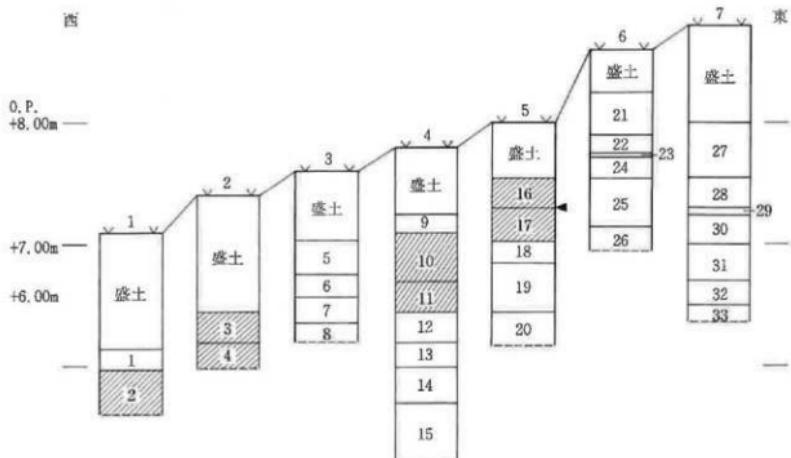


カマド（井戸内出土）

## 第23章 鬼虎川遺跡の第50次調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成10年度公共下水道第61工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市弥生町地内
3 調 査 面 積	287m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間	平成11年8月3日~12月20日(延べ51日)
5 報 告 担 当	東 徹志
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、現況が水田であるB地区を発掘調査、道路であるA・C地区を立会調査することになった。範囲は幅約0.9~1.1mでA地区が長さ約98m、B地区が長さ約98m、C地区が長さ約105mである。





1. 暗青灰色 (10BG4/1) 粘質土  
 2. 青褐色 (5BG2/1) 粘質土、繩文  
 3. 黒褐色 (2.5Y3/1) 多量細繩混シルト、炭化物含む、弥生  
 4. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘質シルト、弥生  
 5. 黒色 (2.5Y2/1) 多量細繩混粘質シルト  
 6. 綠灰色 (10G5/1) 極少量細繩混シルト  
 7. オリーブ黒色 (5PB4/1) 多量細繩混粘質シルト  
 8. オリーブ黑色 (10Y3/1) 細繩混粘質土  
 9. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト、やや粘質  
 10. 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂混粘質土、弥生  
 11. 黒褐色 (10Y3/1) 細粒砂混粘質土、少量10~30cmの大中・巨礫含む、弥生  
 12. 暗褐色 (10YR4/1) 少量細繩混粘土  
 13. 褐灰色 (10YR5/1) 粘土  
 14. 灰色 (7.5Y6/1) 粘土、灰色 (10Y6/1) のしみ込み  
 15. オリーブ暗色 (10Y3/1) 粘土、オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘土の斑点  
 16. 細繩混シルト  
 17. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト、弥生・中世  
 18. 黒褐色 (5TR2/1) 細繩粘質土  
 19. 褐灰色 (10YR4/1) 細繩粘質土、にぶい黄褐色 (10YR5/1) の斑点  
 20. 暗褐色 (2.5GY3/1) 粘土  
 21. 暗青灰色 (5B4/1) 多量の細繩混シルト  
 22. 灰色 (N4/1) 細繩混シルト  
 23. 灰白色 (2.5Y8/2) 粘砂、湧水  
 24. オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘質土、粘性強  
 25. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極少量細繩混粘土、湧水  
 26. 黑色 (2.5Y2/1) 粘土、かたくしまる  
 27. オリーブ黒色 (7.5T3/1) 粘質土  
 28. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細繩混粘質土  
 29. 黑色 (7.5Y2/1) 粘土、水多  
 30. 黑色 (7.5Y2/1) 細繩混粘土、しまる  
 31. オリーブ黑色 (5Y3/1) 砂質土  
 32. オリーブ黒色 (5Y3/2) 中纏混壤土、湧水  
 33. 灰色 (7.5Y4/1) 中纏混粘質土、粘性強

A 地区土層断面柱状図

## I. 調査の概要

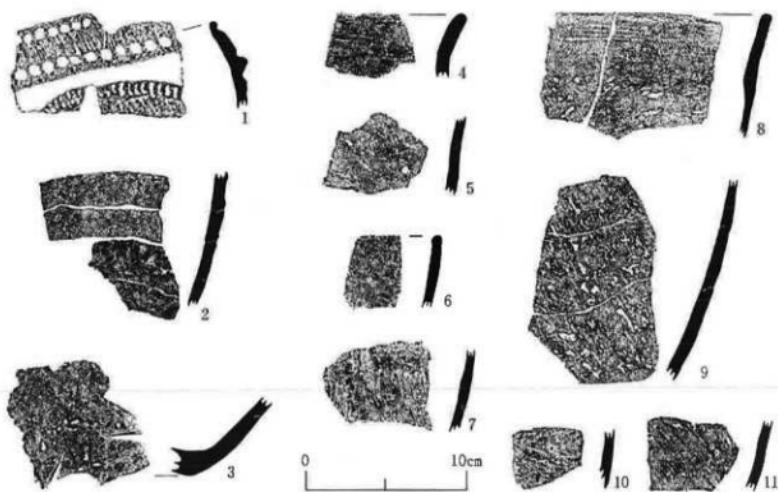
調査地を三地区にわけ南側をA地区、北側の西をB地区、東をC地区と呼称した。B・C地区の中間地点は鬼虎川遺跡第45次調査地にあたる。立地は扇状地から平野部に移行する位置にある。現況はいずれの地区も西に下り、地区両端の比高差がA・C地区は約2m、B地区は約1mになる。調査はA・C地区は立会調査、B地区は発掘調査を実施した。一日の調査範囲を1区とした、そのため調査距離は一定しない。A地区が6区を、B地区が20区を、C地区が10区を数える。以下、地区別に報告する。

## II. A地区の調査

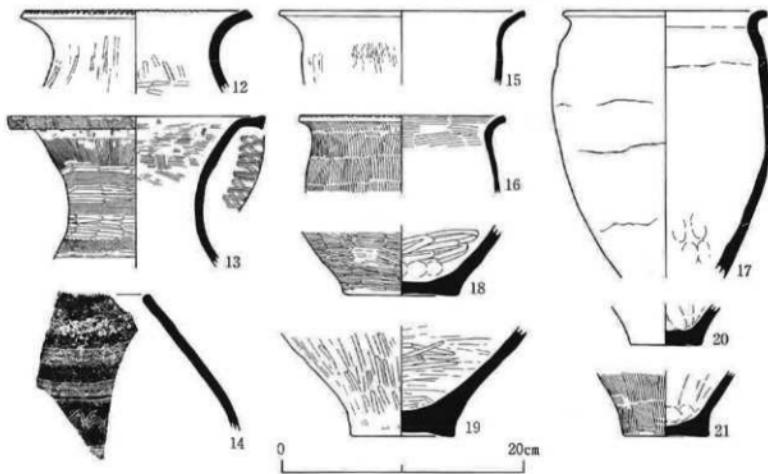
### 1. 調査概要

0区は工事着工時の連絡の遅れにより西端から約50mの範囲が未調査となった。この範囲については仮置中の残土からの遺物採集と枝管工事の際に立会調査を行った。

調査では繩文時代中期の土器が0区より、晩期の土器が1地点より出土した。弥生土器・須恵器・土師器・瓦器などは0~2区より出土、とくに2区では甕(17)が立った状態で検出した。また中世の遺構面も存在する。3区から東は遺物の出土は稀薄となり、0~2区には弥生中期初頭、古墳時代後半、中世の三時期の遺物包含層が広がる。

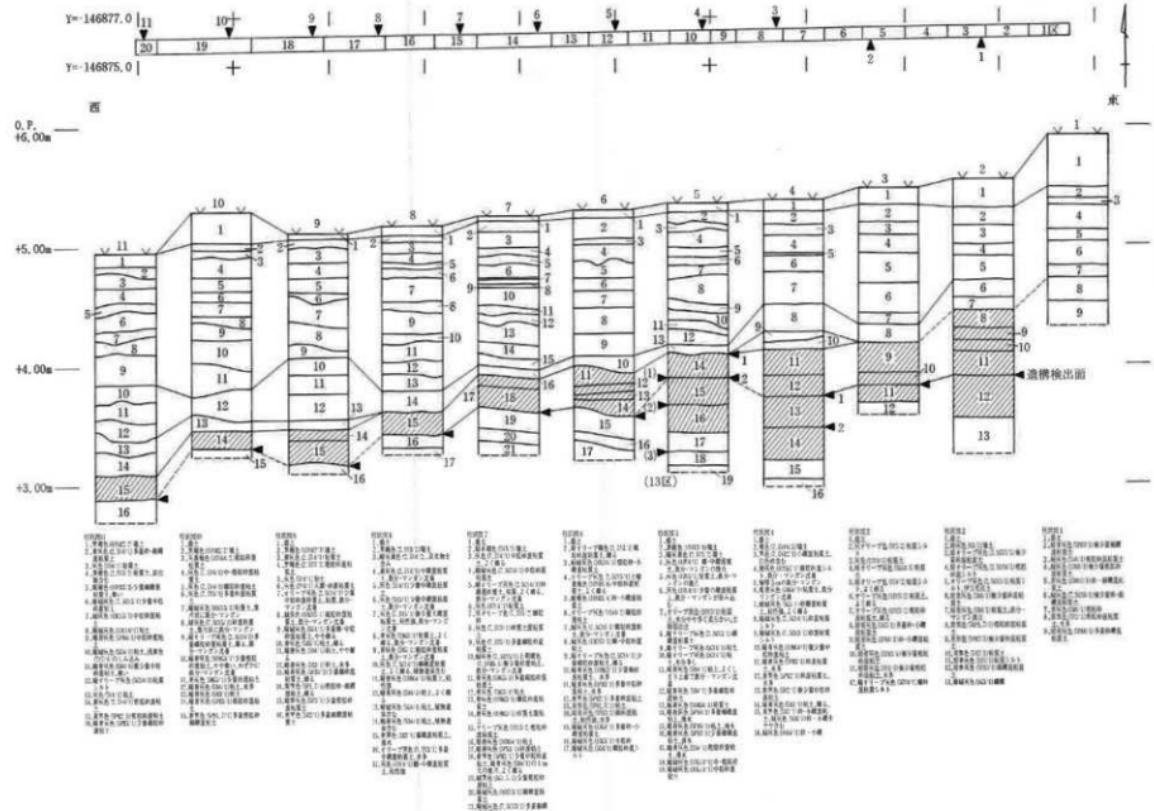


A地区出土绳文土器拓影·断面图

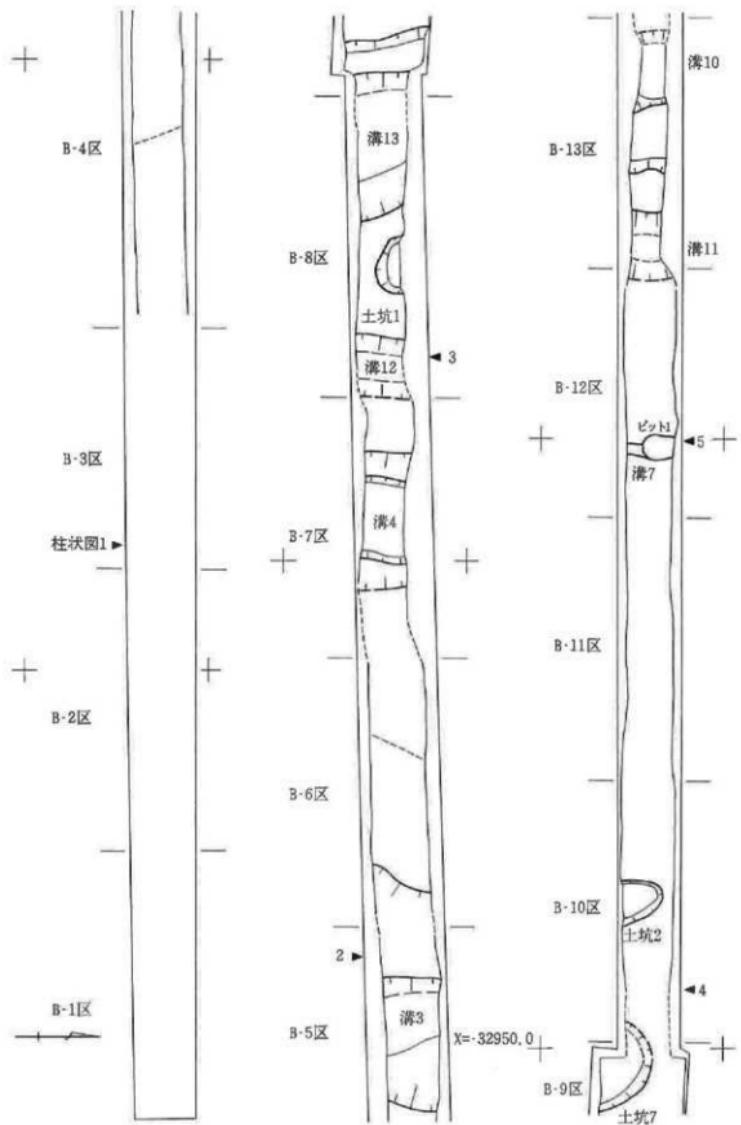


A地区出土弥生土器实测图

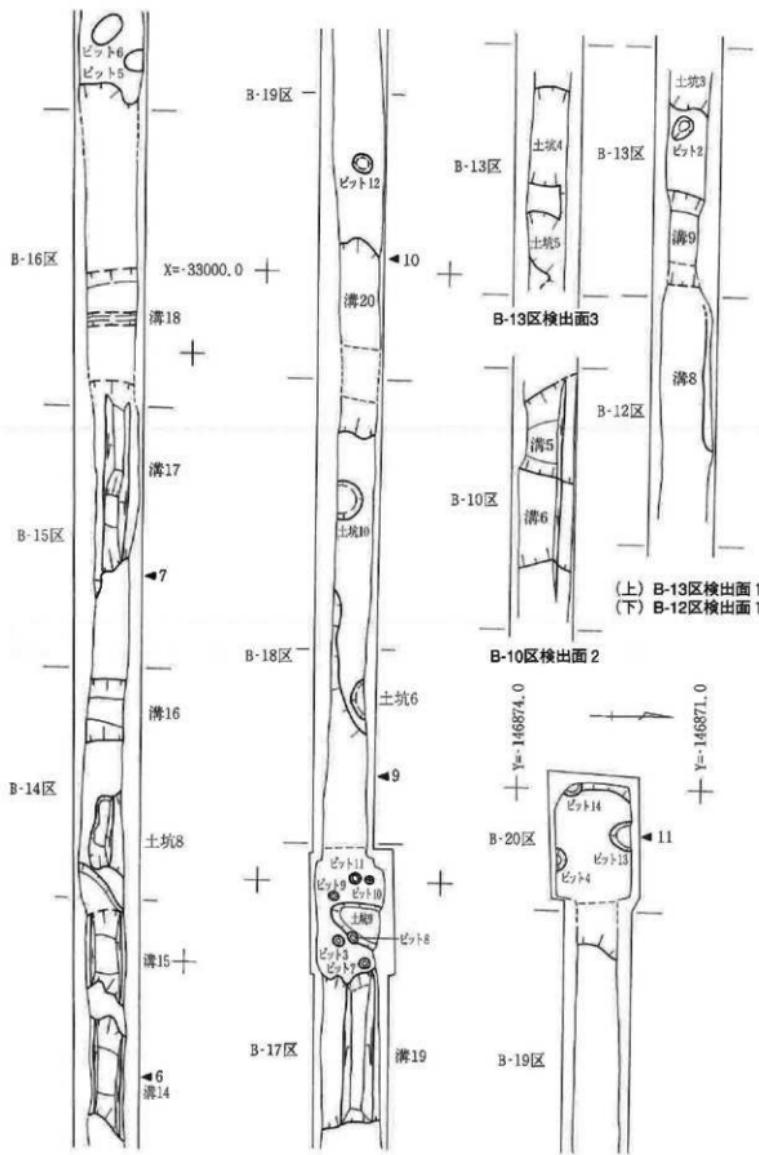
		2. 層位
+	B-20	柱状図は1~3が0区、4が1区、5が2区、6が4区、7が6区において記録し、0~2区で遺物包含層を確認した。詳細は層序を参照。
	B-19	3. 出土遺物
+	+ X=-33000.0	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、サヌカイトなどが出土した。弥生土器以外の出土量は多くない。以下、図化できたものについて述べる。
	B-18	縄文土器は1~11がある。1は中期の深鉢でキャリバー型の波状口縁をもち、外面に円形刺突文とC字形爪形文を施す。船元I・II式にあたる。2~11は晩期の深鉢である。4・6・8は口縁部で横にナデが入る。それ以外は体部で2はナデを、7は貝殻条痕文を、他はケズリを施す。3は凹み底の底部である。2~5・8・9・11は生駒西麓産胎土である。
+	+	
+	B-17	
+	B-16	弥生土器は壺と甕がある。壺は12~14である。12はしばった頭部から口縁部が短く外反し、端部が面をもち刻み目を施す。13は大きく開き水平にのびる口縁に、上下に拡張した口縁端部をもち櫛描波状文を施す。頭部には櫛描の直線文と波状文が入る。14は無頸壺で櫛描の直線文と波状文を施す。
+	B-15	
+	B-14	甕は15~17がある。15~16は大和型の甕で、16は口縁端部に刻み目をもち体部外面と口縁内面に粗いハケメを施す。17は河内型の甕で調整は不明。
+	B-13	
+	B-12	13~15は生駒西麓産胎土である。
+	B-11	III. B地区の調査
		1. 調査概要
+	B-10	発掘調査を実施、掘り下げが深いため軽量鋼矢板を用い土留めを行った。安全深度を超える深さは調査を断念した。管敷設に支障をきたす箇所も断念した。今回は安全上、長時間にわたる調査区の開放・放置ができず、1日に約4~8mの範囲で調査を実施、終了後に敷設工事を行い次区に移った。いずれも施工業者との協議の結果行った。調査は日程上、上位層での密な調査は行えず、弥生相当層を対象に深さ約2~3.5mまで行った。掘削には人力と機械を併用した。
+	+ X=-32950.0	
	B-9	
	B-8	
+	B-7	
+	B-6	遺構は地区東端を除き多数検出した。地区中央では複数の遺構面が存在する。遺物は地区東端を除き多量に出土した。時期は遺構がほぼ弥生時代の中前期初頭、畿内第II様式の範疇におさまり、広く当時期の遺物が出土する。その他、10区より縄文時代晩期の深鉢の口縁部が1点、10区の溝5より中期前半の完形の壺が出土した。また16~17区付近では弥生時代前期末の遺物が見られた。
+	B-5	
+	B-4	
+	B-3	
+	B-2	
	B-1	2. 層位
+		土層断面図は柱状図で表現した。弥生時代の包含層は紫黒色粘土を基本とする。詳細は層序を参照。
+		3. 遺構
+		遺構は溝、土坑、ピットを検出、溝と土坑は調査幅が狭いため判別は確実でない。規模の表記については溝を(幅×深さ)、土坑を(長径もしくは短径×深さ)、ピットを(直径×深さ)とした。断面の形状は多くが皿状を呈し
B地区調査区配置図		



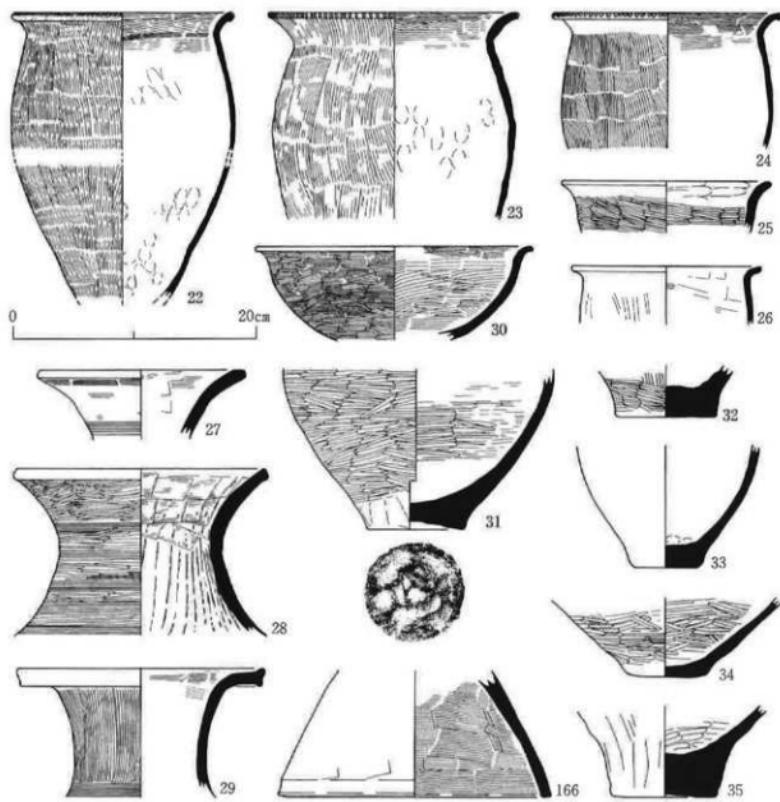
### B地区土層断面柱状圖



B地区検出遺構平面図 1



B地区検出構造平面図 2



溝4出土土器・土製品実測図

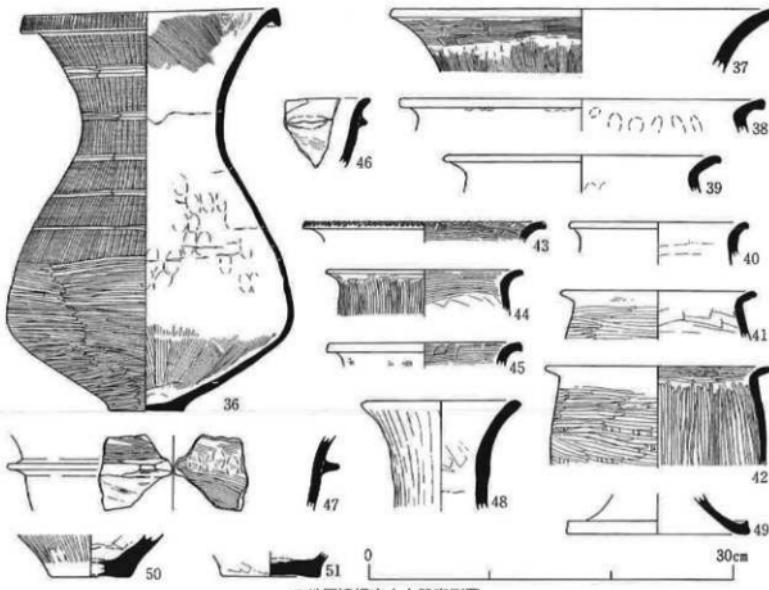
ため、それ以外を記述した。以下、遺構別に述べる。

溝3は2.3m×0.8mを測り断面は逆台形を呈す。埋土は砂と砂を含む粘質土が堆積する。遺構の幅は6mを超える可能性がある。

溝4は2.7m×0.7mを測り断面が二段落ちの逆台形を呈す。遺物は底面より10cm上で溝掘り方に沿う形で出土した。出土量はコンテナ一杯分を超える。埋土は砂を多く含む紫黒色粘質土が堆積する。

溝5は1.1~1.6m×0.6mを測り断面が逆台形を呈す。埋土上層より完形の壺(36)が西に口縁を向け倒れた状態で出土。畿内第Ⅲ様式の土器である。溝6は幅2.8mを測る。深さは1mを超えて完掘を断念した。溝5・6は切合せが溝5は溝6の埋没過程を捉えた姿とも考えられる。

溝7は0.2m×0.1mを、溝9は1.5m×0.2mを、溝10は1m×0.2mを、溝11は0.9m×0.2mを、溝12は1m×0.3mを測る。溝13は1.6m×0.4mを測り断面U字形を呈す。溝14は1.6m×0.6mを測り断面U字形を呈す。溝15は1.4m×0.2mを、溝16は1m×0.2mを、溝17は3m×0.2mを測る。溝



B地区遺構出土土器実測図

18は約0.3m×約0.2mを測り断面が逆台形を呈す。壁面で検出、方向などは推定である。溝19は2.4m×0.4mを測り断面が逆台形を呈す。溝20は3.3m×0.2mを測る。

土坑1は長径1m×0.2mを、土坑8は深さ0.1mを、土坑2は短径0.7m×0.2mを、土坑3は深さ0.3mを測る。土坑4は長径1.5mを、土坑5は長径1mを測る。いずれも完掘を断念。土坑6は長径0.9mを、土坑7は深さ0.1mを、土坑8は長径1.2m×0.2mを、土坑9は短径0.7m×0.2mを、土坑10は直径0.6mを測る。

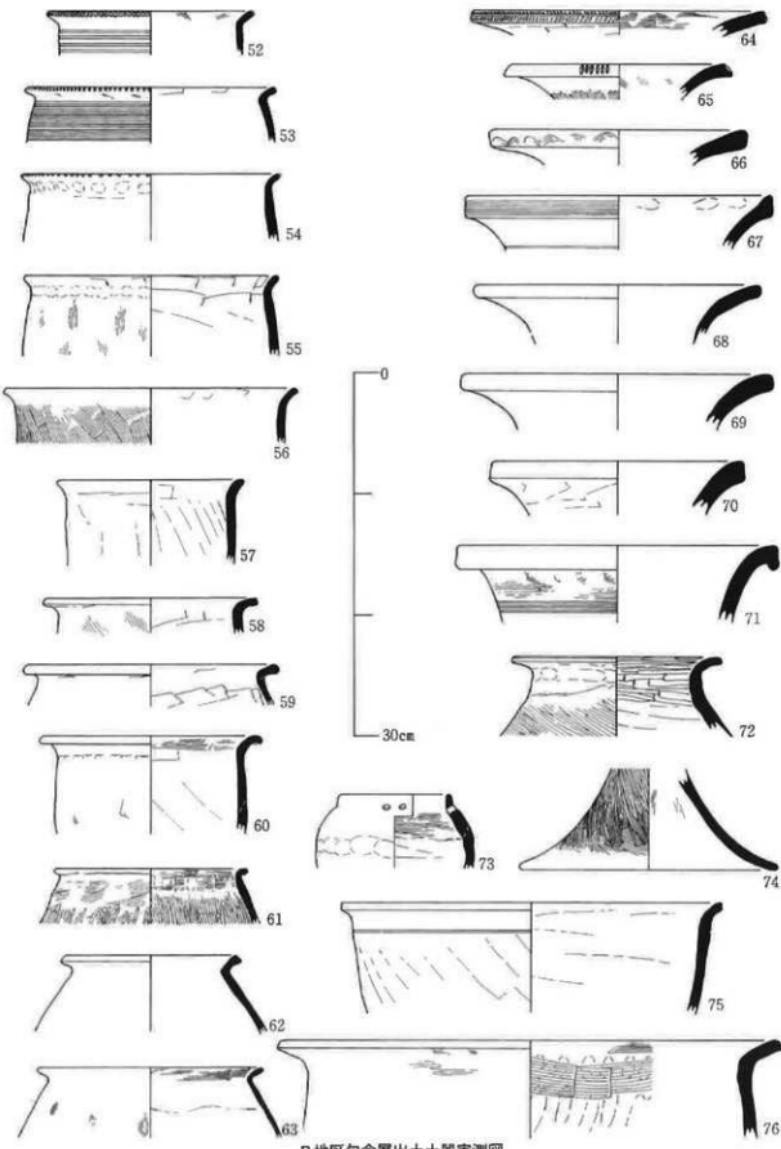
ピット1は短径0.4m×0.1mを、ピット2は21~27cm×25cmを、ピット3は0.2m×33cmを測る。ピット4は0.4m×18cmを測りピット内は木材が腐植したものである。ピット5は短径0.4mを、ピット6は直径0.3~6cmを、ピット7は直径0.2mを、ピット8は0.2m×7cmを、ピット9は0.2m×15cmを、ピット10は直径0.2mを、ピット11は15cm×4cmを、ピット12は直径0.3mを、ピット13は0.5m×12cmを、ピット14は0.4m×13cmを測る。

#### 4. 出土遺物

縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、土製品、石器等が出土した。以下、須恵器と土師器を除き、図化したものについて述べる。

縄文土器は深鉢が、弥生土器は壺、甕、高坏、鉢、台状土製品、蓋がある。

弥生土器は遺構出土と包含層出土がある。遺構出土土器は22~49・91・92・94・123~142である。22~35は溝4、36~37・40~46・48は溝5、38は土坑4・5、39はピット5、41~43・45~91・92・123~124・126・127は溝6、42~44は土坑2、47~49・50は溝3、51~125は溝11、94は土坑7、128は土坑1より出土した。



B地区包含層出土土器実測図

27~29・36・37・48は壺である。27・28・37はしづった頸部より大きく外反した口縁部に端部が面をもつ。27・28は頭部に横描直線文が巡る。29は水平にのびる口縁部に上下に拡張した端部をもち、頸部に横描直線文が巡る。36は細くしづった頸部から外反する口縁に、端部が垂下して拡張した面をもつ。体部は下膨れする。口縁端部から体部中程までに幅の広い7条の横描簾状文を施す。体部のヘラミガキは四分割される。48は頭部が細く伸び板ナデを施す。

22~26・38~45は甕である。22~24・43~45は大和型の甕で、22~24・43は口縁端部に刻み目をもち外面と口縁部内面に粗いハケメを施す。44~45は刻み目をもたずに口縁部内面に横のハケメを施す。25はなだらかに外反する口縁をもちヘラミガキを施す。26~38は逆L字を呈した口縁に端部が面をもつ。26は板ナデとヘラミガキを、38はナデを施す。39~40はくの字に外反する口縁に端部が面をもちナデを施す。41~42はやや屈曲の強いくの字の口縁をもちヘラミガキを肩部に施す。

31~35・50~51は壺・甕の底部で、31は底面に明瞭な指頭圧痕が残る。30~49は高坏で、30は浅い皿状を呈して口縁部がゆるく外反する。外面に煤が付着する。36は台状土製品で鉢を伏せた形を呈し、内面にハケメを、外面には板ナデの後ナデを施す。裾端部外面は横にナデが入る。46~47は鉢で、46は先の細い船底形の把手を貼り付ける。47は上下をナデで整え長く突き出した把手が巡る。

以下、包含層出土土器である。甕は52~63・75~76がある。52~53は胴部に多条の沈線が巡り、口縁端部にヘラミガキを施す。54~57はくの字形の口縁部を呈し、肥厚して端部は面をもつ。54~55は頸部外面に指頭圧痕が残る。58~59は逆L字形の口縁を呈し、肥厚した端部が面をもつ。60は外反する口縁がやや垂下し、内面にハケメを施す。61~63は大きく張る頸部をもつ。61は短い口縁をもち、胴部内外面にヘラミガキを施す。62は肥厚した口縁が明瞭な面をもつ。75は緩やかに外反する口縁部をもち、胴部に一条の沈線が巡る。口径29.6cmを測る。76は厚い器壁に逆L字形の口縁をもつ。口径40cmを測る。

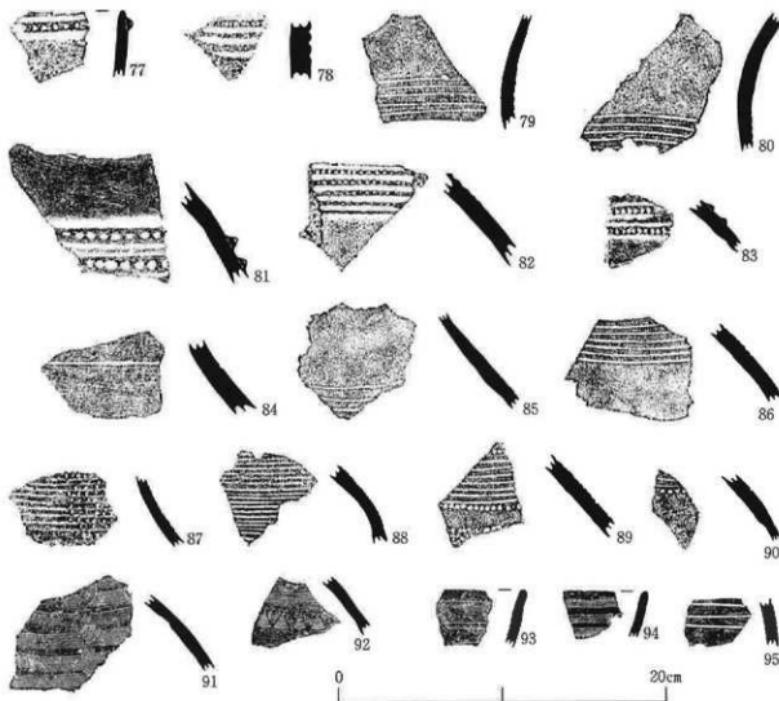
壺は64~73がある。64~67は口縁端部に刻み目、横描波状文と直線文が入る。68~70は大きく外反する口縁部に、肥厚した端部が面をもつ。71は大きく外反する口縁に、短く垂下した端部をもつ。頸部に横描直線文が巡る。73は短い口縁が垂直にのび、口縁部に二つの穿孔がある。74は蓋で口縁内面にリング状に煤・炭化物が付着する。25~40・42~47・51~55・56~59~61~63~68~70~72~74~76は生駒西麓産胎土である。

77~100は繩文、弥生土器の拓影及び断面図である。77は繩文土器で口縁端部に貼付突帯が巡る。晩期、長原式の深鉢である。78~80は壺の頸部で78が削出突帯に刻み目が、79~80には沈線を施す。81~92は壺の体部で81~83は貼付突帯に刻み目が、82には削出突帯に刻み目を施す。他は沈線を一条から多条施す。89~90には沈線に平行して円形刺突文が巡る。91~92では横描文が見られる。93~94は鉢の口縁部で横描文を施す。96~100は甕で体部に一条から多条の沈線が巡る。99~100の口縁端部には刻み目を施す。79~84・86~89・91~94・96~98~100は生駒西麓産胎土である。

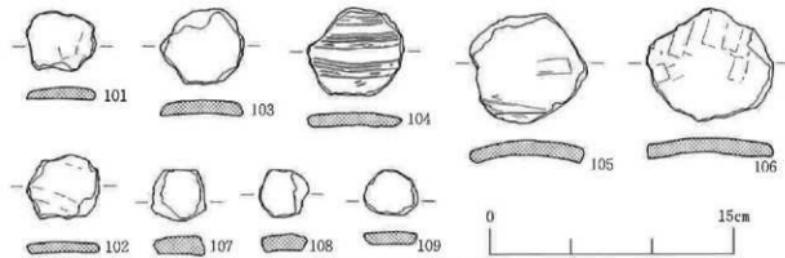
円板状土製品は101~106・135があり、法量から三つに分けた。径が7cm以上を測る105・106・135、3.5cm未満の107~109、中間の101~104がある。

石器は磨製と打製のものがある。磨製石器は115~117である。115~116は石庵丁で、115の体部には敲打痕があり二次的な使用痕と考えられる。いずれも片刃で、刃部には磨滅や刃こぼれなどがみられる。重さは115が13.03gを、116が7.98gを測る。117は大型の石庵丁で焼成を受けており破損が著しい。重さ120.99gを測る。筆者の肉眼観察の結果、いずれも緑色の結晶片岩製と思われる。

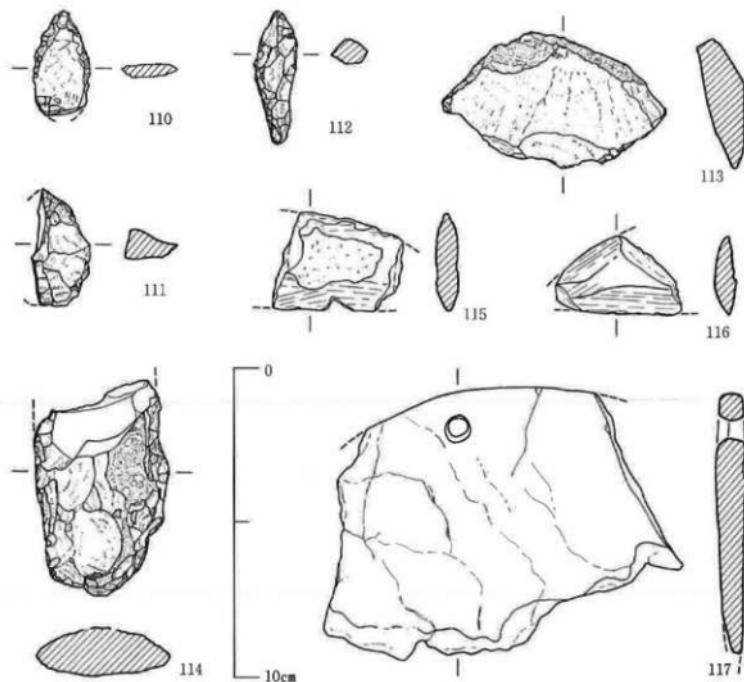
打製石器は110~114・159~165であり、すべてサヌカイト製である。法量の表記については(長さ×幅×厚さ×重さ)とした。110は石錐で横型剥片を用い基部が欠損する。3.35cm×1.85cm×0.4cm×



B地区出土繩文・赤生土器拓影・断面図



B地区出土円板状土製品実測図



B地区出土石器実測図

3.25 g を測る。112は石剣で横型剥片を用い、両端に使用による磨滅がみられる。4.3cm×1.4cm×0.8cm×3.92 g を測る。111は石鎌未製品で綫型剥片を用い、製作時の事故品と思われる破損である。重さ6.42 g を測る。114は石剣の破損品で側縁に刃潰しと基部にサメカイト表皮が残り、表面には研磨が見られる事から柄部と考えられる。6.95cm×4.35cm×1.6cm×51.04 g を測る。113・159～165は削器である。法量は113が7.25cm×4.4cm×1.3cm×38.55 g を、159が4.14cm×3.98cm×1.01cm×15.77 g を、160が3.06cm×1.43cm×0.44cm×1.96 g を、161が4.65cm×2.6cm×0.42cm×4.7 g を、162が5.04 cm×2.89 cm×0.75cm×10.99 g を、163が4.87cm×2.81cm×0.7cm×10.83 g を、164が6.02cm×0.75cm×2.15cm×44.3 g を、165が7.49cm×4.42cm×1.82cm×54.85 g を測る。いずれも刃部片面調整である。他に剥片・石核などが総重量639.88 g ある。

#### IV. C地区的調査

調査ではA・B地区に比べまとまった遺物の出土はなかったが、両地区と同様に黒色粘土を基本とする層が地区内全域に存在しており遺物も確認した。そのため濃密ではないが遺物・遺構を包含する層が存在すると考えられる。

層位は柱状図1が2区、2が4区、3が8区、4が10区、5が13区において記録した。詳細は層序を参照。出土遺物は弥生中期初頭の土器が地区全体で出土したが出土量は少量である。

西

O.P.  
+8.00m

+7.00m

+6.00m

1. 綠褐色 (10G17/2) 中堅・砂混じり土
2. 粘結褐色 (10G21/1) 砂混じるシルト
3. 黄褐色 (10YR5/2) 少量鐵鉻混結質土
4. オリーブグリーン (10Y5/2) 少量鐵鉻混結質土
5. 黑褐色 (2.5Y3/2) 少量鐵鉻混結質土
6. 黑褐色 (5Y6/2) 中堅・砂混じる粘質土
7. 黑褐色 (5Y6/2) 中・重鐵鉻混結質土
8. 黑褐色 (5Y6/2) 中堅・中砂混じる粘質土
9. 黑褐色 (5Y6/2) 粘質土
10. 黑褐色 (5Y6/2) 粘質土
11. オリーブ褐色 (5Y3/2) 黏質シルト
12. オリーブ褐色 (5Y3/2) 黏質シルト
13. オリーブ褐色 (10Y4/2) 細粒砂
14. 黃褐色 (2.5Y2/1) 少量鐵鉻混結質シルト
15. 黑褐色 (10Y4/1) 多量鐵鉻混結質土
16. 黑褐色 (10Y4/1) 多量鐵鉻混結質土
17. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
18. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
19. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
20. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
21. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
22. 黑褐色 (2.5Y3/1) 多量中鐵鉻混結質土
23. オリーブ褐色 (5Y3/2) 多量鐵鉻混結質土
24. オリーブ褐色 (7.5Y3/1) 鐵鉻混結中砂
25. 黑褐色 (10Y4/1) 粘質シルト
26. 緑褐色 (10G5/1) 細粒鐵鉻混結質土
27. 黑褐色 (2.5Y3/1) 鐵鉻混結質土
28. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
29. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
30. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
31. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
32. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
33. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
34. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
35. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
36. オリーブ褐色 (5Y3/2) 粘質土、繊維
37. オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘質土、繊維
38. オリーブ褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト、繊維
39. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト、繊維
40. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質混結シルト、繊維
41. 黑褐色 (2.5Y3/1) 多量中鐵鉻混結質土、水多
42. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト、改変、やわらか
43. オリーブ褐色 (5Y3/1) 多量鐵鉻混結質土
44. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
45. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト
46. 黑褐色 (2.5Y3/1) 多量鐵鉻混結質土
47. オリーブ褐色 (5Y3/2) 多量鐵鉻混結質土
48. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質混結質土
49. オリーブ褐色 (5Y3/1) 多量中鐵鉻混結質土
50. オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 黑褐色 (5G6/1) のシルトが夾在

18. オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘質土、繊維の粘土の薄込み
19. オリーブ褐色 (5Y3/2) 粘質土、炭化物含む
20. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
21. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
22. 黑褐色 (2.5Y3/1) 多量中鐵鉻混結質土
23. オリーブ褐色 (5Y3/2) 多量鐵鉻混結質土
24. オリーブ褐色 (7.5Y3/1) 鐵鉻混結中砂
25. 黑褐色 (10Y4/1) 粘質シルト
26. 緑褐色 (10G5/1) 細粒鐵鉻混結質土
27. 黑褐色 (2.5Y3/1) 鐵鉻混結質土
28. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
29. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
30. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
31. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
32. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
33. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
34. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
35. 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、繊維
36. オリーブ褐色 (5Y3/2) 粘質シルト、繊維の粘土の薄込み
37. オリーブ褐色 (2.5Y3/1) 粘質土、活性鐵
38. オリーブ褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト、繊維
39. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト、繊維
40. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質混結シルト、繊維
41. 黑褐色 (2.5Y3/1) 多量中鐵鉻混結質土、水多
42. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト、改変、やわらか
43. オリーブ褐色 (5Y3/1) 多量鐵鉻混結質土
44. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質土
45. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質シルト
46. 黑褐色 (2.5Y3/1) 多量鐵鉻混結質土
47. オリーブ褐色 (5Y3/2) 多量鐵鉻混結質土
48. 黑褐色 (2.5Y3/1) 粘質混結質土
49. オリーブ褐色 (5Y3/1) 多量中鐵鉻混結質土
50. オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 黑褐色 (5G6/1) のシルトが夾在

C 地区土層断面柱状図

## V.まとめ

今回の調査地は鬼虎川遺跡の中央部に位置し、遺跡内に東西方向の試掘トレンチを入れた形となつた。この位置は当遺跡内において大規模な調査が行われていない範囲にあたり、遺構の埋没深度・分布等、今後の調査の指針となる成果も得た。また検出された遺構(溝、土坑、ピット)は当遺跡の弥生時代中期初頭の範囲及び性格を考える上で貴重な資料となつた。とくに東端を除いたB地区全体には遺構・遺物が濃密に分布する。この範囲において墓制に関する遺構等は検出されず、既往の調査成果と合わせると集落地にあたると考えられる。またB・E区を境にC地区を含んだ東では遺物が希薄な状況であることから、ここが集落の東限の可能性があり溝3はその境界になったとも考えられる。

その他、出土した遺物は縄文時代中期と晩期、弥生時代前中期、中期初頭、中期前半、古墳時代、中世とあり遺跡の変遷を考える上で重要な資料となつた。



A-1 地区調査断面（南より）



A-5 地区遠景



A-6 地区調査状況



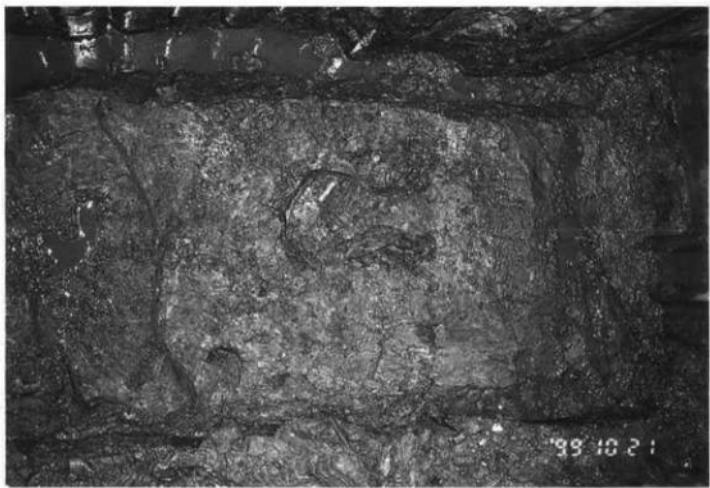
B-1 地区掘削状況（北東より）



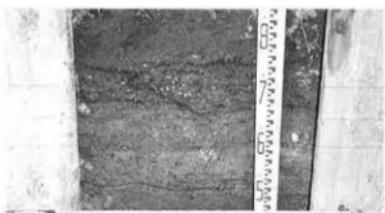
B-9 地区掘削状況



B-2 地区調査状況（東より）



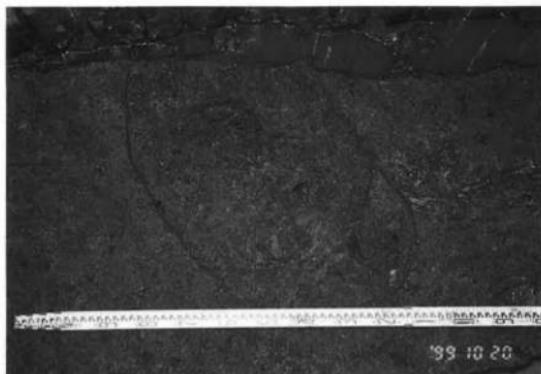
溝5・弥生土器（36）検出状況



B-10地区調査断面（柱状図4）



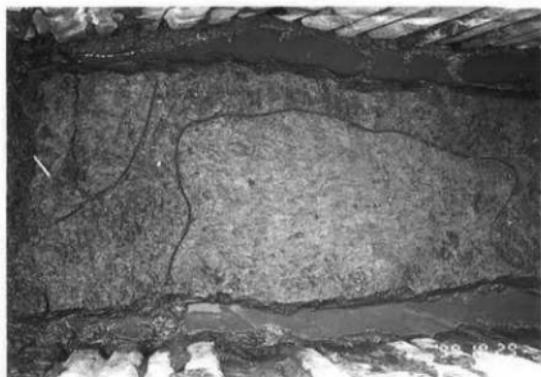
B-10地区弥生包含層堆積状況（柱状図4）



土坑 2 檢出状況



溝11検出状況



土坑 8 檢出状況



B-13地区調査状況（東より）



B-16地区調査断面



B-16地区溝18調査断面



B-15地区調査断面



B-17地区遺構面検出状況（東より）



B-17地区遺構面検出状況（東より）



B-17地区人孔部遺構面検出状況



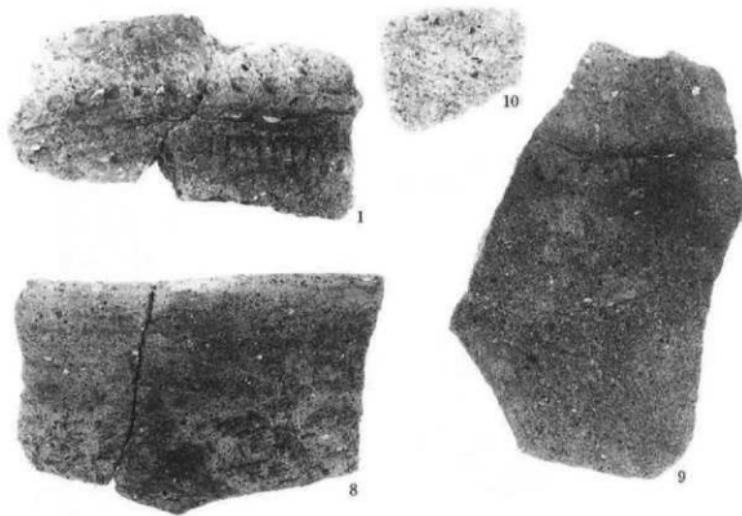
B-18地区調査断面



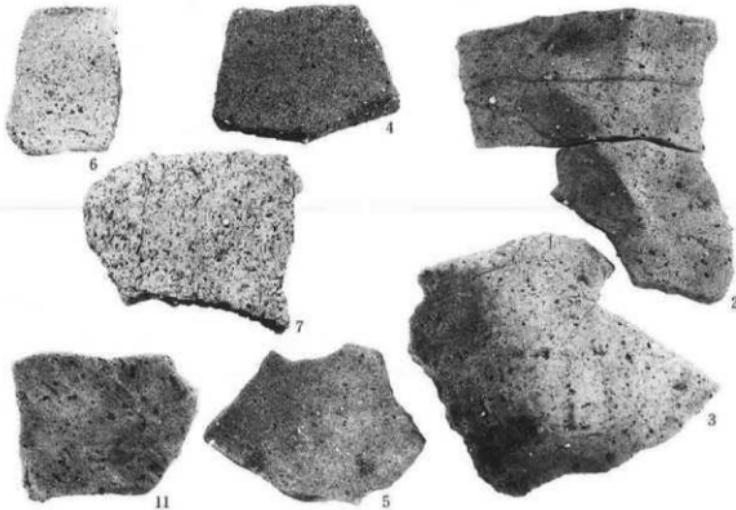
B-18地区透構面検出状況(東より)



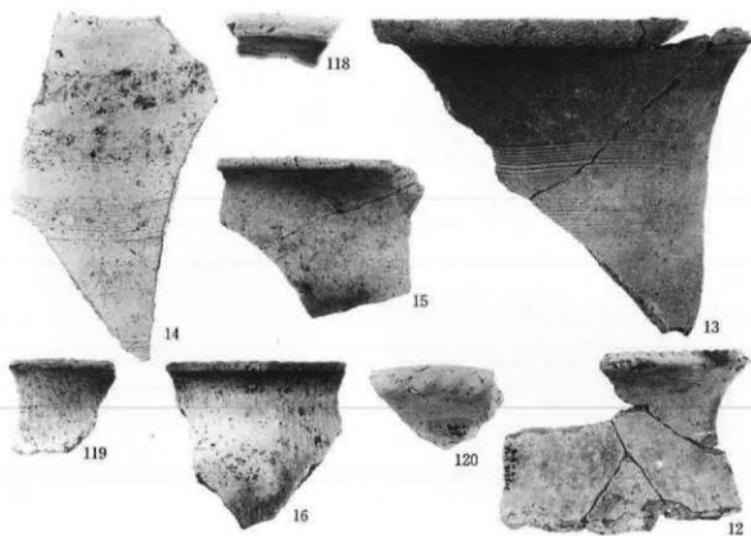
B-19地区透構面検出状況(西より)



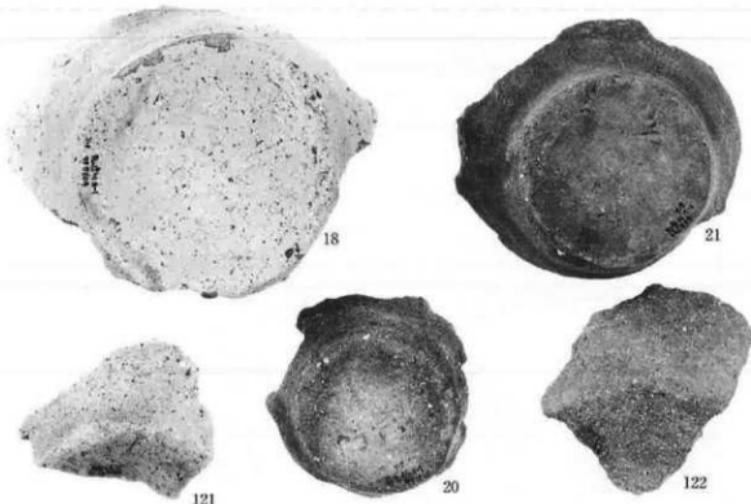
A地区出土绳文土器 1



A地区出土绳文土器 2



A地区出土弥生土器 1



A地区出土弥生土器 2



36



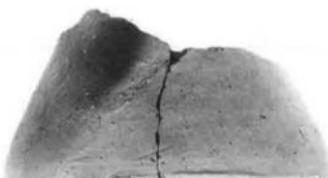
23



17

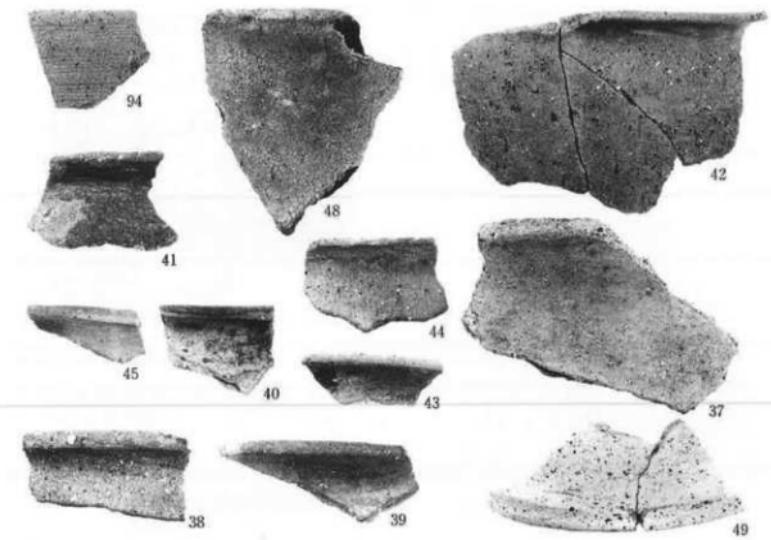


22

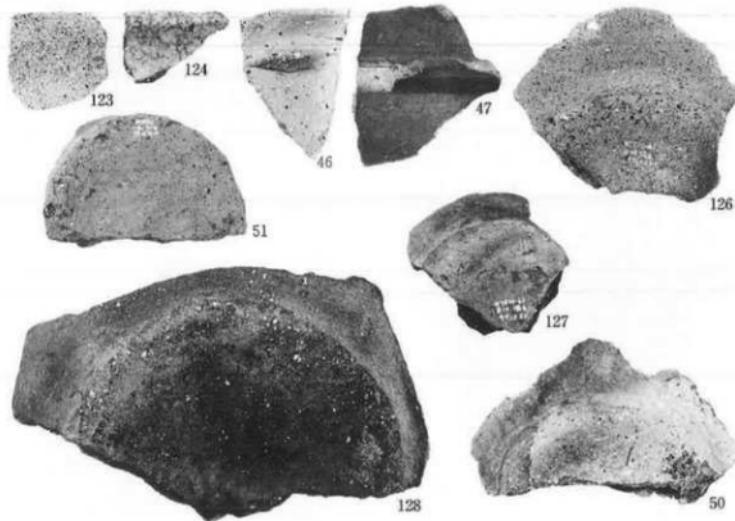


166

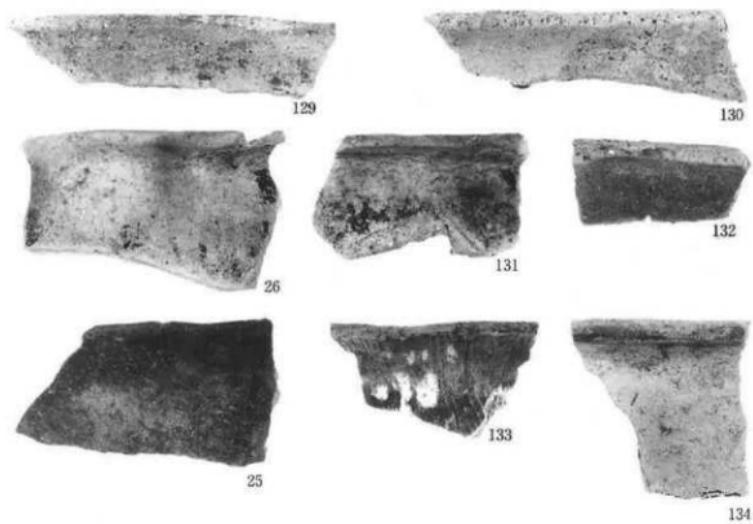
A · B 地区出土弥生土器



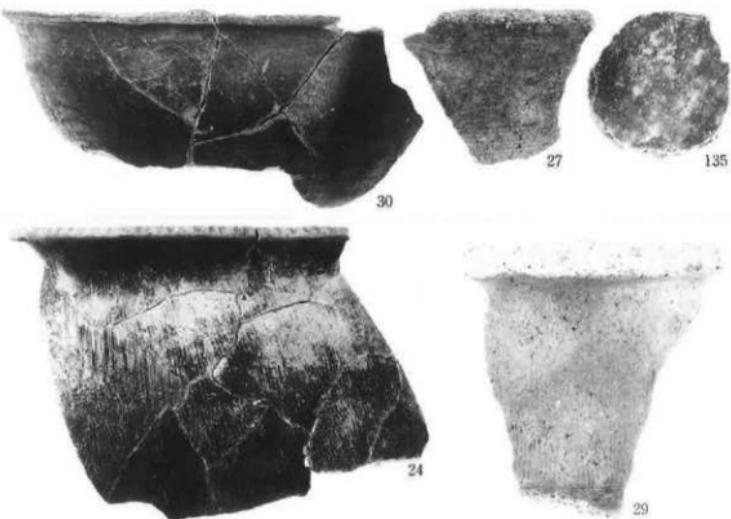
B地区遺構出土赤生土器 1



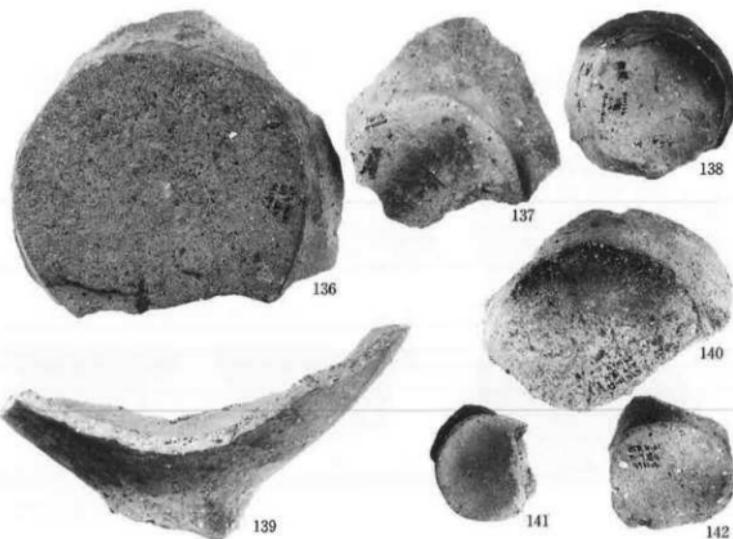
B地区遺構出土赤生土器 2



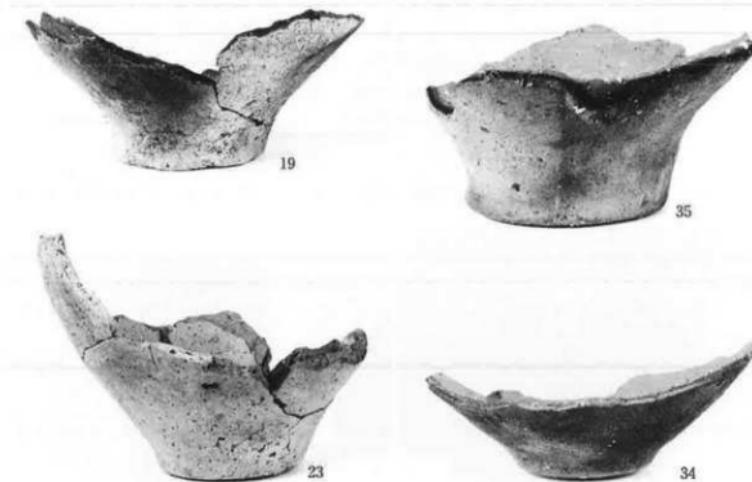
溝 4 出土器 1



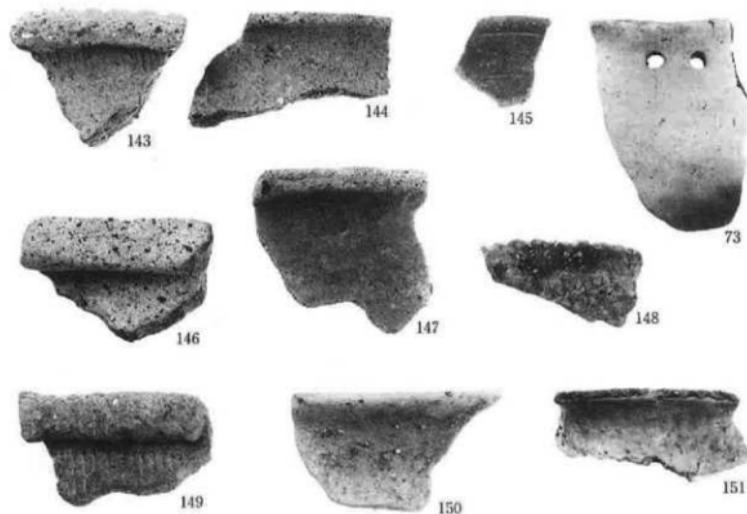
溝 4 出土器 2



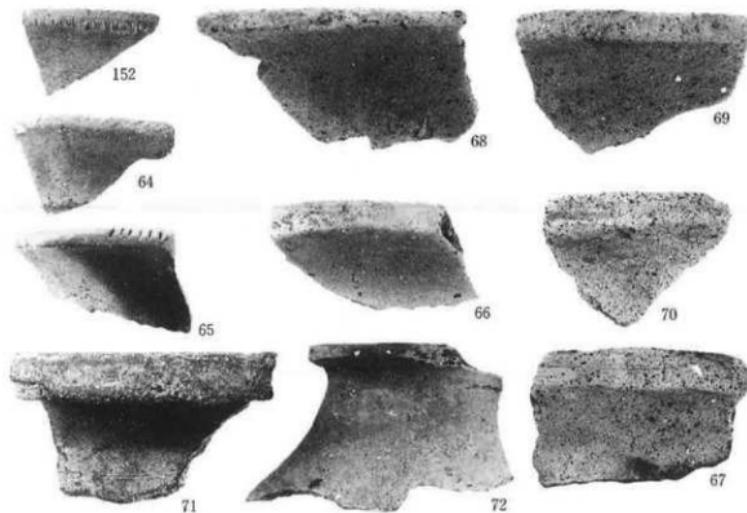
满4出土土器 3



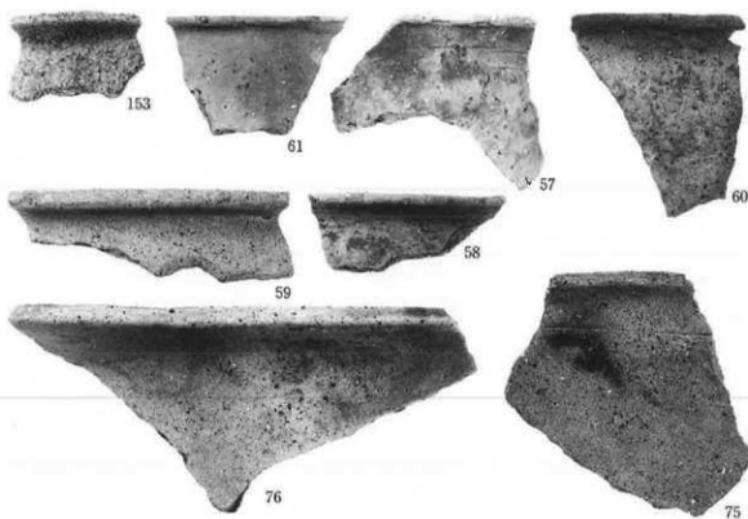
满4出土土器 4



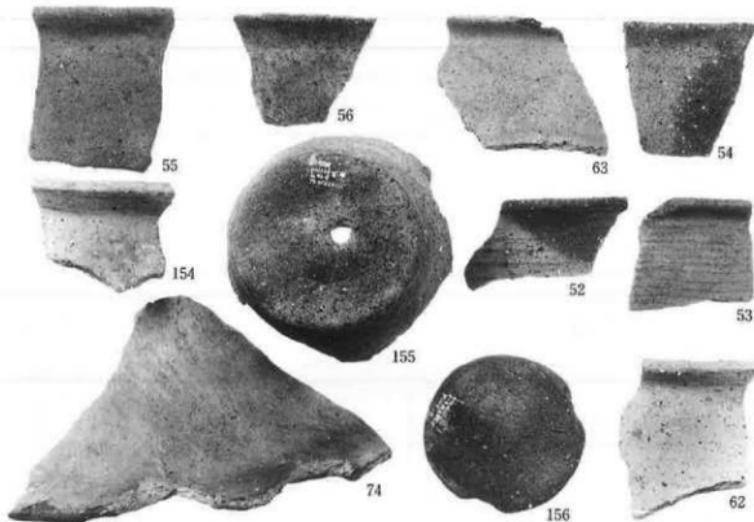
B地区弥生包含层出土土器 1



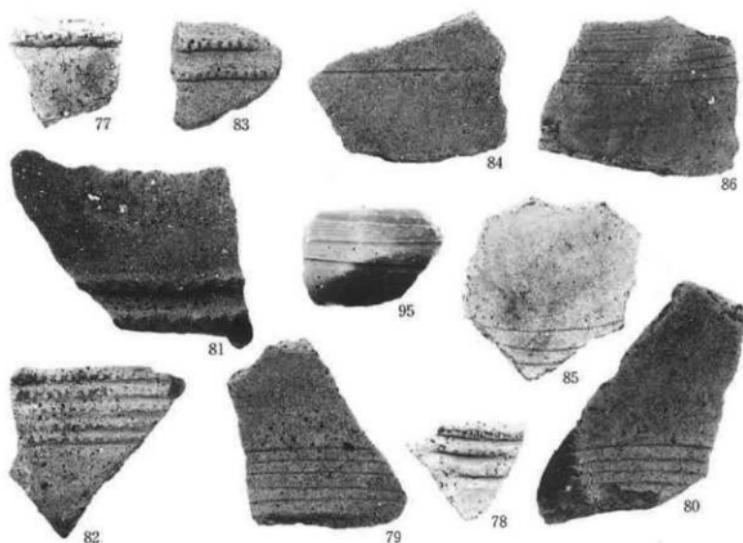
B地区弥生包含层出土土器 2



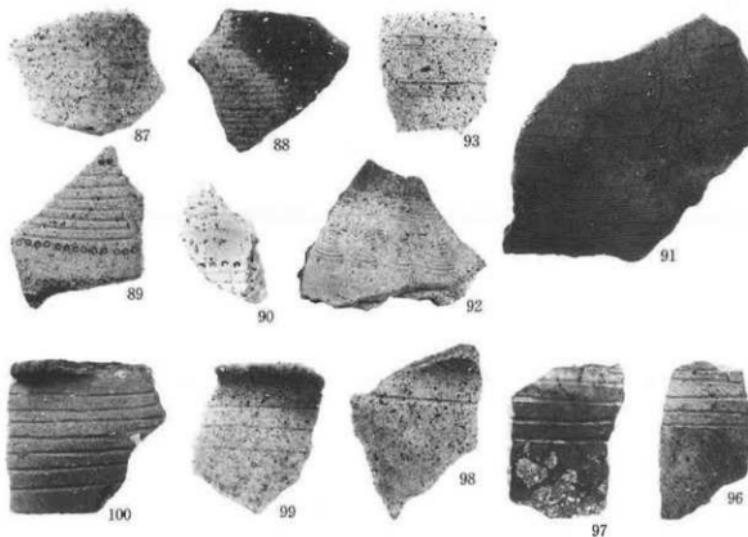
B地区弥生包含层出土土器 3



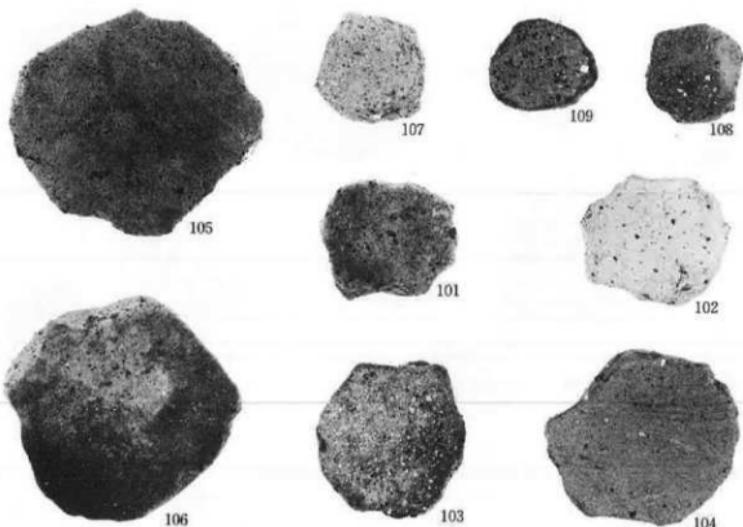
B地区弥生包含层出土土器 4



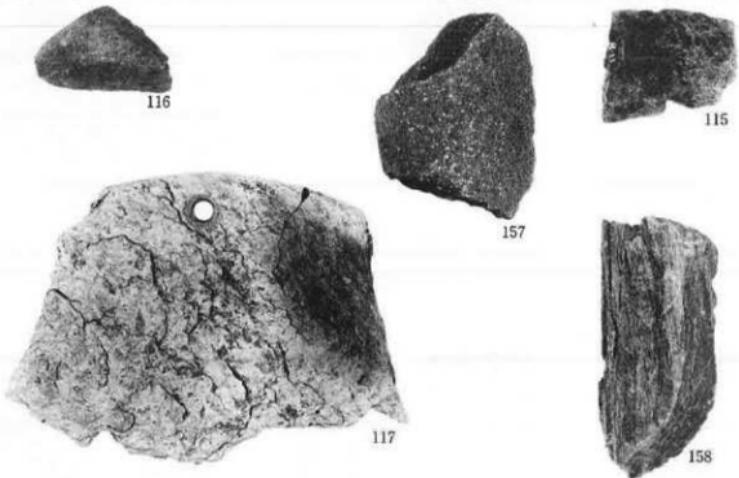
B地区弥生包含层出土土器 5



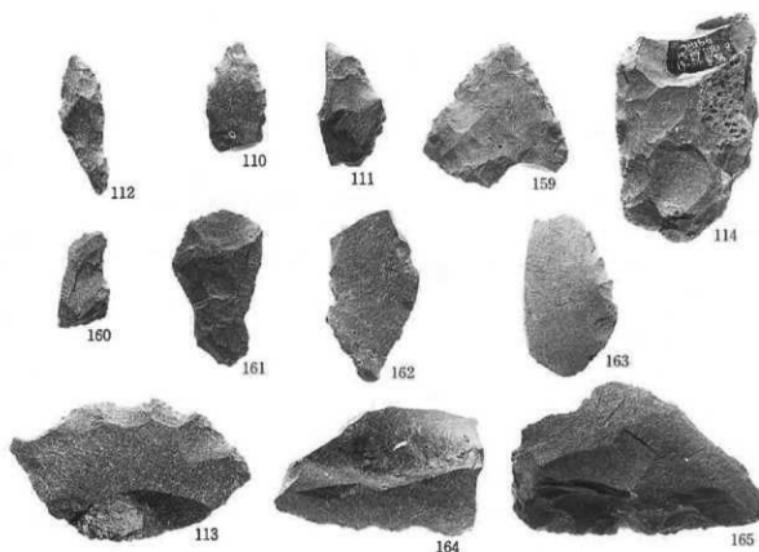
B地区弥生包含层出土土器 6



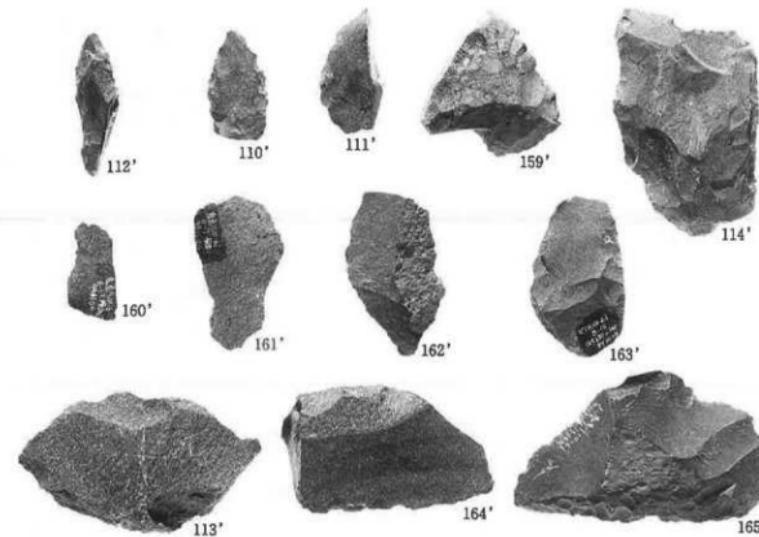
円板状土製品



磨製石器



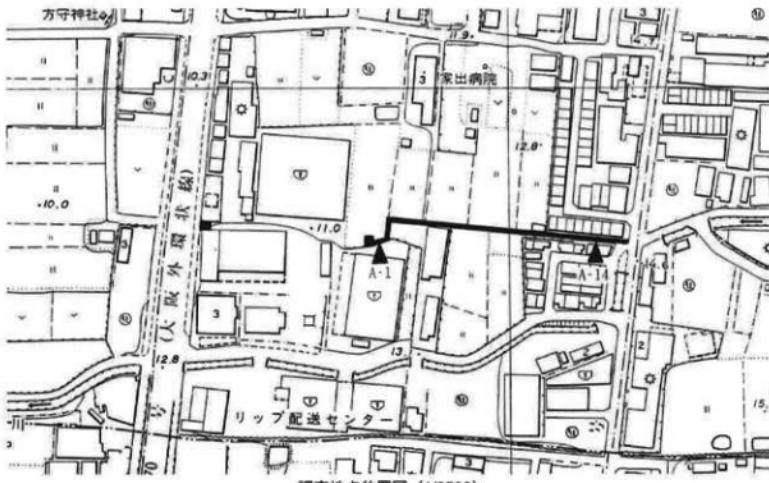
打製石器（表）



打製石器（真）

## 第24章 楽音寺遺跡の第4次調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成10年度公共下水道第63工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市横小路町5丁目
3 調 査 面 積	143m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間	平成11年8月3日～12月26日（延べ20日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は楽音寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は推進工法と開削工法の場所がある。推進工法は立坑が2ヶ所ある。開削工法の範囲は幅約0.9～1.1mで長さ約134mである。



## 1. 調査の概要

### A-I 地区の層序

- 第1層 盛土
- 第2層 オリーブ灰色 (10YR5/2) 粗粒砂。
- 第3層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 糜混じり粘土。弥生時代後期～布留期の遺物包含層。
- 第4層 暗青灰色 (10BG4/1) と暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 糜混じり粘土。
- 第5層 暗青灰色 (10BG4/1) 粘土。弥生時代後期～布留期の遺物包含層。
- 第6層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 中粒～粗粒砂。

### A-14地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒色 (2.5GY2/1) 糜混じり砂質土。弥生時代～布留期の遺物包含層。
- 第3層 暗緑灰色 (5G4/1) 砂質土。
- 第4層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質土。
- 第5層 黒色 (2.5GY4/1) 砂質シルト。
- 第6層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 砂質土。

## 2. 出土遺物

A地区のほぼ全城において弥生時代後期～布留期の土器が出土した。

### 弥生時代後期の土器 (1～16)

壺、甕、鉢、高杯の器種がある。1は口縁部が2重に外反する壺である。口縁端部に擬凹線を施し、その上に竹管文を押した円形浮文を貼り付ける。2～6は甕である。口縁端部は丸く終わる2～5と受口を呈する6がある。体部外面の調整はタタキ調整とハケメ調整がある。7は鉢である。口縁部は片口である。8・9は高杯の柱状部である。11～16は底部である。

### 庄内期～布留期の土器 (17～33)

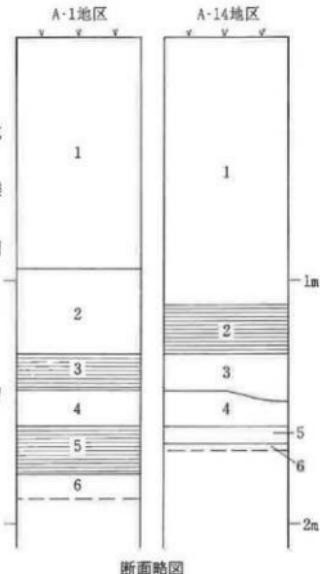
甕、高杯、器台の器種がある。17は体部と口縁部の内面に稜がある甕である。体部外面をタタキの後ハケメ調整、内面をヘラケズリ調整する。庄内期のものである。18は東海地方の台付S字状口縁の甕である。口縁部が2重に外反し、体部外面を粗いハケメ調整する。19～22は口縁端部が内側へ肥厚する布留期の甕である。32・33は口縁端部が丸く終わる甕である。23～25、27～30は高杯である。23～25は杯部であり、浅い皿状を呈する。27～31は柱状部と裾部である。26は器台の裾部である。

### ミニチュア土器 (34)

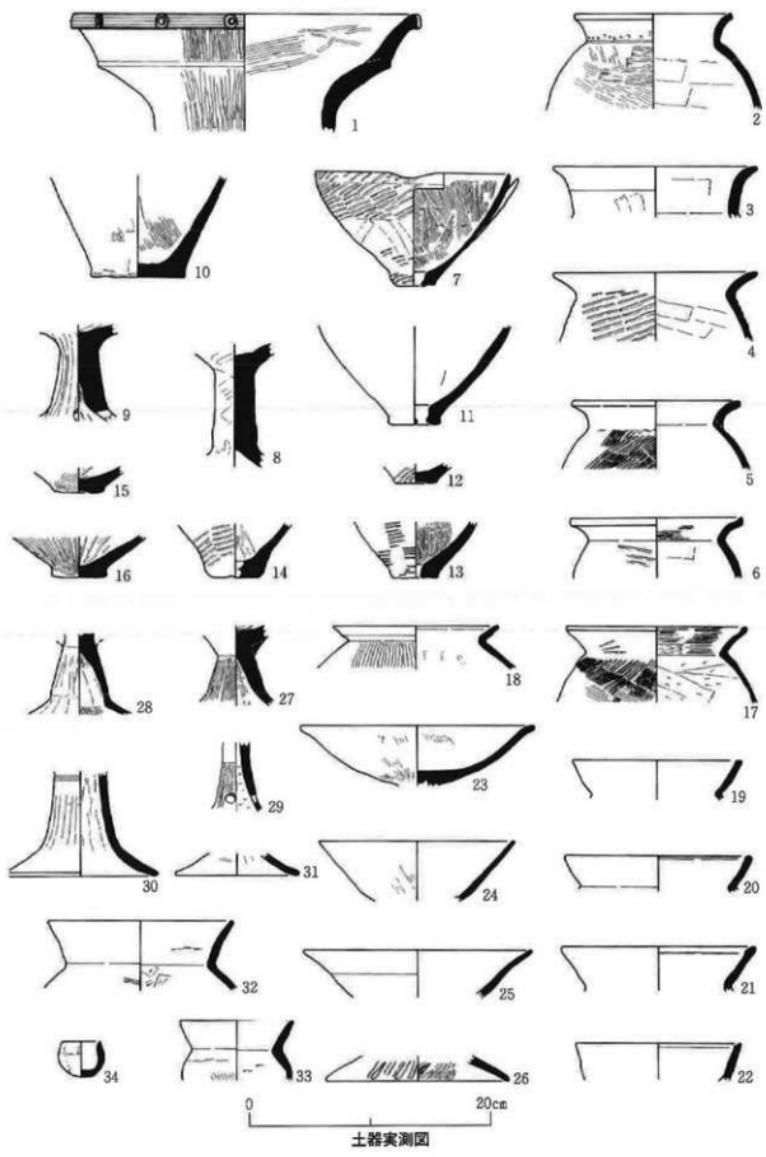
34はミニチュアの土器である。丸底を呈し、作りは粗い。

## 3.まとめ

A地区的全域で弥生時代後期～布留期の遺物包含層を検出した。西側で遺物量が多く、東側にいくにしたがい減少する。立会調査のため十分な調査はできなかったが、遺構の存在する可能性が高い。また、遺物包含層も弥生時代後期と庄内期～布留期の2層に分かれていると考えられる。当遺跡は第一次調査が北側でおこなわれ周知されたが、今回の調査で南側に広がることが確認できた。



断面略図



土器実測図



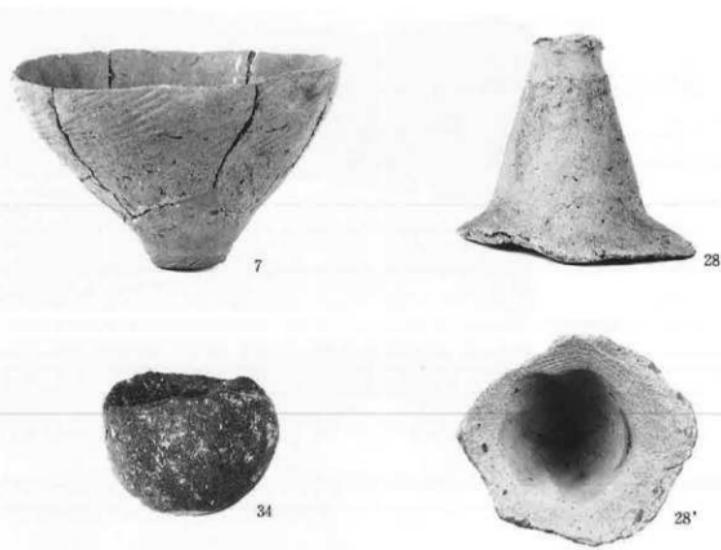
調査地風景



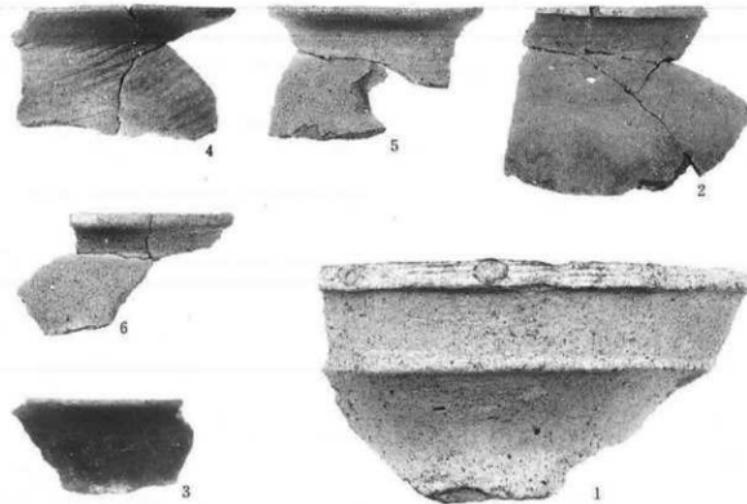
掘削風景



調査断面



赤生土器・土師器



赤生土器

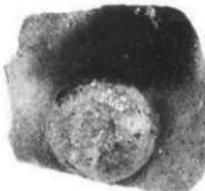


8

9

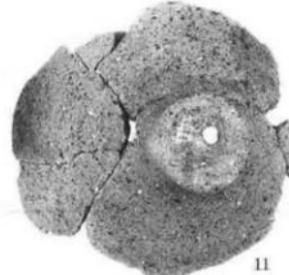
15

弥生土器



12

16



11



10

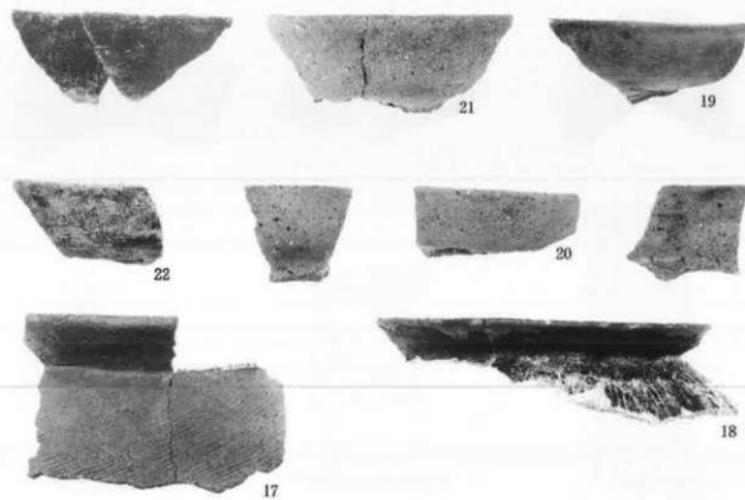


14

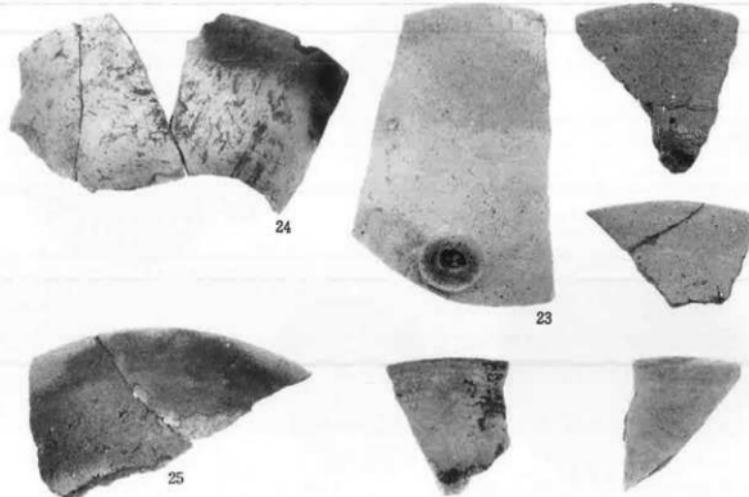


13

弥生土器



庄内式～布留式土器



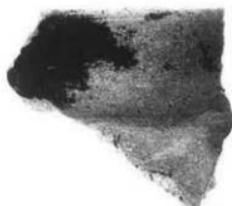
庄内式～布留式土器



33



26



32



31



庄内式～布留式土器



29



30

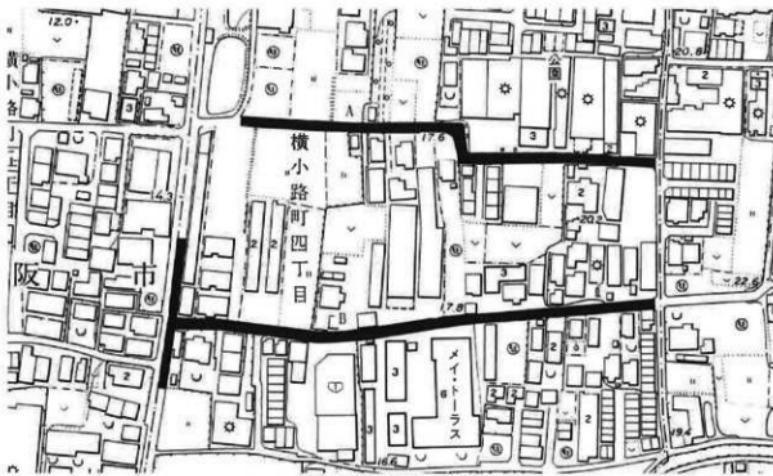


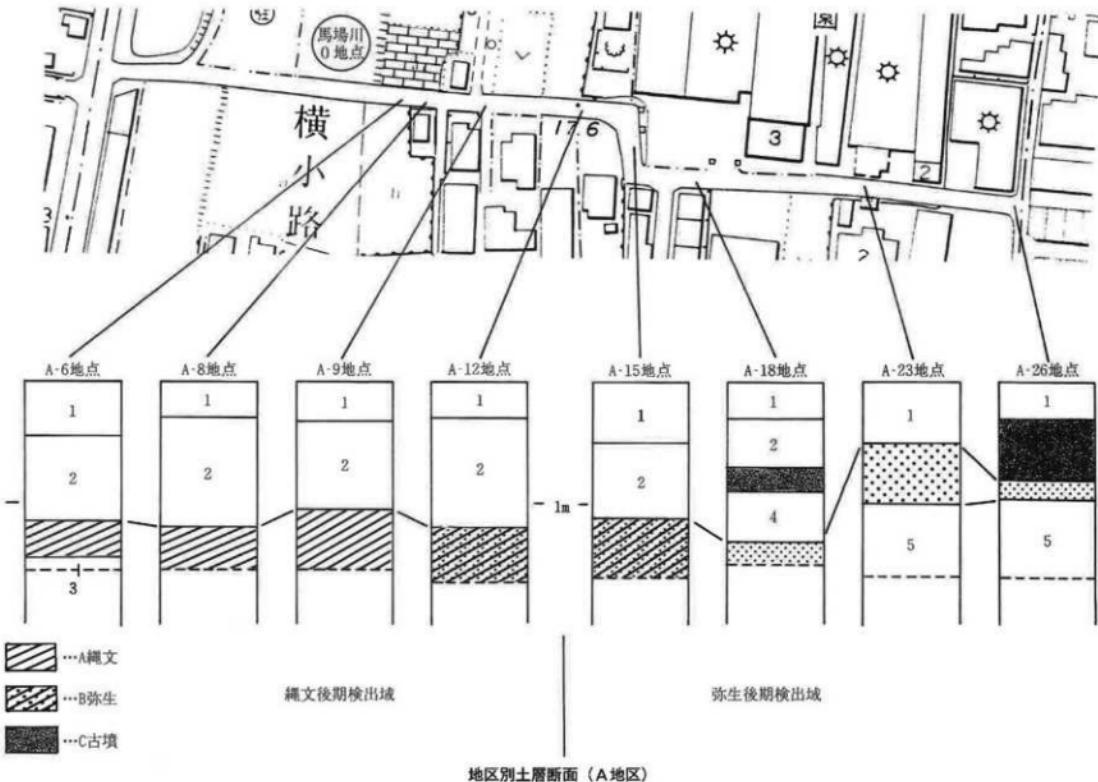
27

庄内式～布留式土器

## 第25章 馬場川(第11次)・西代遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第78工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町4丁目
3	調 査 面 積	400m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年8月23日～継続中(12月末現在 延べ26日)
5	報 告 担 当	坂田典彦
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は馬場川・西代遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は北と南の2地区に分かれ、開削工法である。B地区の南側一部が西代遺跡、他が馬場川遺跡である。西代遺跡は夜間工事のため立会調査はできなかった。工事範囲は幅約0.9mで長さ約470mである。





## 1. 調査の概要

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町に所在する。生駒西麓には、いくつもの谷川が走り、その複合扇状地末端に位置する。<sup>上</sup>A地区は、O.P. +16~22mを測る。北の大門川と南の箕後川によって区切られた範囲に立地する。以下に詳しく記すが、盛土以下・縄文後期・弥生後期の包含層までは、砂質シルト・砂疊層が約1m確認されているのも上記の谷川による堆積作用だと考えられる。紙面の関係で「まとめ」の章に譲るが、当遺跡の性格もこれら地形による所が多いと考える。

今回、土層断面図の作成方法は、

- ①調査諸条件 (G.L.からの計測)
- ②4~8m間隔での柱状図
- ③複合扇状地上の緩傾斜面に立地 (調査区では、平均1m=0.03mの勾配)

以上3つの理由から、G.L.を基準として各地点ごとの柱状図をピックアップした。またA-12・15地区断面図のように、縄文・弥生混合包含層と解しているのは、断面観察上明確に出来ず、出土遺物からの判断である。ただし、出土遺物の時期が、A-12・15地区を境に縄文城、弥生城に分かれるのは当遺跡の性格を知る上で重要である。

## 2. 層序

A-6地区 第1層-盛土、第2層-上から暗オリーブ灰色疊混じりシルト (層厚20cm)・オリーブ黒色シルト (層厚15cm) 黒褐色~灰色中疊 (層厚25cm)、A縄文包含層 (以下A層と略す)、粘質土 (層厚30cm)、第3層-黒色疊混じり粘質土 (0.2~0.8cmの疊、層厚10cm)

A-8地区 第1層-盛土、第2層-上から暗緑灰色砂疊混じりシルト (層厚35cm)・暗緑灰色粗砂疊混じりシルト (層厚10cm)・暗オリーブ灰色粘質シルト (層厚10cm)・黒色砂疊混じりシルト (層厚5cm)・暗緑灰色粗砂疊混じり細砂 (層厚10cm)・暗青灰色細砂 (層厚10cm)、A層-黒褐色色粗砂疊混じり粘質土 (粘性強、層厚35cm以上)

A-9地区 第1層-盛土、第2層-青黒色シルト (層厚25cm)・暗オリーブ色シルト (層厚15cm)・緑灰色粗砂 (0.1~0.5cm大の砂、層厚30cm)、A層-上位は、オリーブ黒色砂泥粘質土 (層厚5cm)・下位は、暗紫灰色砂泥粘質土 (層厚45cm以上)

A-12地区 第1層-盛土、第2層-暗緑灰色疊混シルト (層厚30cm)・緑灰色砂質シルト (層厚20cm)・灰色粘質シルト (層厚20cm)・灰色粗粒砂 (層厚20cm)、A.B層-オリーブ褐色粘質土 (上位に0.5cm以下の疊多く含む、層厚45cm以上)

A-15地区 第1層-盛土、第2層-暗緑灰色疊混シルト (層厚15cm)・にぶい黄色砂質土~砂 (層厚20cm)・灰色疊混シルト (かたくしまる、層厚15cm)・暗青灰色疊混砂質シルト、A.B層-暗青灰色粘質土 (層厚25cm)・オリーブ褐色疊混粘質土 (0.2~1.0cm大の疊含む、層厚25cm以上)

A-18地区 第1層-盛土、第2層-オリーブ黒色細疊混シルト (層厚20cm)・暗オリーブ色砂質シルト (層厚20cm)、C層-暗褐色疊混粘土 (0.5cm大の疊多い、厚層15cm)、第4層-暗オリーブ灰色砂質シルト (層厚10cm)・緑灰色シルト (層厚25cm)・暗青灰色砂質シルト、B層-オリーブ黒色砂泥粘質土 (層厚20cm以上)

A-23地区 第1層-盛土、B層-青灰色粘質シルト (層厚20cm)・暗褐色粗粒砂疊混粘質土 (層厚20cm)・暗オリーブ褐色中粒砂疊混シルト質粘土 (層厚10cm)、第5層-灰オリーブ色粗粒砂 (層厚30cm)・暗青灰色中粒砂 (層厚30cm)

A-26地区 第1層-盛土、第2層-にぶい黄色シルト、C層-緑灰色疊混シルト (10cm大の疊

少量・層厚30cm)、B層-黒褐色礫混粘質土(0.5cm大の礫多、層厚15cm)、第5層-オリーブ黒色中粒砂(層厚35cm)・青灰色シルト(層厚30cm以上)

### 3. 出土遺物

今回遺物整理にあたり層序でも触れたが、層位的な遺物の取り上げを行なうことができなかつた。時期的認識を欠いた遺物の組列は、羅列に落ち入る危惧もあるが、遺物の価値を最大限引き出し、また、再見当の一助となるような整理・操作を試みた。

整理の基準として、

- ①形態的特徴(器形など、土器そのものの果たした役割)
- ②文様構成(施文方法・地域色・製作集団の持つある一定のきまり)
- ③胎土・色調(産地の把握・在地産・搬入品)
- ④從来の縦年案に載せる(既往調査の類例と照合)

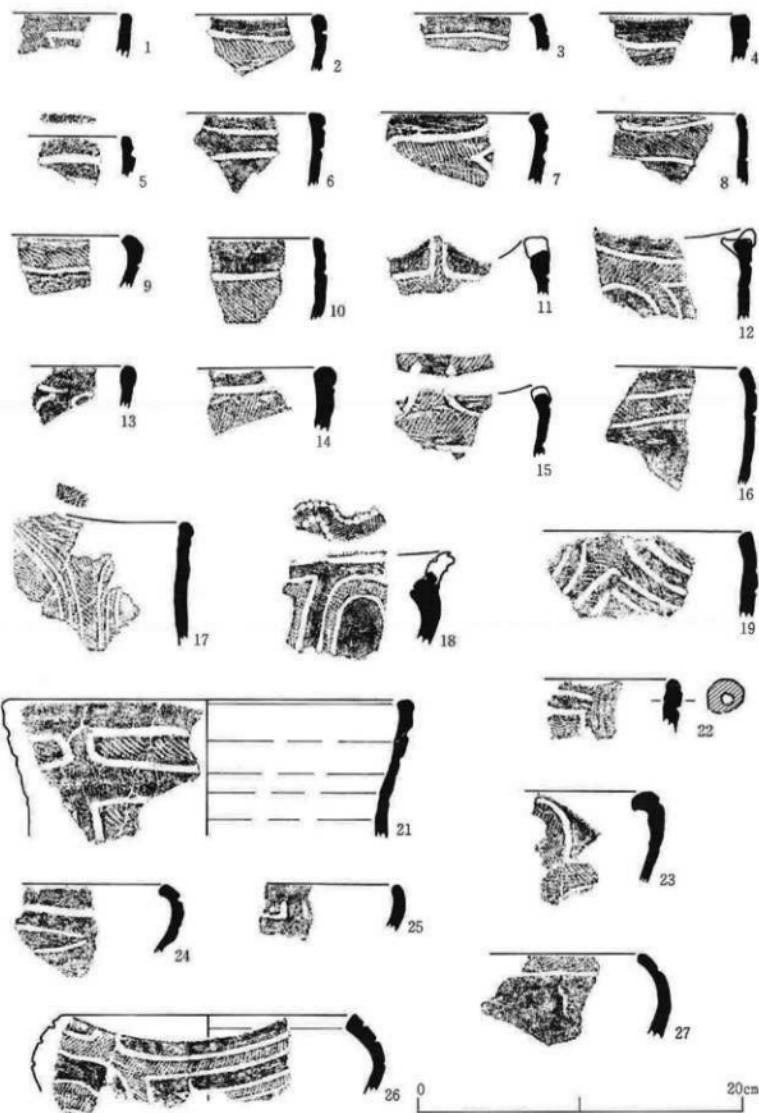
の4つを軸として文章を進めたい。当然、以上の4本軸の中で共通性が生まれ、「例えば遺物Aは①②③④を満たし、遺物Bは①③④である。のように」複雑かつ膨大な枠組みが必要となるが、今回は極力大きな枠組みでまとめてみたい。

#### 中津式土器群(1~48)

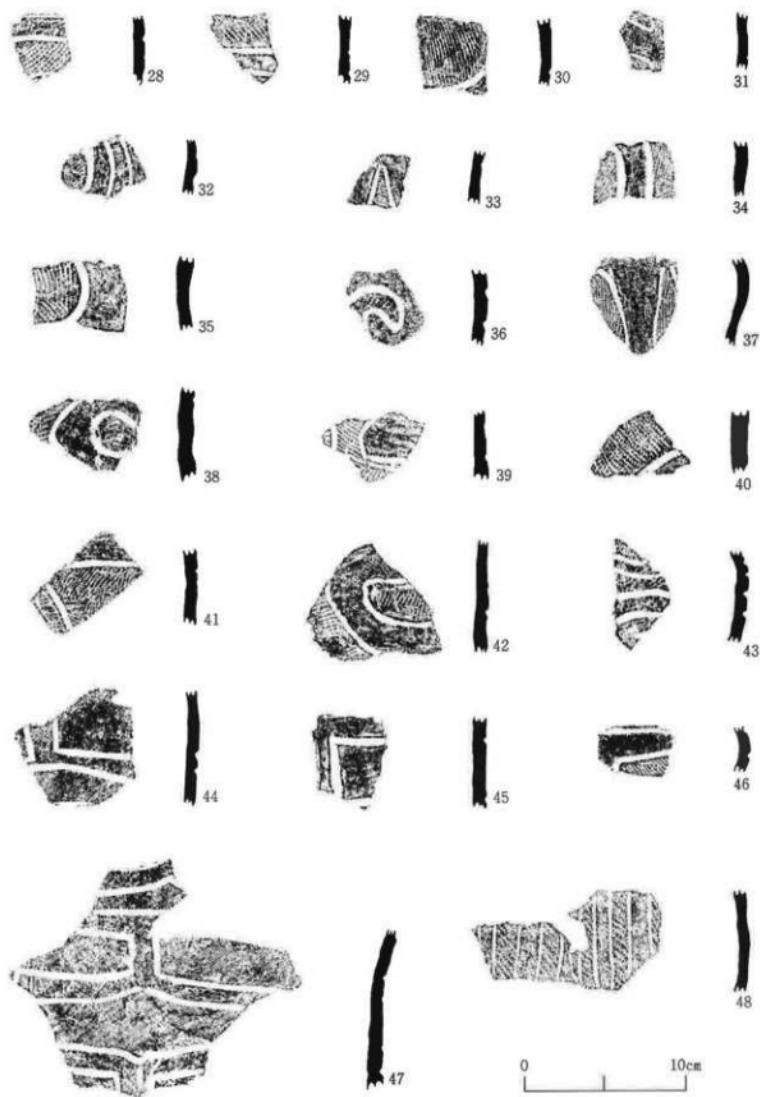
①深鉢と浅鉢があり、出土遺物の割合では、圧倒的に深鉢が多い。深鉢の器形では、頸部でくびれ内湾するキャリバー型(明確なものとして1~16・37)、頸部で一度くびれ外反する型(1・21・47)底部から直線的に上外方に立ち上がる植木鉢型がある(17・42・45)。浅鉢の器形では、楕形(24~27)とコップ形が想定できるが、今回の調査ではコップ形のものは検出されなかつた。ただし、馬場川4次調査でC類として取り上げられている中にコップ形のものが見られる。口縁部は、波状口縁(1~19・23)、平口縁(21)があり、端部が肥厚するもの(2~7・9~15)と無肥厚のもの(8・10・16・17・21)がある。特記すべきこととして、肥厚するものに2段R L<sup>(1)</sup>が見られる傾向が強い。

②地文である繩文R L・L Rに沈線で区画された内、外区どちらかを磨り消して文様を作る。区画沈線は、渦文(32・38)や丁字文(42)などをはじめ、曲線的(30~40)・直線的(21・41~48)なものがあり、それらを相互に組み合わせて構成されている。(おそらくこれらは、西日本繩文後期文化圈(中津式)と東日本繩文後期文化圈(加曾利・称名寺式)の接点を見い出す着眼点の一つである。施文部位としては、波頂部で沈線をつなぎ(11・15)、波状口縁に沿うように(2~16)割付けし、胴部で渦・丁字・方形区画を表現する。沈線は太いもの(5・19・21など)と細いもの(8・17・48)などがある。特にその本数で言えば、3本1組で構成される(17)などは福田K II式に、多条沈線(48)は、沈線を境に繩文L Rと磨り消しナデを交互に繰り返し、池田寺4次に類例がみられる。

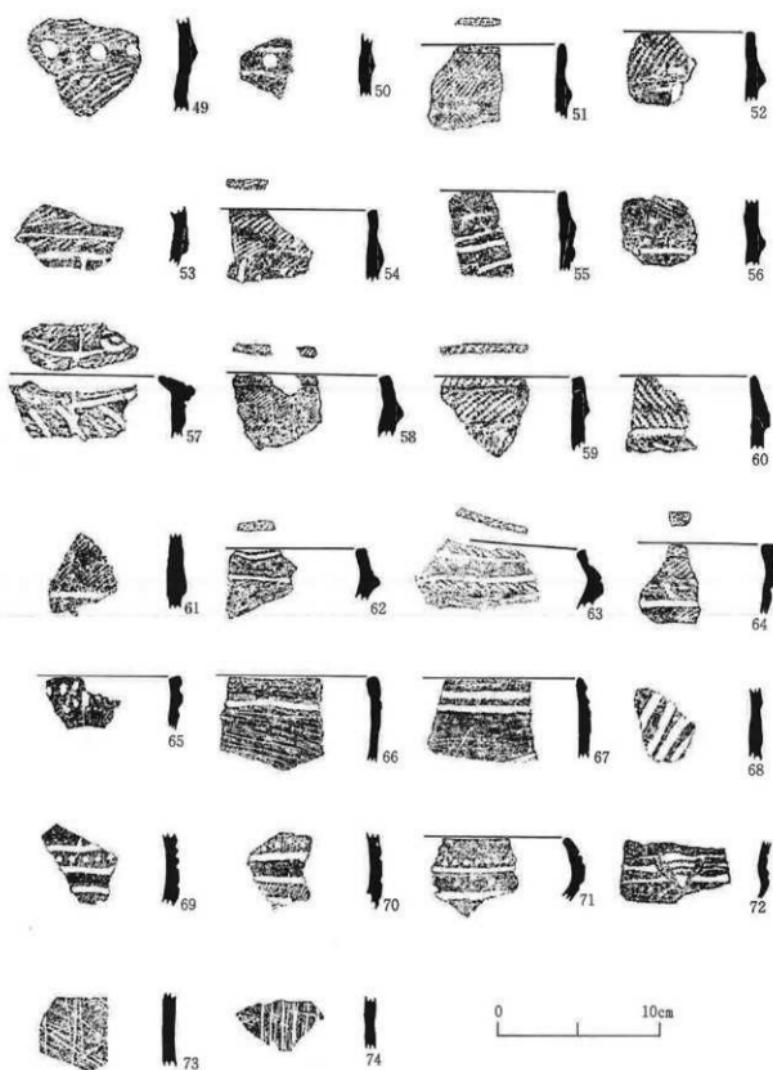
③胎土・色調は肉眼観察を行なった。ほとんどの土器が、胎土中に2mm大前後の角閃石・石英を含み、いわゆる生駒西麓産である。色調は総じて黒褐色~黄褐色を呈する。非在地産・搬入品とおもわれるものは、(25・31・48)で、(25)は胎土が粗く、灰白色を呈する。内面調整は、工具痕・植物圧痕が見られる。(31)は外面の沈線と繩文部に赤色顔料が部分的に付着し、胎土は粗く2mm大の長石・石英を少量含む。色調は、灰黄褐色を呈する。(48)は胎土が粗く、4mm大の長石を多く含み、2mm以下の石英・雲母を少量含む。色調は浅黄色を呈する。



縹文時代後期土器（磨消し縹文・口縁部）



縄文時代後期土器（磨消し縄文・体部）



縄文時代後期土器（陰蒂文、その他）

### 「隆帯文」土器（48～64）

①いわゆる馬場川O式土器と称されており、口縁部に隆帯を回らせるのを特徴としている。破片しかなく全体的な器形はとらえにくいが、大半が底部から上外方に直線的ないし外反しながら立ち上がる深鉢だと思われる。口縁端部は丸いもの（51・52・56）と面をもつもの（54・58・59）があり、端面には形態にかかわらず縄文を施すもの（51・54・57～59・62～64）と施さないものがある。

②文様構成として、まず定義しておきたいのは章題にも掲げた「隆帯文」という言葉は、一般に言われている草創期・早期の隆帯文（隆起線文）土器とは全く異なるものである。また、本文構成上、隆帯文を①形態的特徴、②文様構成のどちらに含むかに関しては製作過程の上から、器体（器形）作り→隆帯の貼り付け→縄文・沈線の施文という流れが推測でき、「用途」関与しないことから②に含めた。

隆帯は断面三角形で高さは5mm前後である。口縁端部に粘土紐を貼りつけ段上にしたもの（57～64）は、一応隆帯文の中に入れておくが、4次調査では馬場川O式C類、中村論文では馬場川O式A類a 2折り返し口縁とし、どちらも隆帯文の範疇には入れていない。（49・50）は、隆帯を貼り付けたのち円形押圧文を施す。（52～54・57）は、隆帯直下から垂下沈線が確認でき隆帯を境に文様構成が変化する。縄文はL Rを縱にころがしたもの（51～54・59・60）が多く、この土器群の特徴である。

③胎土は、ほとんどの土器に3mm前後の角閃石・長石・石英を含み、いわゆる生駒西麓産の土器である。色調は、暗褐色～黄褐色を呈する。

④、まさに①②③から類推して、この時期この地域の独自性がうかがえたが、類例はいくつかある。例えば、京大KA地区<sup>(10)</sup>・東庄内A遺跡<sup>(11)</sup>・布留遺跡<sup>(12)</sup>があげられる。縄文土器一形式の分布圏は広域であり、それと比べると、今回の馬場川遺跡と上記の3遺跡の距離はせいぜい150km圏内におさまる。ただし、それらが点的に存在したかは確認されておらず、時期の前後関係はさらに検討を要する。<sup>(13)</sup>

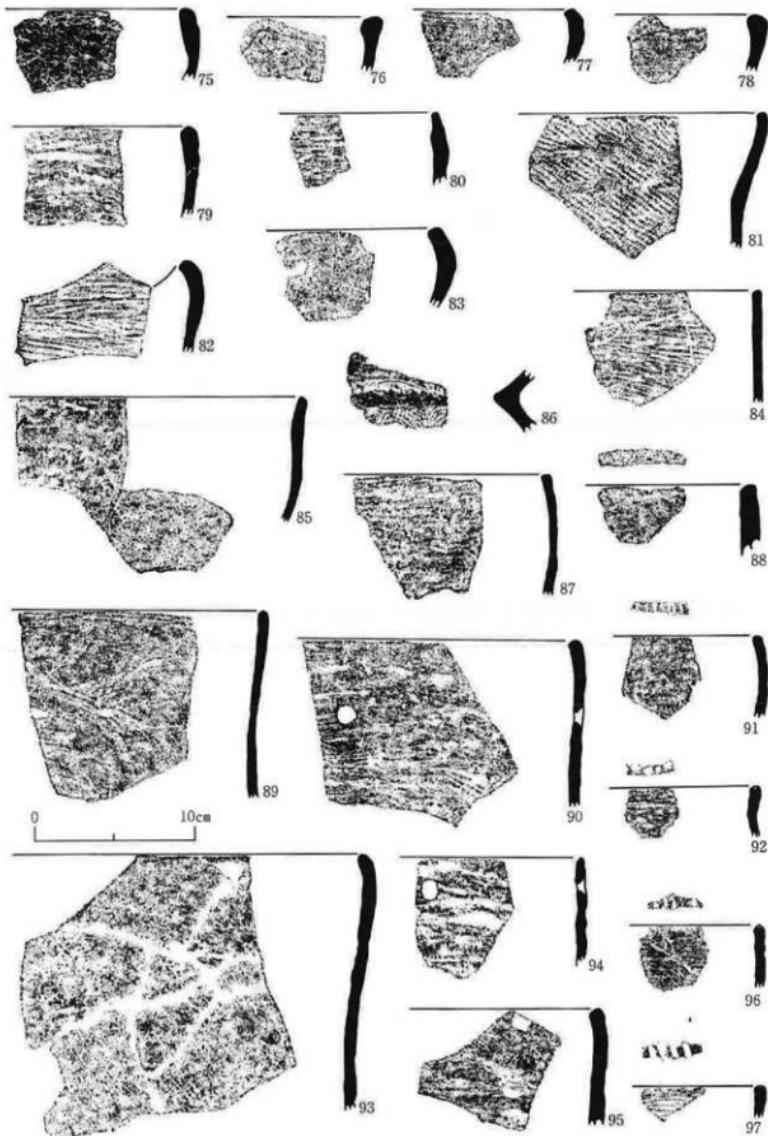
### その他の土器（65～74）

（65）は、口縁端部直下から刺突文を施す。存在部が少なく規則性はつかめない（4次報告では馬場川O式f類）。（66・67）は、浅鉢の口縁部であり外面条痕仕上げの後や幅広の沈線を施す。（69～71）は、いずれも浅鉢であり幅広の沈線で区画された部分に縄文L R、ナデ調整を交互に施す。その上、縄文帶上に径5mmの円形刺突文を約5mm間隔で配する。（72）は、深鉢であり器厚5mm以下で薄く仕上げられ縄文は施さない。3条の凹線文の一部に扇状圧痕文が見られ後期末に比定される宮滝式の要素を持っている。（73・74）は条線文で仕上げられ、（73）は乱方向に（74）は縦位に施す。

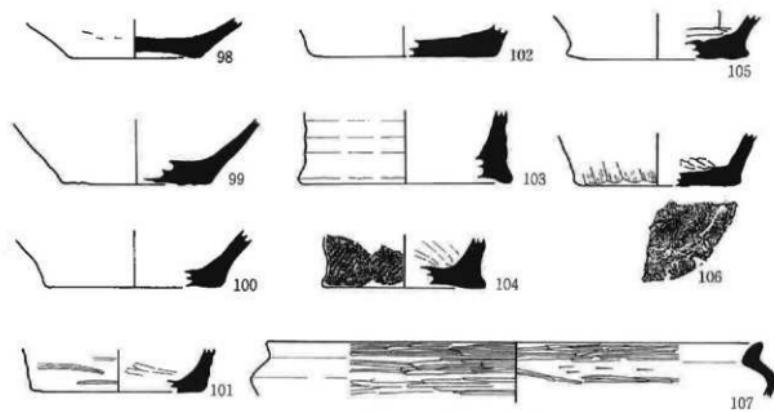
### 粗製土器（75～97）

①浅鉢と深鉢の2種類があり、今回検出した粗製土器のはほとんどが深鉢である。深鉢には頸部が屈曲してから内湾するもの（81・93）と、底部からほぼ直線的に立ち上がるもの（84・94～96）がある。口縁形態は波状口縁（76～79・82・95）と平口縁がり、端部は肥厚して丸くおさめるものと、やや面を持つものがある。また端面に爪がないし鋭利な工具による刻目文を施すもの（88・91・96）と、円形刺突文を施すもの（92）、棒状のもので押圧した刻目文（97）がある。（90・94）に見られる穿孔は、外から内に穿った後、ナデで丸めてあることから、修繕孔ではない。焼成前に「提げる」など何らかの役割が与えられていたのであろう。

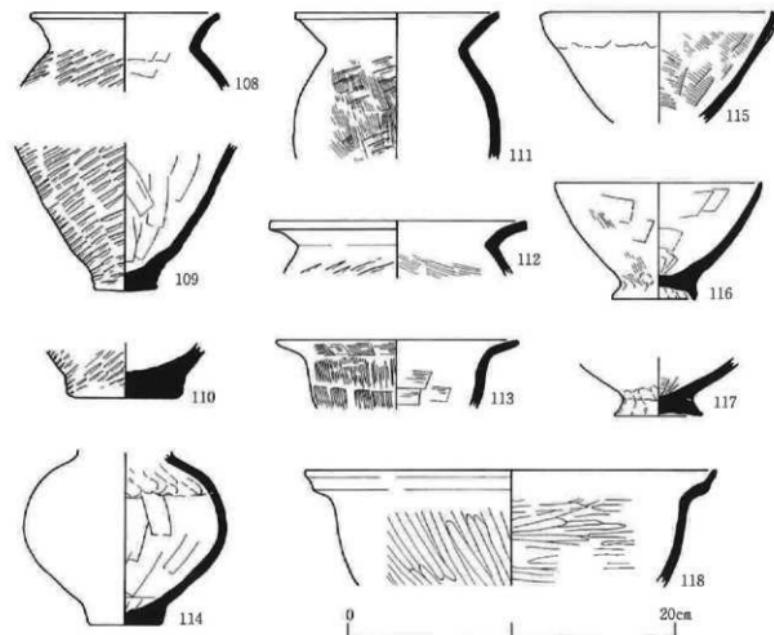
②粗製土器は無文土器とも称され、文様構成上の規則性・独自性は表現されにくい。ただ、地文に、条痕調整・縄文R L（81）・ケズリの後ナデ調整（89）などを施す。これこそが、装飾など見た目重



掲文時代後期土器（粗製土器）



縄文時代後期土器（底部）、晩期土器（口縁部）



弥生時代後期土器

視から機能重視への変換点、晩期土器への足掛かりであろう。

③胎土は、3mm前後の角閃石・長石・石英を含み、色調は黄褐色～褐色を呈する。(86)は鋭角に屈曲し、くびれ部から下は縄文RLを施す。一応粗製土器の中に入れておく。

#### 底部(98～106)

①形態的特徴としては、上げ底のもの(98・99・103・104)と平底のものがある。また立ち上がりの角度は、底面からほぼ直上に立ち上がるもの(103・104)と上外方に外弯しながら立ち上がるものがある。

②文様調整は、内外面ともナデ調整を施すものが多いが、ヘラ状工具による粗雑な調整のもの(98・101・106)もある。(104・106)は底部まで縄文を施す。(106)に関しては、底面に部分的に縄文LRが見られる。

③胎土は、3mm大の角閃石・長石・石英を多く含み、色調は褐色～黄褐色を呈する。

#### 縄文晩期土器(107)

浅鉢の口縁部であり、張りのある体部から短く内傾し端部は外折する。復原口径は30cmで、器高はおそらく15～20cmである。調整は内外面ともヘラ状工具で丁寧に仕上げられている。胎土は精緻で、色調は暗褐色を呈する。滋賀里II類に比定される。

#### 弥生土器(108～118)

出土した土器はほとんどが後期のもので、器種は壺・壺・鉢・高杯がある。出土量はコンテナ2箱のうち図化・復原できた11点の詳細を器種ごとに記す。

壺(108～113)(108)は口径11cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸くおわる。外面調整は右上がりのタキを施し、頸部屈曲部に径5mmの円形浮文を貼り付ける。内面調整は板ナデを施す。(109・110)は底部で外面は右上がりのタキを施す。(109)の内面は左まわりに下から上に板ナデを施す。

(111)は口径12.6を測り、端部はやや面を持っておわる。外面は右上がりの粗いタキの後、ハケメ調整を施す。(113)は歪な器形を呈している。外面ともハケメ調整である。

壺(114) 球形の体部に径4.4cmの底部を持ち、口縁部は欠損している。内面調整は底から肩部まで板ナデを施し、口縁部付け根まで指ナデである。長頸壺と思われる。

鉢(115～118)(115～117)は同一の器種でつまみだしの底部をもつ鉢で、(115)は口縁部に粘土を貼り足し、やや肥厚する。(116)はハケメ・板ナデ調整で丁寧に仕上げ、端部は尖りぎみにおわる。(118)は大型の鉢で口径は25cmを測り内外面ともヘラミガキ調整を施す。底部は欠損しているが脚台が付く可能性もある。

#### 石器(図版 石1～5)

1～3は石錘である。1は長さ9.5cm・幅7.3cm・厚み1.9cm・重さ159.56gを測る。両端を打欠し、くり込みを入れる。2は扁平な円礫にくり込みを入れる。残存部の重さ15.73gを測る。3は隅丸方形に近く12時と3時方向の位置に浅いくり込みがある。1は角閃石斑岩、2は砂岩、3は緑色片岩である。4は石棒で、断面カマボコ型を呈する。表面は丁寧に研磨調整されておりなめらかである。残存部からは使用痕が見受けられず利用目的は不明である。廢棄時期の問題も兼ねて再考を要する。頁岩である。5は剥器で2方向から調整を加え刃部(7cm)を作る。サヌカイトは多数出土しているが、製品化しているのはこれのみである。石材は担当者の肉眼観察によるものである。

#### 4.まとめ

今回の調査でもっとも重視されるのはその立地環境にもとづいた遺跡の性格であろう。縄文時代後期から弥生時代後期へと隔絶期が存在する。その要因として層序でも触れたように河川によって区切られた範囲内での居住域は不安定であり、その証明として出土遺物も時代単位ではなく時期単位の様相を見せてている。また、クランク部前後で繩文・弥生城に分かれるのは馬場川遺跡内での時期ごとの所在範囲が浮かび上がってくるのではないだろうか。今回、遺物のほとんどが立合調査による採集であるが一括りの高い検出状況もあり遺構面は存在すると思われる。今後、これらの確認、問題点に関しては、予定されているB地区の調査結果を踏まえてより明らかにされることを期待する。

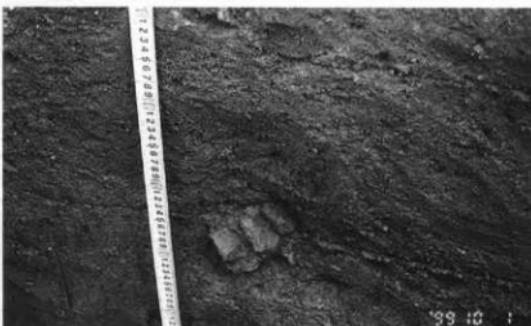
- 注（1） 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16 「馬場川遺跡発掘調査概要IV」 1976
- （2） 東大阪市建設局下水道部『平成10年度公共下水道第78工区管きよ築造工事図面1-2/11』
- （3） 前記の注（1）
- （4） 今村啓爾『称名寺式土器の研究（上）』 考古学雑誌第63巻第1号
- （5） 田中良之・松永幸男『広域土器分布の諸相－縄文時代後期西日本における類似様式の並立』古文化談叢第14集
- （6） 橋口尚武『加曾利E式土器の研究史考察－とくにⅢ・Ⅳ式土器を中心として－考古学雑誌第69巻第1号
- （7） 大阪府教育委員会、大阪府埋蔵文化財協会『池田寺遺跡IV』 1991
- （8） 馬場川IVでは、出土した縄文中～後期の土器から中津式・無文土器を引いたものを馬場川O式土器としている。
- （9） 中村友博『馬場川O式の型式学的位置について』月刊歴史手帳8巻4号
- （10） 中村徹也（編）『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要I・II』 1974・75
- （11） 三重県埋蔵文化財調査5『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』 1970
- （12） 奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報『天理市布留遺跡』 1958
- （13） 前記（9）の中で、中村氏は文様構成による解釈から京大KA→天理→馬場川O式の編年を推定している。

#### 主な参考文献

- 『里木貝塚』倉敷考古館研究集報第7号 1971
- 『仏並遺跡』大阪府埋蔵文化財協会 1986
- 『縄手遺跡1』縄手遺跡調査会 1971
- 『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館 1975
- 『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡発掘調査団 1973



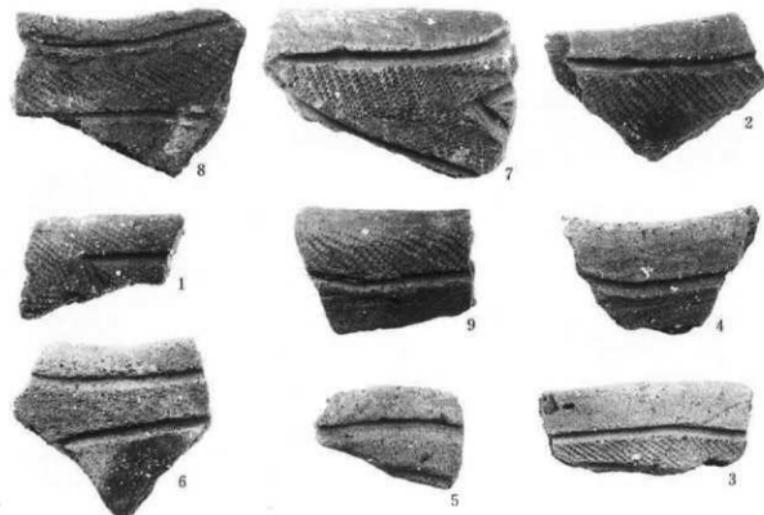
掘削風景（背景・生駒山麓）



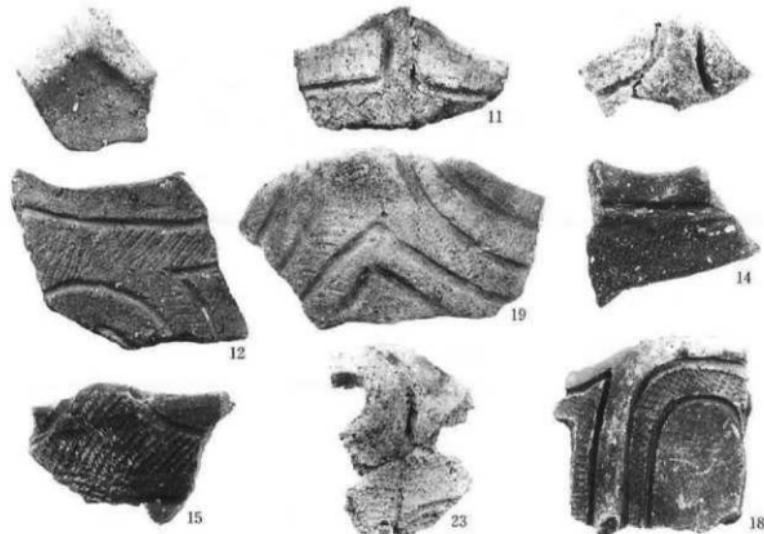
土器出土状況



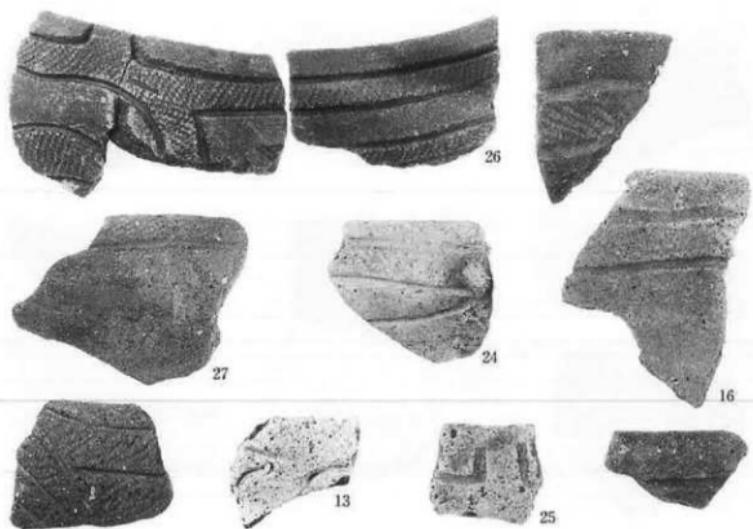
調査断面（指先は古墳時代包含層・A-26地区）



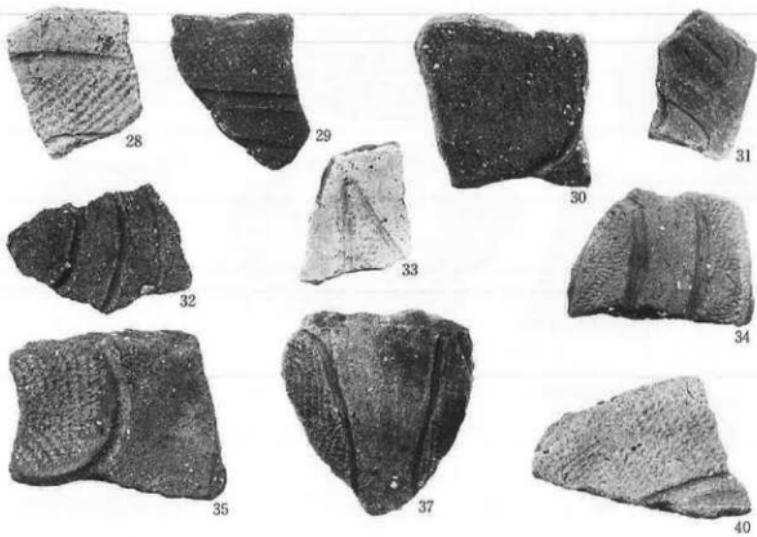
縄文時代後期土器（磨消し縄文）



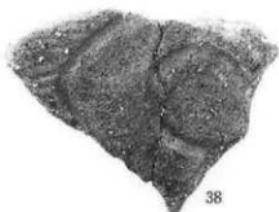
縄文時代後期土器（磨消し縄文）



縄文時代後期土器（磨消し縄文）



縄文時代後期土器（磨消し縄文）



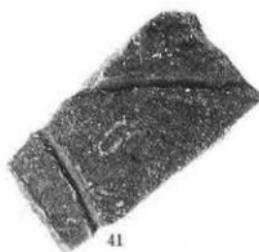
38



39



36

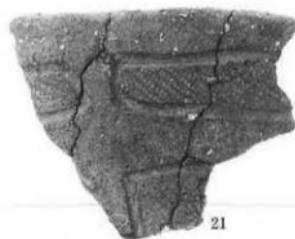


41



42

縄文時代後期土器（磨消し縄文）



21



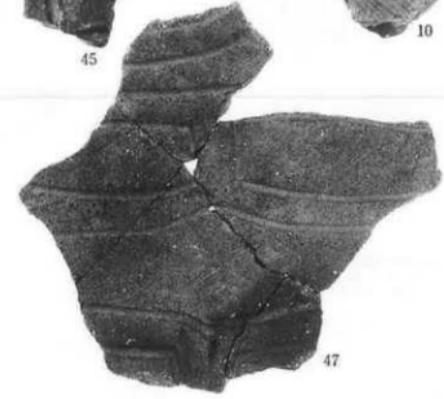
45



10

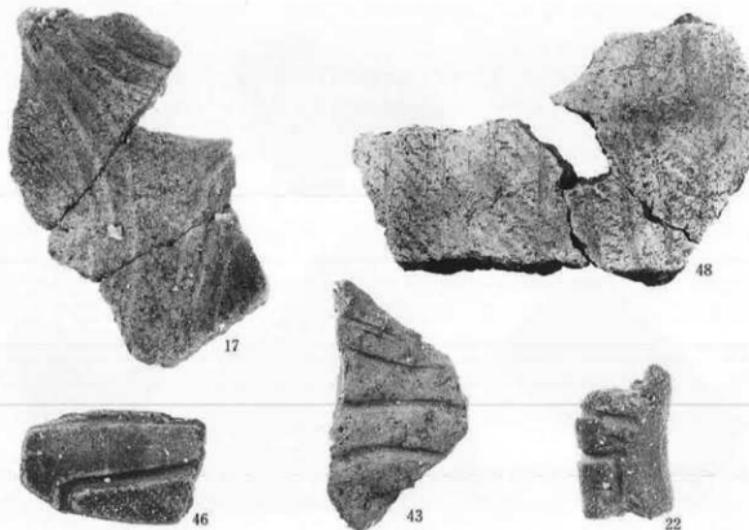


44

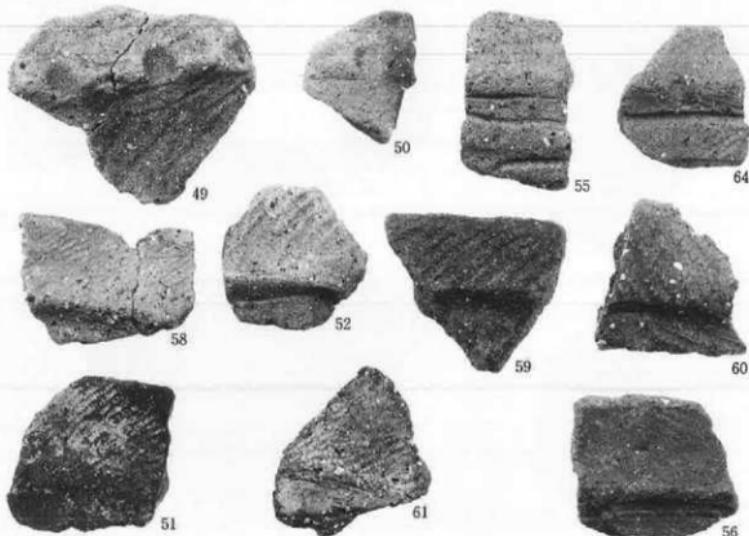


47

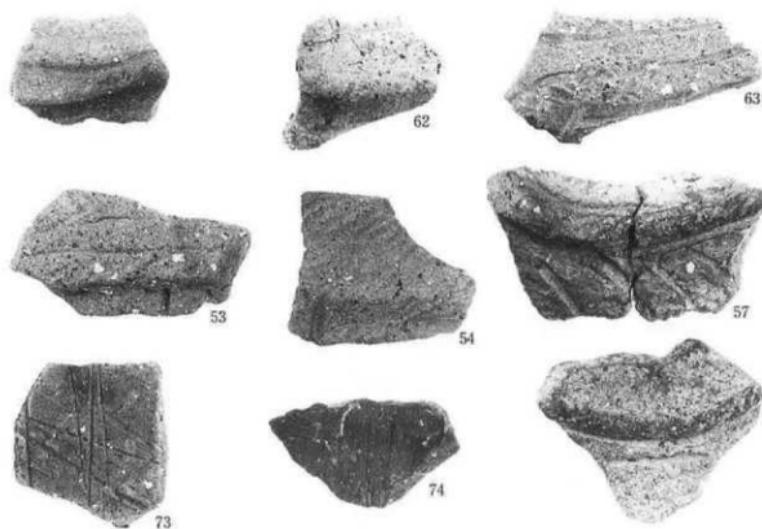
縄文時代後期土器（磨消し縄文）



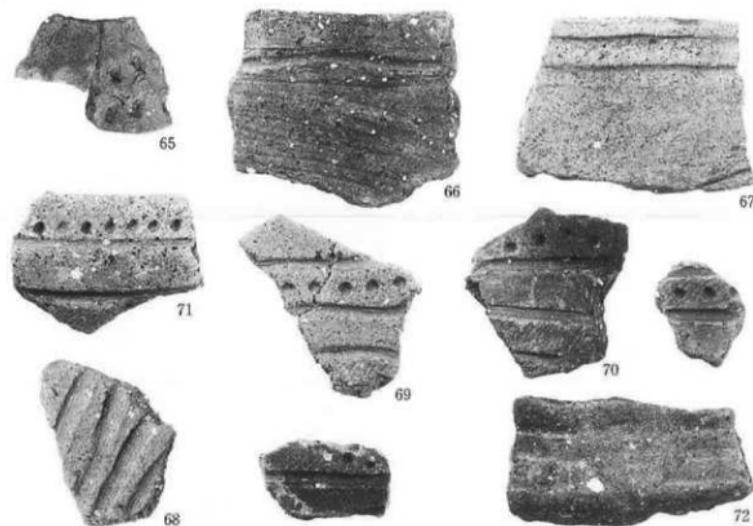
縄文時代後期土器（磨消し縄文）



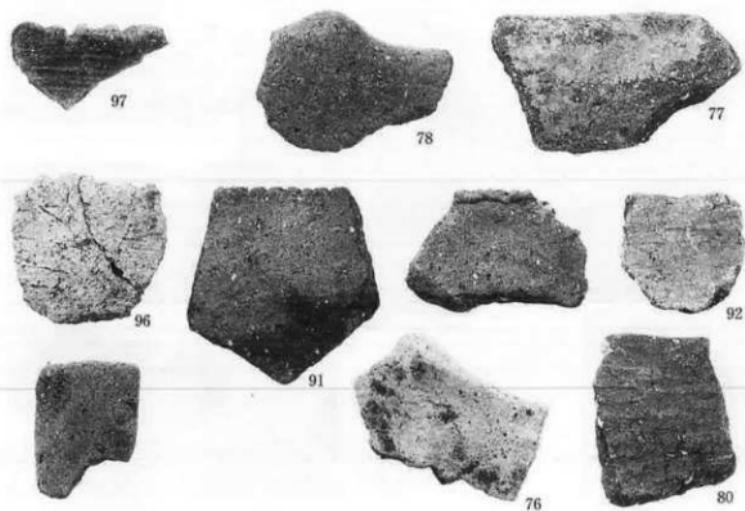
縄文時代後期土器（隆帯文）



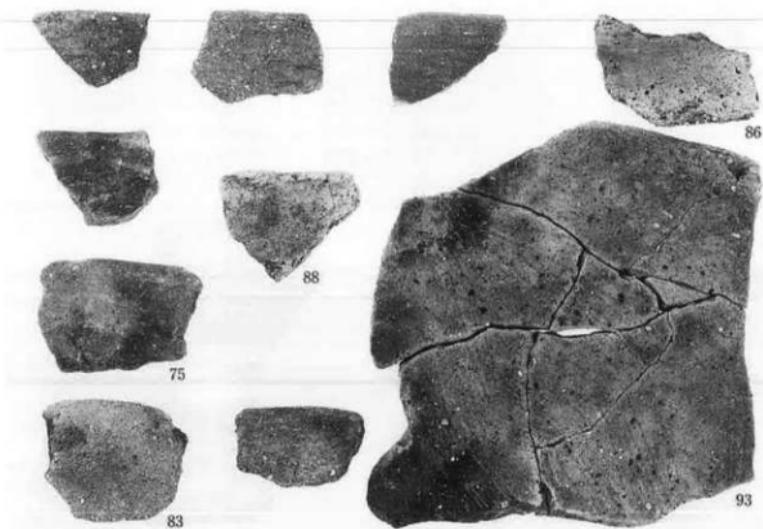
縄文時代後期土器（縄帯文・その他の土器）



縄文時代後期土器（その他の土器）



縄文時代後期土器（粗製土器）



縄文時代後期土器（粗製土器）



縄文時代後期土器（粗製土器）



縄文時代後期土器（磨消し縄文）



107



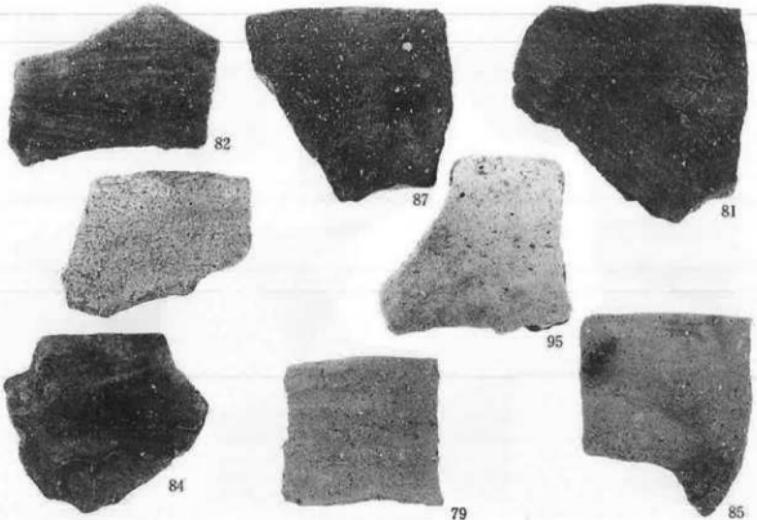
101



106



縄文時代後期・晚期土器（粗製土器・底部）



82

87

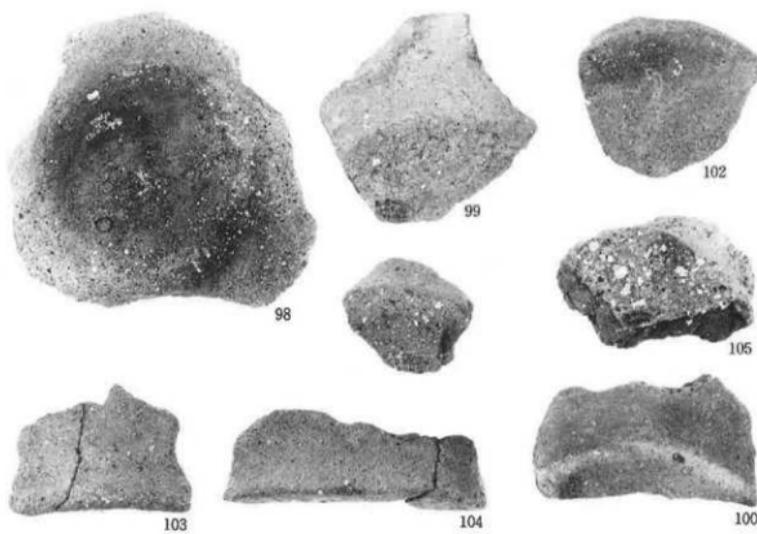
81

95

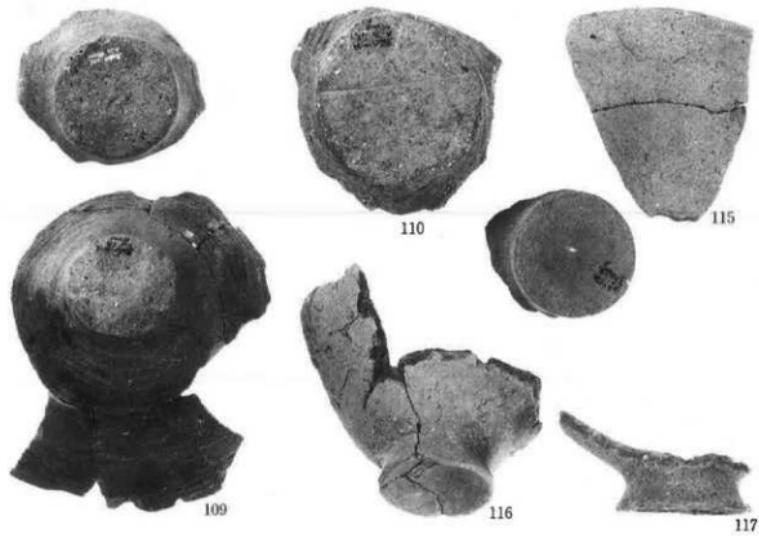
79

84

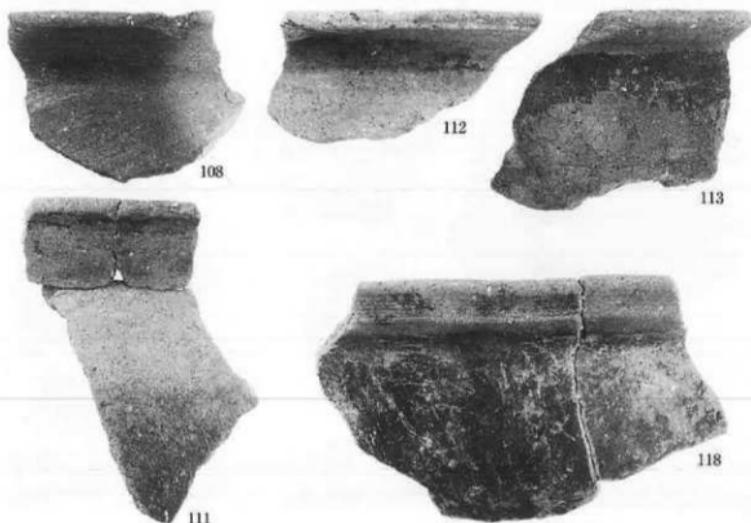
縄文時代後期土器（粗製土器）



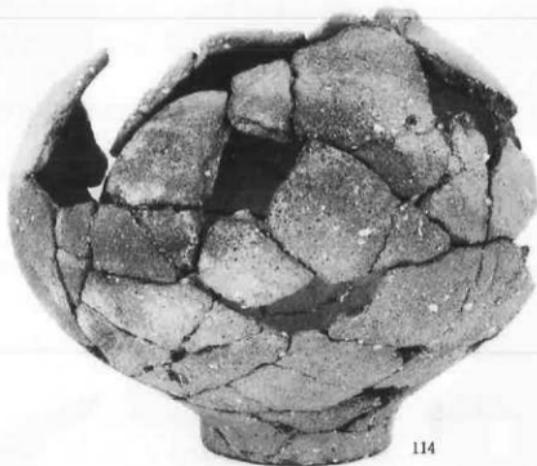
縄文時代後期土器（底部）



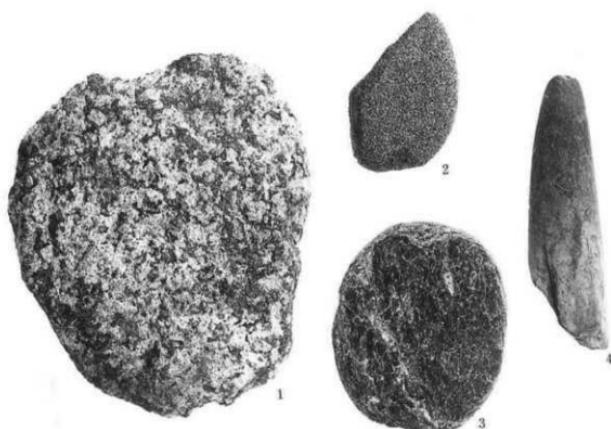
弥生時代後期土器



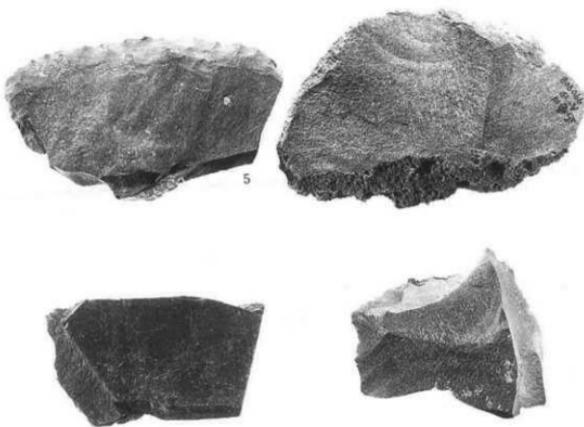
弥生時代後期土器



弥生時代後期土器



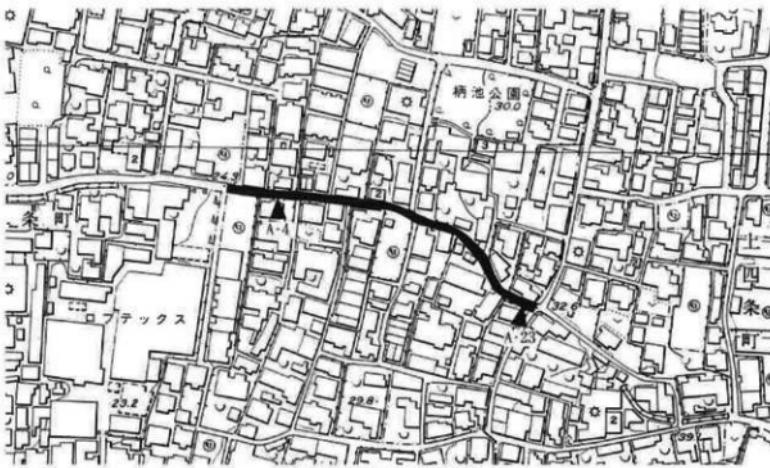
石器

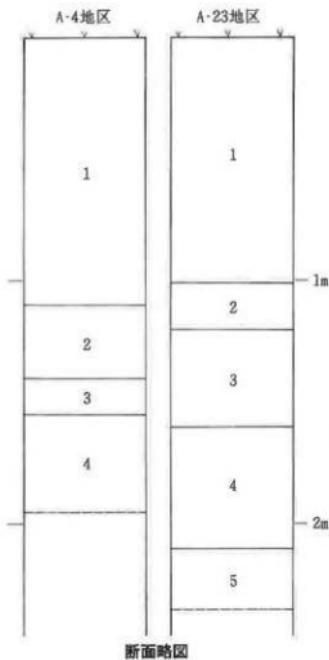


石器

## 第26章 山畠古墳群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第37工区管きよ塗造工事
2	調 査 地 点	東大阪市四条町513~441地内
3	調 査 面 積	356m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年9月1日~10月22日（延べ20日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は山畠古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9~1.1mで長さ約356mの間であり、開削工法である。





断面略図

### 1. 調査の概要

#### A-4 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色 (5YR3/1) 硫混じり粘質シルト。

第3層 オリーブ色 (5Y5/4) 砂礫。

第4層 黒色 (10YR8/8) 粘質土。

#### A-23地区的層序

第1層 盛土。

第2層 棕灰色 (7.5YR4/1) 中疊。

第3層 棕灰色 (10YR5/1) 中～大疊。

第4層 黑色 (5Y2/1) 大疊。

第5層 オリーブ黑色 (7.5Y3/2) 粗粒砂。

### 2.まとめ

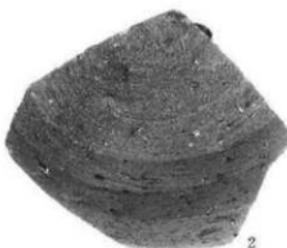
A-23地区付近で古墳時代の須恵器が微量出土した。壺(1)、杯蓋(2)があり、古墳より流出したものと思われる。



調査地遠景



調査地断面



出土遺物

## 第27章 善根寺山遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第71工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市善根寺町6丁目
3	調 査 面 積	9.4 m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年9月14日～10月22日（延べ7日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は善根寺山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9～1.3mで長さ約100mの間であり、開削工法である。





調査地断面



調査地遠景



調査風景

	X	Y
1		
2		
3		
4		
5		
6		-1m
7		
8		

断面略図

### 1. 調査の概要

#### 層序

第1層 盛土

第2層 黄褐色(2.5Y5/6)中粒砂混じり砂質土。

第3層 褐色(7.5YR4/3)粗粒砂混じり砂質土。

第4層 オリーブ灰色(5GY6/1)細粒砂混じり砂質土。

第5層 オリーブ灰色(5GY6/1)中粒砂混じり砂質土。

第6層 にぶい黄褐色(10YR5/4)細～中粒砂混じり砂質土。

第7層 にぶい黄褐色(10YR5/8)細粒砂混じり砂質土。

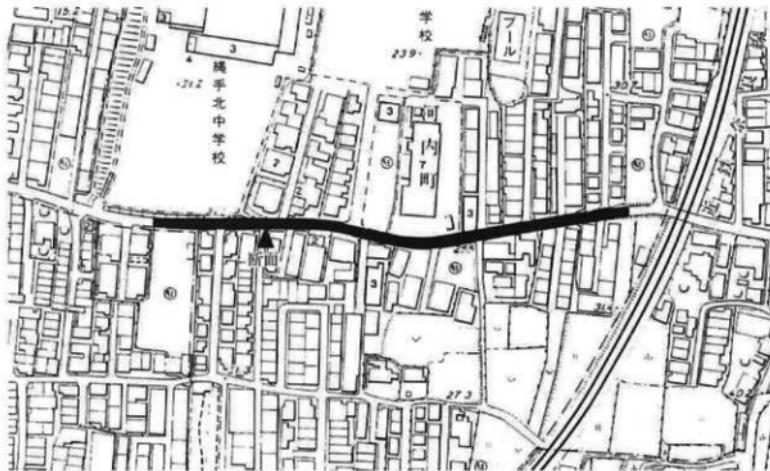
第8層 明黄褐色(10YR6/8)細粒砂混じり砂質土。

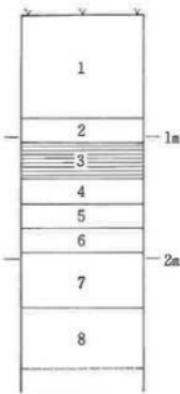
### 2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構、遺物は検出できなかった。盛土より下は、いわゆる池山であった。

## 第28章 河内寺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成10年度公共下水道第59工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市河内町457~410地内
3 調 査 面 積	281m <sup>2</sup>
4 調 査 期 間	平成11年9月14日~10月19日(延べ13日)
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は河内寺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9mで長さ約331mの間であり、開削工法である。





断面略図



調査地遠景

### 1. 調査の概要

#### 層序

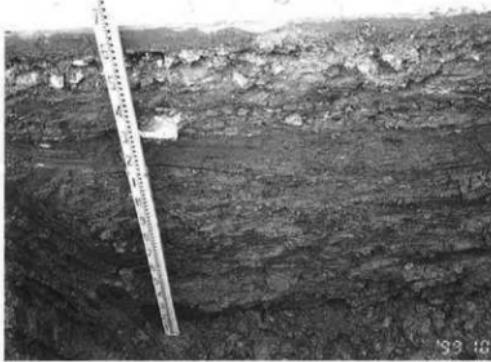
- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黑色礫混じりシルト。
- 第3層 黒褐色砂質シルト。  
遺物包含層。
- 第4層 緑黒色礫混じり粘質シルト。遺物包含層。
- 第5層 暗青灰色砂礫。
- 第6層 暗緑灰色粘質土。
- 第7層 暗緑灰色シルト粘土。
- 第8層 緑灰色粘土。

### 2. 出土遺物

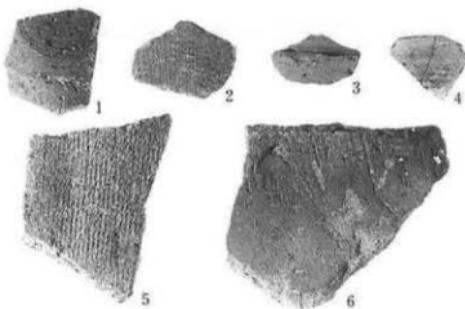
須恵器（1～4）、土師器、瓦（5・6）が出土した。図化できるものはなかった。

### 3. まとめ

遺物包含層は西側で確認できたが、谷筋内の可能性がある。遺構は検出できなかった。



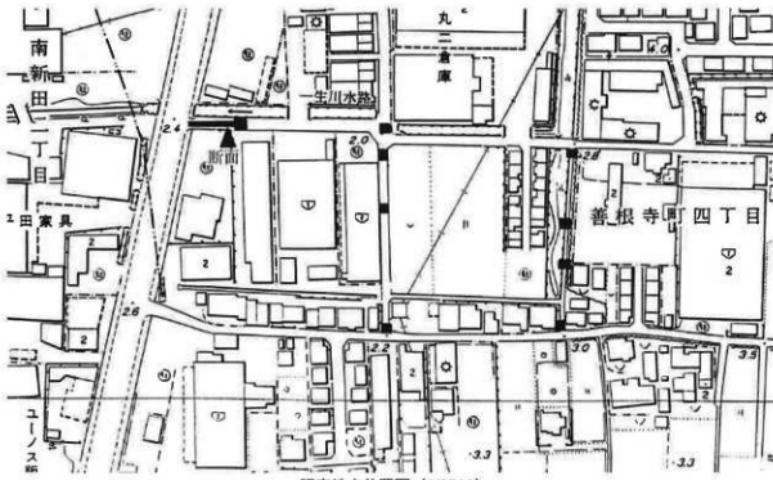
調査地断面



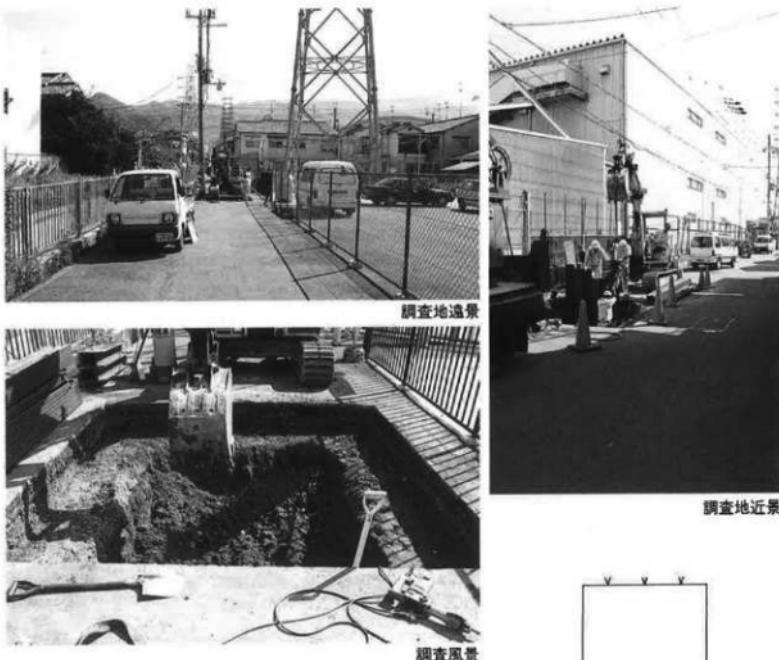
出土遺物

第29章 中壇内遺跡の調査

名 称		内 容
1	事 業 名	平成 10 年度公共下水道第 5 工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市善根寺町 4 丁目
3	調 査 面 積	6 1 m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成 11 年 9 月 28 日～11 月 24 日（延べ 9 日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は中塙内遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は推進工法と一部開削工法である。推進工法による立坑は 9ヶ所、開削工法の範囲は幅約 1 m で長さ約 29 m である。



### 調査地点位置図 (1/2500)



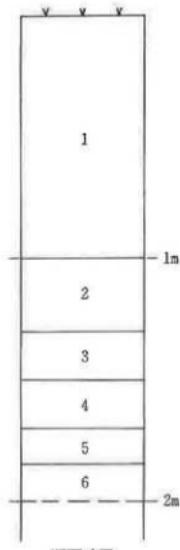
## 1. 調査の概要

### 層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 緑灰色 (7.5GY5/1) 細粒砂。
- 第3層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 細粒砂。
- 第4層 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土。
- 第5層 青灰色 (5BG5/1) 中粒砂
- 第6層 暗青灰色 (5B4/1) 粗粒砂混じり砂質土。

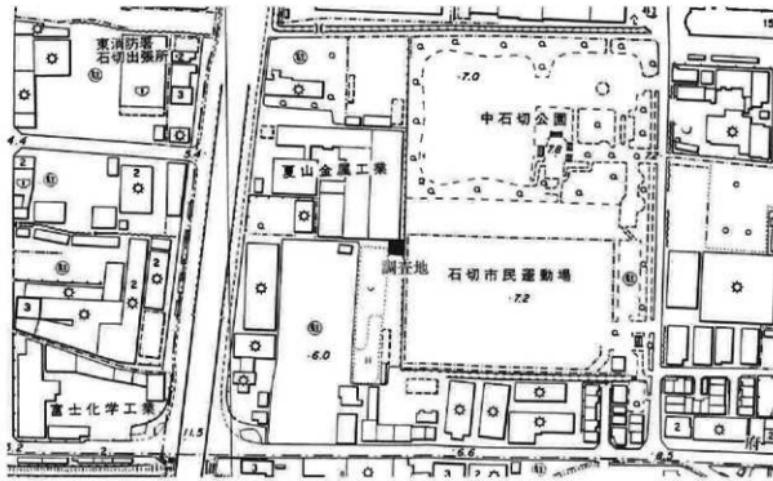
## 2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構、遺物は検出できなかった。



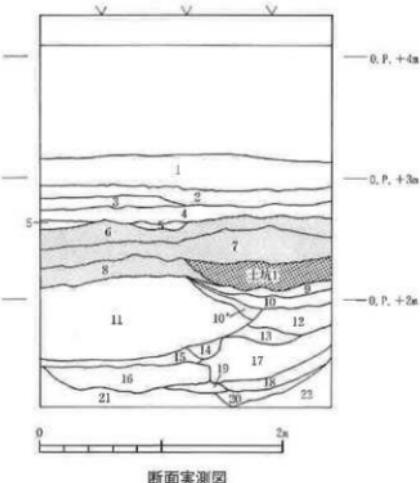
## 第30章 和泉遺跡の第1次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第58工区管きよ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市中石切町5丁目7893~2913地内
3	調 査 面 積	19m <sup>2</sup>
4	調 査 期 間	平成11年10月18日~10月19日(延べ2日)
5	報 告 担 当	永田朋子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は和泉遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。工事予定地は石切市民運動場の西側に位置する。工事は推進工法であり、立坑の1ヶ所で実施した。調査範囲は6.0×3.2mである。



## 1. 層位

- 第0層 盛土
- 第1層 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂混じり粘質  
土5mm以下の礫・植物遺体多く含む。
- 第2層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 巨礫混じり  
粗粒砂 (10cm大の礫中量含む。上位  
にローリングを受けた土師器片数点  
検出。)
- 第3層 灰白色 (7.5Y8/1) 砂混じり粗粒砂  
5mmいかの礫多い。湧水層。
- 第4層 灰白色 (5Y7/1) 中粒砂、0.5mm以下  
の砂と1cm大の礫少量含む。
- 第5層 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト。
- 第6層 オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘質土。布  
留式期の遺物包含層。
- 第7層 黒色 (10Y2/1) 粘土・炭化物少量含  
む。布留式期の遺物包含層。
- 第8層 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘土。水分含有  
量多い。布留式期の遺物包含層。
- 第9層 灰白色 (2.5GY8/1) 細粒砂。1mm以  
下の砂。
- 第10層 灰白色 (10Y8/1) 砂礫。砂礫含有比率1cm以下 : 1cm以上 = 7 : 3。湧水層。
- 第10'層 第10層と同色。1cm以下の礫層。第11層との切り合い不明瞭。
- 第11層 灰白色 (5Y7/1) 巨礫層。10cm大の礫上位に多量に含む。H-礫が逆転化して上位にきている  
ことからオーバーフローした洪水砂とも考えられる。とすると河道は当調査区より東にある  
可能性が高い。
- 第12層 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂混じり粘土。
- 第13層 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂混じりシルト。2mm以下の礫含む。
- 第14層 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂混じり粗粒砂。ブロック状にオリーブ黒色 (10Y3/1) 粘質土混入。
- 第15層 暗青灰色 (5BG4/1) 細粒砂。
- 第16層 暗青灰色 (5BG4/1) 砂混じり粗粒砂。2.5cm大の礫多量に含む。
- 第17層 緑灰色 (10GY6/1) シルト。
- 第18層 灰色 (N4/) 砂混じり粘質土。1cm大の礫含む。
- 第19層 暗青灰色 (5BG5/1) 細粒砂。
- 第20層 灰色 (10Y4/1) 砂混じり粗粒砂。1.5cm大の礫中量含む。
- 第21層 暗青灰色 (5BG5/1) 巨礫混じり粗粒砂。5cm大の礫多量に含む。ブロック状にオリーブ黒色  
(10Y3/1) 粘土を含む。
- 第22層 青灰色 (5BG5/1) 粗粒砂。ラミナが見られる。
- 土坑1 堀土は1層で、黒褐色 (5YR2/1) 砂混じり粘土。3mm以下の礫中量含む。炭化物多量に含む。  
第8層から切り込み、布留式期の遺物片を含む。



断面実測図



遺構平面実測図

## 2. 遺構

第8層上面で古墳時代前期の土坑を検出した。調査区の北東端であった為全形は不明である。規模は幅85cm以上、深さ約25cmを測る。土坑内には炭化物が集中して堆積していたが、性格は不明。南半分は重機・残土処理の関係上調査を断念した。

## 3. 出土遺物

遺物を包含する層（第6・7層）と土坑内から古墳時代前期（布留式）の土器が出土した。器種は壺・高杯・小型丸底壺がある。土坑から出土したものは1・2・7・9・12である。

1～6は壺の口縁部である。3・5は口縁端部に明瞭な端面をもたずくまとまり、口縁部が心持ち内弯している。それ以外は、口縁端部を内傾させて肥厚させ、口縁部は内弯しているものである。

7・8は壺部であり、高杯か器台か判断が難しい。

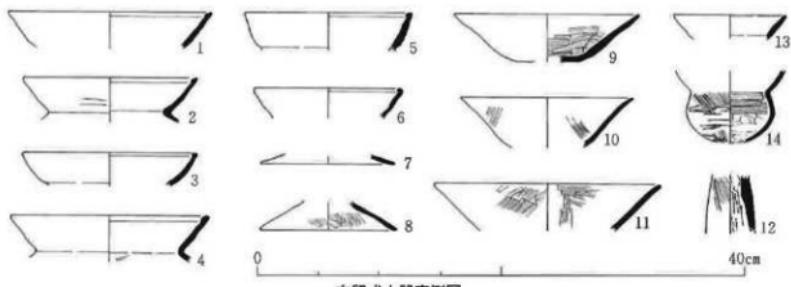
9～12は高杯で、9～11は口縁部が直線的に外側に伸びているものである。

13・14は小型丸底壺である。13の口縁端部は面をもって丸く終えるものである。14は器高の約半分の口縁高をもち、扁球形の体部を有する。丁寧な作りで、口縁部の内外部はヨコナデ、体部外面はハケメ調整の後

ヘラミガキが施されている。内面は上方が横方向のハケメ、下方はナデ調整である。

## 4. まとめにかえて

和泉遺跡では本格的な調査がほとんどされていなかった為、実態が不明な点が多い遺跡であった。今回の調査により、既に確認されていた弥生時代中期以外の、古墳時代前期（布留式）の土器を含む遺構を新たに確認した。調査の範囲が狭い為に詳細は不明であるが、調査地周辺に遺構面が広がる可能性が推測される。



布留式土器実測図



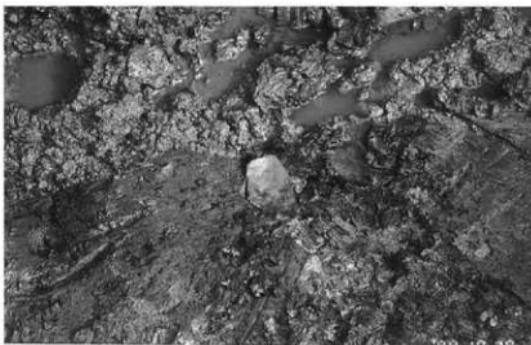
土坑 1 検出状況



重機掘削風景



調査地全景



土坑 1 内土器出土状况



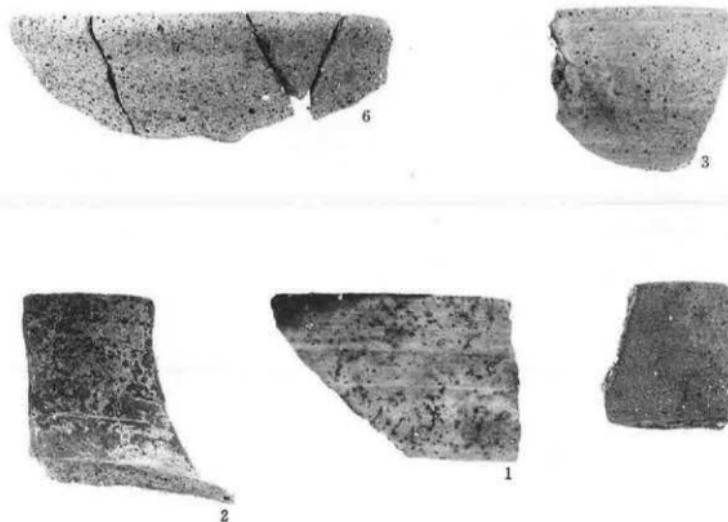
北壁断面



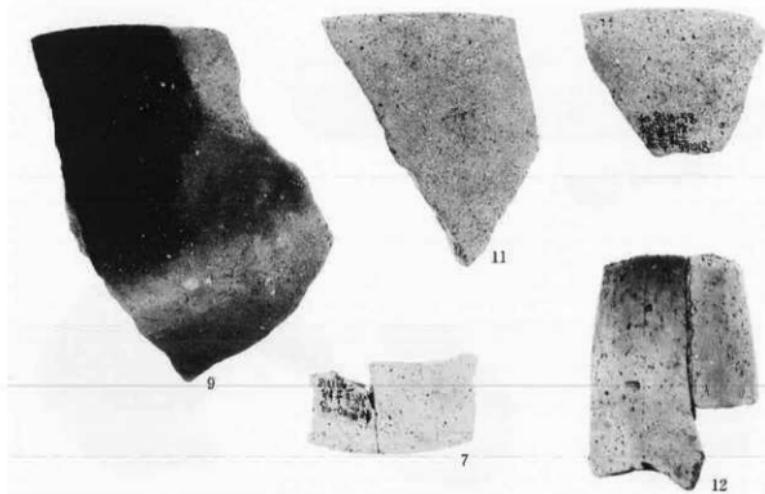
完掘状况北壁断面



1. 土師器小型丸底壺・甕



2. 土師器甕



3. 土師器高杯



4. 土師器高杯

東大阪市下水道事業関係  
発掘調査概要報告

- 平成11年度 -

平成12年3月31日

発行所 東大阪市教育委員会

印刷所 (株)近畿印刷センター